史　跡

上之国勝山館跡XX

― 平成10年度発掘調査環境整備事業概報 ―

1999・3

上ノ国町教育委員会

史　跡

上之国勝山館跡XX

― 平成10年度発掘調査環境整備事業概報 ―

1999・3
上ノ国町教育委員会

序

啓蟄も過ぎ、松前の海近く南向きの崖土から、早春の代表的な山菜アザミが貌を覗かせています。山菜が食卓に彩りを添える松前の春の始まりです。

昨年の５月に始めた勝山館跡の遺構確認調査の範囲は、大手空壕の外第一平坦面南西部分約800㎡、約６ヶ月の土と汗にまみれる作業でしたが、館跡からの遠望は爽快で、海風がほてる頬を心地よく撫でてくれました。

この間、文化庁記念物課を始め関係各機関の諸先生、調査研究専門員としてご指導をお願いしている朝尾直弘、網野善彦、石井進、榎森進、仲野浩の諸先生には遠路お越しいただき、懇切丁寧なご指導ご助言を賜りました。また、建築学の立場からご指導を頂戴しております文化学院の鈴木亘先生にも貴重なご助言を賜りました。心より厚く御礼申し上げます。

さて、今年度の発掘調査の成果の中で物議を醸したのが、舶載白磁皿の高台裏に刻印された記号です。アイヌの「シロシ」（所有印）ではないか、さらに一歩進めて同一父系集団の記号「シネ・イトゥクパ」ではないかという議論が、青森県北津軽郡市浦村との友好町村締結10周年を記念して行われたミニシンポジウムの会場で熱っぽく展開され、終了後には、町内の郷土史研究家から、山人の木印（杣の持分を表示する占有記号）に酷似しているとの指摘も頂戴しました。

自他を区別する所有印を刻印する対象物の違い－漆器椀・白磁皿・杣木－や、出土遺物に印された声なき記号の背後に何が視えてくるか、歴史学や民俗学、文化人類学など周辺諸学の力を借り、更なる検証を進めるとともに、そのプロセスを広く公開し、多くの人々の共感と理解を得ながら、いきいきとした地域史像を地域の人々と共有したいと願っています。

関係各機関、諸先生方には、より一層のご助言ご叱正を賜りますよう切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶といたします。

平成11年３月

北海道檜山郡上ノ国教育委員会
教育長　上野秀勝

本文目次

序
本文目次／挿図目次／表目次
例言／引用参考文献

Ⅰ　調査の概要…… 1
Ⅱ　遺構確認調査……11
　1．調査目的……11
　2．検出遺構と出土遺物……11
　　(1)　位置・概要……11
　　(2)　層序……11
　　(3)　掘立柱建物跡……11
　　(4)　竪穴建物跡……22
　　(5)　土壙……31
　　(6)　通路跡……43
　　(7)　地割……43
　　(8)　出土遺物の概要……51
Ⅲ　小括……58
Ⅳ　保存処理……61
Ⅴ　まとめ……62

挿図目次

第１図　遺跡地形図・調査区位置図…… 2
第２図　調査区範囲図…… 3
第３図　調査区土層堆積図…… 5
第４図　調査区遺構配置図…… 9
第５図　建物跡想定異同図……13
第６図　第１号建物跡想定図……15
第７図　第２号建物跡想定図……16
第８図　第３号建物跡想定図……17
第９図　第４号建物跡想定図……19
第10図　第５号建物跡想定図……20
第11図　第６号建物跡想定図……21
第12図　第94号竪穴建物跡平面図他……24
第13図　第95号竪穴建物跡平面図他……25
第14図　第96号竪穴建物跡平面図他……26
第15図　第96号竪穴建物跡炭・焼土範囲平面図他 ….27
第16図　第97号竪穴建物跡平面図他……28
第17図　第98号竪穴建物跡・土壙41平面図他…29
第18図　土壙23平面図他……30
第19図　土壙48と集辺地区銭の出土状況……32
第20図　土壙48平面図化……33
第21図　土壙48出土銅銭拓影……34
第22図　遺物分布図１（印のある白磁皿）……35
第23図　遺物分布図２（白磁皿）……36
第24図　遺物分布図３（陶磁器）……37
第25図　遺物分布図４(鍛冶・金属製品)……38
第26図　遺物分布図５（鉄製品種別）……39
第27図　調査区出土遺物・参考図……40
第28図　鞴羽口出土状況図他……41
第29図　盛土堆積図……42
第30図　調査区出土遺物（陶磁器）……46
第31図　調査区出土遺物（越前・珠洲擂鉢）…47
第32図　調査区出土遺物(鉄製品・鍛冶関連遺物)….48
第33図　調査区出土遺物（銅製品・骨角器）…49
第34図　調査区出土遺物（石製品・土製品）…50

表目次

表１　南北セクション東壁土層…… 7
表２　東西セクション南壁土層…… 7
表３　南北セクション東壁土層…… 8
表４　第94号竪穴建物跡土層観察表……24
表５　第95号竪穴建物跡土層観察表……25
表６　第96号竪穴建物跡土層観察表……27
表７　第96号竪穴建物跡土層観察表……27
表８　第97号竪穴建物跡土層観察表……28
表９　土壙23土層観察表……30
表10　土壙41土層観察表……30
表11　土壙48土層観察表……33
表12　土壙48出土銭一覧表……34
表13　土壙48出土銭集計表……34
表14　盛土土層観察表……42
表15　出土遺物観察表（陶磁器）……54
表16　出土遺物観察表（鉄製品）……55
表17　出土遺物観察表（銅製品他）……56
表18　出土遺物集計表（陶磁器）……57
表19　出土遺物集計表（鉄製品他）……57

写真図版目次

ＰＬ．１　調査区全景
ＰＬ．２　遺構検出状況
ＰＬ．３　出土遺物
ＰＬ．４　出土遺物
ＰＬ．５　調査区全景
ＰＬ．６　遺構検出状況
ＰＬ．７　遺構検出状況
ＰＬ．８　遺構検出状況
ＰＬ．９　遺構検出状況
ＰＬ．10　遺構検出状況
ＰＬ．11　遺構検出状況
ＰＬ．12　遺物出土状況
ＰＬ．13　遺構検出状況
ＰＬ．14　遺構検出状況
ＰＬ．15　遺構検出状況
ＰＬ．16　遺構検出状況
ＰＬ．17　出土遺物
ＰＬ．18　出土遺物
ＰＬ．19　出土遺物
ＰＬ．20　出土遺物

附図　調査区遺構配置図

例　　言

1．本書は史跡上之国勝山館跡の平成10年度発掘調査及び環境整備事業についての概要をまとめたものである。

2．本年度の発掘調査は次の体制で臨んだ。

調査主体者　上ノ国町教育委員会
　教育長　上野秀勝
指導　上ノ国町文化財保護審議会特別委員
　福山工業大学教授　足達冨士夫
　文化学院講師　鈴木亘
　同勝山館跡調査研究専門員
　元国立歴史民俗博物館館長　石井進
　京都橘女子大学教授　朝尾直弘
　神奈川大学日本常民文化研究所　網野善彦
　東北学院大学教授　榎森進
　東北芸術工科大学特任教授　仲野浩
主管　上ノ国町教育委員会文化財課　課長　松崎水穂　課長補佐兼博物館・整備係長　渡部孝之　文化財係長　斉藤邦典　博物館・整備係　松田輝哉　笠谷将人　嘱託調査員　三浦英俊　臨時事務補　細川より子
勝山館跡修景技術専門員　北島譲（４月１日～９月30日）山崎淳一（10月１日～）（上ノ国町建設課長）
発掘担当者　学芸員　松崎水穂
調査員　　学芸員　松田輝哉
調査補助員　山崎洋子　笠谷奈智子　竹内江美子　一戸賢太郎　阿部知子　田中恵子（東北芸術工科大学）橋口亘（奈良大学）若松重弘（山口大学）
作業員　青木千秋　浅原すみ　井越祥子　小田川喜美子　大谷弓子　川合冴子　川村恵司　川口泰子　笹浪竹志　杉山稲子　鈴木千春　住吉春子　田畑康子　沼沢国枝　八田綾子　八田揚子　藤田裕美　松本津枝子　目黒加奈子　森恵美子　今村昌樹　川嶋瑞江　高島博志　内藤勲　西川直明　細川キヨ子　松岡孝広　柳原由里子　山田良子
保存処理作業員　木村洋子　油谷和枝

3．本書の編集は松崎、松田が協議の上、松田が行った。
本書の作成はⅠ～Ⅳを松田、Ⅴを松崎の分担で行った。尚遺物観察表・集計表は山崎、土層観察表は竹内、掘立柱建物跡想定図は笠谷の各補助員が作成したものに基づいている。

4．挿図の作成は担当者、調査員の指示により調査補助員、作業員が行った。

5．土層の土色は「新版標準土色帖」（農林水産技術会事務局）を遺物の色調名は「標準色彩図表Ａ」（日本色研事業株式会社）を用い、目測で比定した。

6．本書の調査時の写真は松崎、松田、川村恵司が撮影した。

7．調査にあったては次の関係機関と各位に多大な御指導と御援助を賜った。
文化庁記念物課　田中哲雄　本中眞　伊藤正義　磯村幸男　坂井秀弥、同建造物課　益田兼房　大和智、北海道教育庁文化課　木村尚俊　大沼忠春　種市幸生　千葉英一　貫井隆三　安岡政光　清水孝幸、国立歴史民俗博物館　千田嘉博、奈良国立文化財研究所　沢田正昭　高妻洋成、文化財建造物保存技術協会　松本優　田中洋子、札幌学院大学　船津功、弘前大学　斉藤利男、岩手県立大学　誉田慶信、筑波大学　松本建速、富山大学　宇野隆夫、信州大学　笹本正治、工学院大学　渡辺定夫、神奈川大学　田島佳也　津田良樹、昭和女子大学　児島恭子、跡見学園女子大学　荒木伸介　泉雅博、九州大学　西谷正、釧路湖陵高等学校　中村和之、北海道開拓記念館　小林幸雄、市立函館博物館　長谷部一弘、青森県郷土館　三宅徹也、八戸市博物館　佐々木浩一、平賀町郷土資料館　小笠原豊　渡部学、秋田県公文書館　煙山英俊、八王子市郷土資料館　土井義夫、愛知県陶磁資料館　楢崎彰一、北海道埋蔵文化財センター　越田賢一郎　高橋和樹　石井淳平、山形県埋蔵文化財センター　山口博之　高桑登、瀬戸市埋蔵文化財センター　藤澤良祐　金子健一、三重県埋蔵文化財センター　田阪仁、堺市立埋蔵文化財センター　森村健一、乙部町教育委員会　森広樹　藤田巧、今金町教育委員会　寺崎康史、函館市教育委員会　佐藤智雄、七飯町教育委員会　石本省三、南茅部町教育委員会　福田祐二、石狩市教育委員会　石橋孝夫、

江別市教育委員会　佐藤一志、伊達市教育委員会　大島直行　青野友哉　小島朋夏、虻田町教育委員会　角田隆志　角田弥生、静内町教育委員会　薮中剛司　斉藤大朋、青森県教育委員会　鈴木和子、浪岡町史編纂室　工藤清泰、市浦村教育委員会　榊原滋高、南部町教育委員会　永井治、中里町教育委員会　斉藤淳　愛知県史編纂室　城ヶ谷和広、知覧町教育委員会　上田耕、今帰仁村教育委員会　山内昌治　玉城繁　宮城弘樹、勝連町教育委員会　宮城伸一、漆器文化財科学研究所　四柳嘉章、中里忠寛、中里紀元、三輪廉浩、澤井玄　落合治彦　栗林知広(順不同　敬称略)

引用参考文献

『綜合日本民俗語彙』　1955・56年　民俗学研究所編
『松前町の文化財』　1976年　松前町教育委員会
『釣針』　1976年　直良信夫
『新版仏教考古学講座第５巻』　1984年　石田茂作監修
『出土渡来銭－中世－』　1986年　坂詰秀一編
『供養具と僧具』日本の美術283　1989年　鈴木規夫
『民具実測の方法Ⅰ～Ⅲ』　1989年　神奈川大学日本常民文化研究所
『日本海域の土器・陶磁器　中世編』　1989年　吉岡康暢
『亮昌寺資料目録』　1993年　(財)アイヌ民族博物館
『中世須恵器の研究』　1993年　吉岡康暢
『概説　中世の土器・陶磁器』　1995年　中世土器研究会編
『瀬戸市史　陶磁史篇四』　1994年　瀬戸市
『中世の出土銭』　1994年　永井久美男編
『中世の出土銭　補遺Ⅰ』　1996年　永井久美男編
『日本出土銭総覧　1996年版』　1996年　兵庫埋蔵銭調査会
『日本民具辞典』　1997年　日本民具学会
『東北地方の在地土器・陶磁器Ⅱ』　1998年　東北中世考古学会・福島県考古学会
『中・近世の北陸』　1998年　北陸中世土器研究会
『越前朝倉氏・一乗谷　眠りからさめた戦国の城下町』　1998年
『札前』　1985年　松前町教育委員会
『史跡志苔館跡』　1984～86年　函館市教育委員会
『浪岡城跡Ⅲ～Ⅶ』　1979～84年　浪岡町教育委員会
『普正寺遺跡』　1984年　石川県埋蔵文化財センター
『特別史跡朝倉氏遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅴ』　1979～96年　福井県教育委員会　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅴ』　1992～96年　草戸千軒町遺跡調査研究所
『今帰仁城跡』1983年　今帰仁村教育委員会
『漳州窯』1997年　福建省博物館
『史跡上之国勝山館跡Ⅰ～ⅩⅨ』　1980～98年　上ノ国町教育委員会
「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究２』　1982年　上田秀夫
「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究２』　1982年　小野政敏
「福建省漳州窯系陶磁器（スワトウ・ウエア）について」『大阪城跡の発掘調査４』（財）大阪文化財センター　1994年　森村健一
「北方からの視座」『岩波講座日本通史別巻２』　1994年　松崎水穂

Ⅰ　調査の概要

1　調査

史跡上之国勝山館跡は、松前氏の祖武田信広により15世紀後半頃に築城され、その後慶長（1596～1614）の初め頃まで存在したという伝承を持つ山城である。昭和52年、「道南十二館」の一つとして知られる「花沢館跡（上ノ国町字勝山）」と共に国の史跡に指定された。昭和54年度より環境整備事業に伴う発掘調査を実施し、本年でその調査も20年目を迎え、尚継続中である。

史跡指定地は、600基以上が想定される中世墓「夷王山墳墓群」を含め約35万㎡に及ぶ。館中心部は、夷王山から北東方向、寺ノ沢、華ノ沢に挟まれた丘陵にある。中心部は掘切り・切岸・盛土により作られた大きな三つの平坦面から成る。曲輪名の伝承が無いので、北から壕外にある「第一平坦面」、壕内にある「第二・三平坦面」と仮称している。その内、第二・三平坦面は中央に縦貫する通路があり、平坦面端部に柵列を巡らしていたことが、発掘調査で明らかになっている。

第一平坦面は面積約5,000㎡、第一平坦面と第二平坦面の間には、二重の壕が掘りきられている。この北東部には虎口が想定されている。又大きな段により、北半部地区と南半部地区の二つに分けられそうである。北半部地区は中央部が高く、左右は沢に向かって雛壇状に低くなる。この雛壇状の地形は、段や溝で画された地割の痕跡と思われる。南半部地区は空壕に接し、平面形が台形状である平坦な一つの面として捉えられ、北半部の様な地割痕跡と想定される雛壇地形は、特に認められない。昭和63・平成元・２年度の調査で、二重の壕跡、壕を渡る橋のものと思われる柱穴、南半部の平坦面で掘立柱建物跡10棟、竪穴建物跡３棟等を検出している。又、今年度調査地区の南東部で中央通路跡と考えられるものを検出した。

この第一平坦面の南半部地区西半と北半部地区西半の一部が、本年度の調査地区にあたる。

今回、南半部地区では地割一つ掘立柱建物跡六棟（過年度検出のものと一部異動があり、後述する）と竪穴建物跡一棟、北半部地区では、地割三つ、竪穴建物跡三棟等を検出した。

第二平坦面は面積約7,000㎡、３つの平坦面の中で最大規模である。北西部には勝山館の中心建物とみられる「客殿」跡がある。さらに石敷礎石建物跡、銅製品鋳造遺構、大型井戸、矢倉門様の４本柱建物跡など多種多様の遺構があり、中央通路の両側には地割が多数展開し、内部に掘立柱建物跡、竪穴建物跡、土壙などを多数検出している。

第三平坦面は、面積約3,500㎡、南西部に向かって丘陵の幅が狭くなる所であり、館の搦手口でもある。最高所には「館神八幡宮」が祀られていた。過年度の調査で、掘立柱建物跡、竪穴建物跡、搦手門跡などを検出している。

2　調査法

調査方法の概要は以下の通りである。発掘区の設定は、20ｍ×20ｍの大グリッドを分割した４ｍ×４ｍの小グリッド方式を採用した。また、建物の概要を知るために柱穴配置略図を(縮尺１／40)平板測量で作成し、柱穴間の重複・覆土の状態を観察しながら掘り下げた。焼土・土壙などの遺構は半裁し、セクション図を作成後掘り下げ、土壌のサンプリングを行った。遺物の取り上げ方法は、Ⅰ・Ⅱ層は４ｍ×４ｍのグリッドを２ｍ×２ｍに４分割して一括して取り上げ、遺構面のⅢ層は実測図に記録した後にレベルを付して取り上げた。尚、遺構図は柱穴・溝・竪穴建物跡は１／20、焼土・土壙は１／10、遺物分布図は１／20で、遺物出土状況微細図は１／５もしくは１／２で、遣り方測量で作成した。

3　調査経過

５月11日　作業員に作業内容、就業規則その他説明。その後、作業開始。

５月12日　人力による表土層の除去作業。

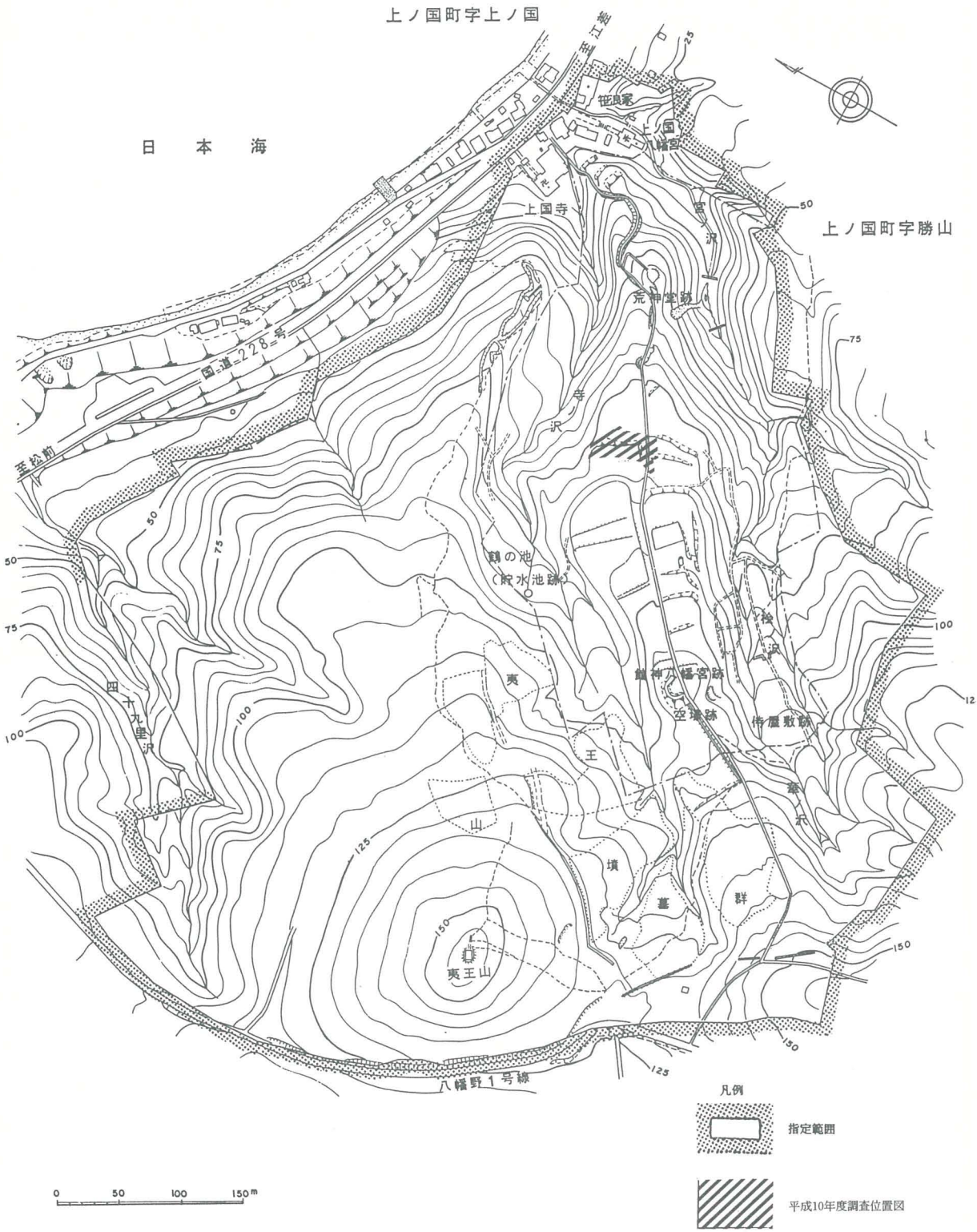
６月上旬　表土層の除去ほぼ完了。空壕Ｂに接する、調査区南西部の調査。

６月14Ｋ15・20区周辺で、高台裏に印が記された白磁端反皿出土。14Ｊ16区で鞴羽口出土。14Ｌ５・14Ｋ１区付近で炭化材出土、第94・95号竪穴建物跡調査。

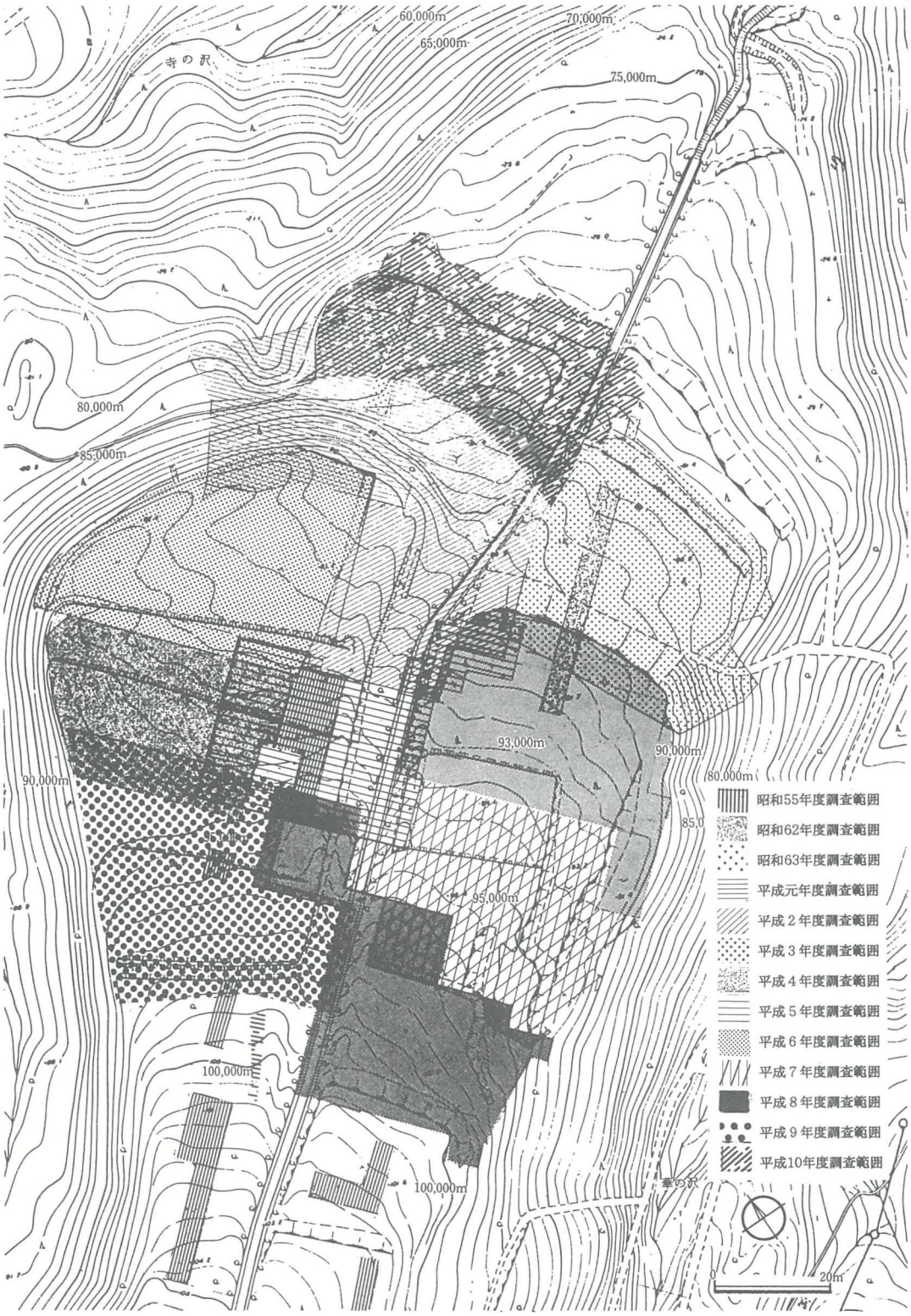
７月　第96号竪穴建物跡調査、土壙41調査。

８月　第98号竪穴建物跡、中央通路の調査。銅製花瓶出土。第97号竪穴建物跡より坩堝片が大量に出土。焼土17より瀬戸美濃灰釉端反皿３個体出土。

９月　中央通路調査。14Ｊ６・７・14・19区調査。土壙46調査。



第1図　遺跡地形図・調査区位置図


60,000m
65,000m
70,000m
75,000m
寺の沢
80,000m
85,000m
90,000m
93,000m
90,000m
80,000m
85,0
95,000m
100,000m
100,000m
蓼の沢
20m
昭和55年度調査範囲
昭和62年度調査範囲
昭和63年度調査範囲
平成元年度調査範囲
平成２年度調査範囲
平成３年度調査範囲
平成４年度調査範囲
平成５年度調査範囲
平成６年度調査範囲
平成７年度調査範囲
平成８年度調査範囲
平成９年度調査範囲
平成10年度調査範囲

第２図　調査区範囲図

9月17日　土壙48より銅銭出土。
完掘写真撮影。
10月16日　勝山館跡調査研究専門員による現地調査・指導。
10月21・22日　上ノ国町文化財保護審議会特別委員鈴木亘先生による現地指導。
10月23日　埋め戻し作業開始。
11月12日　埋め戻し作業終了。

4　基本層序

Ⅰ層　表土層。10 YR 3／3暗褐～10 YR 4／4褐シルト

Ⅱ層　館廃絶後の自然堆積層。10 YR 3／3暗褐～10 YR 4／4褐シルト、やや密、炭化物混入。Os−a 、Ko−d を含む（従来 Os−a としていた白色火山灰は、Ko−d の可能性もあり確認調査中である）。

Ⅲ層　館機能時の整地盛土層。10 YR 4／4褐～10 YR 5／8黄褐、密、ソフトローム粒、炭化物等多量に含有する。土質などにより細分される。

Ⅳ層　縄文期以後館が形成されるまでの堆積層。

Ⅳａ層　黒褐色土層10 YR 2／2黒褐～7.5 YR 3／3暗褐、シルト。

Ⅳｂ層　明黄褐色火山灰10 YR 6／6明黄褐火山灰。やや密。

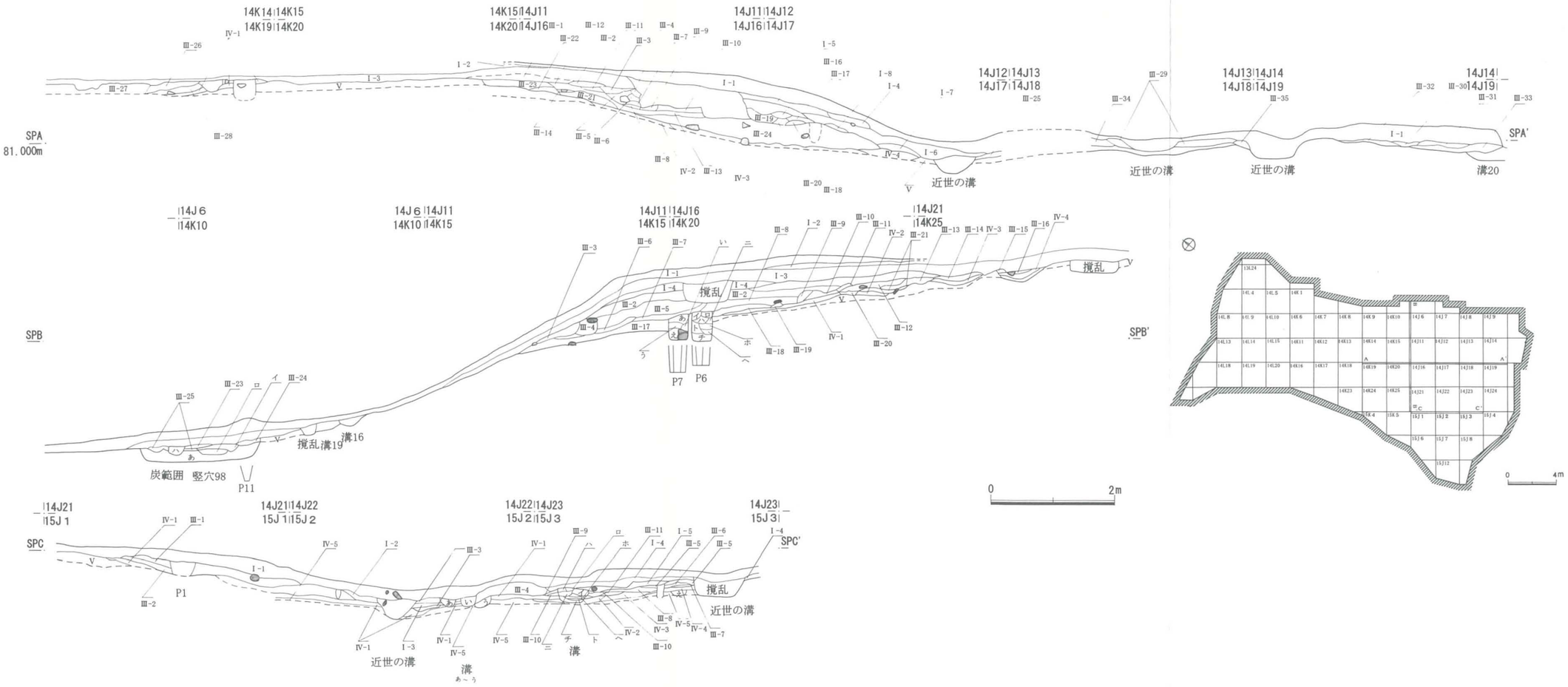
Ⅳｃ層　縄文期包含層10 YR 4／6褐シルト、やや密。

Ⅴ層　ソフトローム。10 YR 5／6にぶい黄褐～10 YR 5／6黄褐。

Ⅵ層　ハードローム。7.5 YR 5／4にぶい褐～10 YR 4／6褐。

3　保存処理

本年度は鉄製品480点、銅製品102点の処理を行った。併せて、処理済鉄製品の内、錆が再び生じたものを400点再処理した。


SPA
81.000m
SPA'
近世の溝
溝20
SPB
SPB'
撹乱
P7
P6
炭範囲
竪穴98
P11
撹乱溝19
溝16
SPC
SPC'
P1
近世の溝
溝
0
2m
0
4m

第３図　土層堆積状況図

表1　14K19・20．14J16・17・18・19　南北セクション東壁土層（A～A'）

Ⅰ	1	10YR	3/3	暗褐色土主体		礫粒	基盤粒	ややハード			C微量
	2										
	3	7.5YR	4/4	褐色土主体	ローム粒	礫粒		ややハード		焼土粒微量	C微量
	4	7.5YR	4/4	ハードローム主体		礫粒	基盤粒	ハード			C微量
	5	7.5YR	4/4	褐色土主体		礫粒	基盤粒	ハード	4よりシルト多く暗い	焼土粒微量	C微量
	6	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤礫	ややハード		焼土粒微量	C微量
	7	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒		ソフト		焼土粒微量	C微量
	8	7.5YR	4/3	褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤礫	ハード		焼土粒微量	C微量
Ⅲ	1										
	2	10YR	4/3	黄褐色土主体	ローム粒	礫粒		ハード		焼土粒微量	C微量
	3	7.5YR	2/3	極暗褐色土主体	ローム粒			ソフト	シルト	焼土粒少量 魚骨少量	C少量
	4	7.5YR	3/2	黒褐色土主体	ローム粒			ソフト	シルト		C微量
	5	7.5YR	2/2	黒褐色土主体	ローム粒	礫粒		ソフト			C微量
	6	7.5YR	3/2	白色火山灰主体	ローム粒			ソフト		焼土粒	C微量
	7	7.5YR	4/4	ハードローム主体		礫粒	基盤礫	ハード			C微量
	8	7.5YR	3/2	黒褐色土主体	ローム粒		基盤粒	ソフト			C少量
	9	7.5YR	4/3	褐色土主体	ローム粒		基盤粒	ややハード			C微量
	10	7.5YR	4/4	褐色土主体	ローム多量	礫粒	基盤礫・粒				C微量
	11	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤礫	ややソフト		焼土少量 土器	C微量
	12	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒				焼土粒 土器	C少量
	13	7.5YR	4/4	基盤礫主体		礫粒	基盤礫・粒		しまりなし		C微量
	14	7.5YR	3/2	黒褐色土主体	ローム	礫粒				焼土粒	C少量
	15	7.5YR	3/2	黒褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤粒	ソフト	しまりなし	焼土粒 魚骨微量	C微量
	16	7.5YR	3/2	黒褐色土主体	10YR5/4黄褐色の火山灰ブロック状			ソフト		焼土粒微量	C微量
	17	5YR	3/4	暗褐色土主体				ややハード	ややしまり有り		C微量
	18	7.5YR	3/2	暗褐色土主体							C少量
	19	7.5YR	3/1	黒褐色土主体	ロームブロック		基盤礫	ソフト			Cブロック
	20	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ローム粒　10YR5/4黄褐色火山灰少量			ソフト			C少量
	21	7.5YR	4/4	褐色土主体	ローム粒			ソフト	シルト	土器	
	22	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ローム粒			ソフト			C微量
	23	7.5YR	4/4	褐色土主体	ハードローム	礫粒	基盤粒	ややハード			
	24	7.5YR	4/4	基盤礫主体	ハードローム	礫粒（中世盛土）					
	25										
	26	10YR	4/3	黄色土主体		礫粒（中世盛土）	基盤礫	ややハード		焼土粒微量	
	27	10YR	4/3	基盤礫主体	ロームブロック	礫粒（中世盛土）	基盤礫多量	ややハード			
	28	10YR	4/3	基盤礫主体		礫粒（中世盛土）	基盤礫				
	29			全面基盤礫							
	30	10YR	3/4	暗褐色土主体		礫粒多量		ややハード		焼土粒	C
	31	10YR	4/3	鈍い黄褐色土主体		礫粒多量	基盤礫	ややハード		焼土粒	C
	32	10YR	4/4	褐ローム主体		礫粒多量	基盤礫少量	ハード	粘土質		C
	33	10YR	4/3　4/4	黄褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤礫	ややハード		焼土粒	C
	34	10YR	3/3	暗褐色土主体		礫粒少量		ややソフト		焼土多量	C多量
	35	10YR	4/3	暗褐色土主体		礫粒多量		ハード	密	焼土粒	C
Ⅳ	1	10YR	2/2	黒褐色土主体	ソフトローム　10YR6/3黄褐色火山灰少量			ソフト			
	2	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ローム粒			ソフト	シルト		C少量
	3	7.5YR	2/2	黒褐色土主体	ローム粒微量			ソフト	シルト		
	4	7.5YR	2/2	黒褐色土主体	ローム粒			ソフト	シルト		C少量
Ⅴ		10YR	3/4	暗褐色土主体	ソフトローム混じる　白色火山灰少量						
P5		10YR	4/3	基盤礫主体			基盤粒				

表2　14K5・10・15・20・25．東西セクション南壁土層（B～B'）

Ⅰ	1	7.5YR	3/4	暗褐色土主体		礫粒	基盤礫	ややソフト			
	2	10YR	4/3								
	3	7.5YR	4/4	褐色土主体		礫粒		ソフト			C微量
	4	7.5YR	3/3	暗褐色土主体		礫粒			ややしまり有り		C微量
Ⅲ	1	7.5YR	4/4	褐色土主体		礫粒		ややハード	しまり有り	焼土粒	C微量
	2	7.5YR	3/2	黒褐色土主体	ローム粒　10YR5/4黄褐火山灰少量	礫粒		ソフト			Cブロック
	3	10YR	3/4	暗褐色土主体		礫粒		ややハード		焼土	C微量
	4	7.5YR	3/4	暗褐色土主体	白色火山灰	礫粒		ややソフト			C微量
	5	7.5YR	3/3	暗褐色土主体				ソフト		焼土粒微量	C微量
	6	10YR	3/3	暗褐色土主体		礫粒		ややソフト		焼土	C微量
	7	7.5YR	2/2	黒褐色土主体		礫粒		ソフト		焼土粒微量	C微量
	8	7.5YR	2/2	黒褐色土主体				ソフト		焼土粒微量	C微量
	9	7.5YR	3/2	暗褐色土主体	ロームブロック			ソフト			C微量
	10	7.5YR	3/4	基盤礫主体	ロームブロック状少量			ソフト			
	11	7.5YR	3/2	黒褐色土主体	ロームブロック状			ソフト		焼土粒微量	
	12	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ハードロームブロック　10YR7/2黄橙火山灰ブロック			ソフト		焼土粒微量	Cブロック
	13	7.5YR	4/4	褐色土主体	ロームブロック		基盤粒	ややハード		焼土粒微量	C微量
	14	10YR	3/4	暗褐色土主体		小礫微量		ややソフト			C微量
	15	10YR	3/4	暗褐色土主体	Ⅳ層黒色土ブロック状に混じる		基盤礫少量	ややソフト			C少量
	16	10YR	4/6	褐色土・基盤礫主体				ややハード			
	17	10YR	5/4	黄褐色土主体		礫粒		ややハード		焼土微量	
	18	10YR	3/2	黒褐色土主体	ハードローム粒大礫3個	礫粒	基盤粒	ややソフト			C微量
	19	7.5YR	4/4	褐色土・基盤粒主体		礫粒		ややハード			
	20	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ハードロームブロック状少量			ソフト			C微量
	21	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ローム粒			ソフト			C微量
	22	10YR	4/3	黄褐色土主体	ローム粒	礫粒		ややソフト		焼土粒	C微量
	23	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ソフトローム			ソフト		焼土粒微量	C少量
	24	7.5YR	4/4	褐色土主体	ソフトローム			ソフト		焼土粒微量	C少量
	25	7.5YR	3/2	黒褐色土主体	ソフトローム			ソフト		焼土粒微量	C多量
Ⅳ	1	7.5YR	2/2	黒色土主体	ソフトロームブロック状少量			ソフト			
	2	7.5YR	3/2	黒色土主体	ソフトロームブロック状少量			ソフト			C少量
	3	10YR	2/2	黒褐色土主体	ソフトロームやや多く混じる			ソフト			
	4	10YR	2/1	黒色土主体	ソフトロームところ混じる			ソフト			
Ⅴ		7.5YR	3/4	ソフトローム主体		礫粒微量					C微量
竪穴96	あ	7.5YR	4/4	褐色土主体	ソフトローム	礫粒ソフト				焼土粒	C少量
溝16											
溝19											
P388	イ	7.5YR	3/2	黒褐色土主体		礫粒	基盤粒	ソフト		焼土粒微量	
	ロ	7.5YR	2/3	極暗褐色土主体		礫粒	基盤粒	ソフト		焼土粒微量	
	ハ	7.5YR	2/2	黒褐色土主体			基盤粒	ソフト			C微量
	ニ	7.5YR	2/3	極暗褐色土主体	ロームブロック混じる			ソフト			C微量
	ホ	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ロームブロック混じる			ソフト			C微量
	ヘ	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ロームブロック混じる			ソフト		焼土粒微量	C微量
	ト	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ハードロームブロック状混じる			ソフト		焼土粒微量	
	チ	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ハードロームブロック状混じる			ソフト		焼土粒微量	C少量
P389	あ	7.5YR	3/2	黒褐色土主体	ハードロームブロック状混じる	礫粒	基盤粒	ソフト			
	い	7.5YR	4/3	褐色土主体		礫粒	基盤粒	ハード			
	う	7.5YR	4/3	褐色土主体	ハードロームブロック状混じる	礫粒	基盤粒	ハード			
	え	7.5YR	4/4	褐色土主体	ハードロームブロック状混じる	礫粒	基盤粒	ハード			

表３　14Ｊ21・22・23　南北セクション東壁土層（Ｃ～Ｃ’）

Ⅰ	1	10ＹＲ	4/4	褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤粒	ハード	しまり有り			Ｃ少量
	2	10ＹＲ	4/4	褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤粒	ハード	しまり有り			Ｃ少量
	3	10ＹＲ	4/4	褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤粒	ハード	しまり有り			Ｃ少量
	4	7.5ＹＲ	4/3	褐色土主体		礫粒	基盤礫	ややハード		焼土粒微量		Ｃ少量
	5	7.5ＹＲ	4/3	褐色土主体		礫粒	基盤礫	ややソフト				Ｃ少量
Ⅲ	1	7.5ＹＲ	3/4	暗褐色土主体		礫粒	基盤礫	ハード		焼土粒微量		
	2	7.5ＹＲ	4/4	基盤礫主体				ハード				Ｃ微量
	3	7.5ＹＲ	4/4	基盤礫主体				ややソフト				Ｃ微量
	4	7.5ＹＲ	4/4	基盤礫主体				ハード				Ｃ微量
	5	7.5ＹＲ	3/3	褐色土主体	ローム	礫粒		ハード	しまり有り	焼土粒		Ｃ少量
	6	7.5ＹＲ	4/3	褐色土主体	基盤礫大２個			ハード				Ｃ少量
	7	7.5ＹＲ	4/3	褐色土主体	ローム基盤礫			ハード				Ｃ少量
	8	7.5ＹＲ	2/2	黒褐色土主体	黒色土・ローム・焼土混じりの層			ややソフト	しまり有り			
	9	7.5ＹＲ	2/2	黒褐色土主体	ローム粒	礫粒		ややハード		焼土粒		Ｃ少量
	10	7.5ＹＲ	3/2	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒		ソフト		焼土粒		Ｃ少量
	11	7.5ＹＲ	2/2	黒褐色土主体	黒色土・ローム・焼土混じりの層			ややソフト				
Ⅳ	1	7.5ＹＲ	2/2	黒褐色土主体				ソフト	シルト	焼土粒微量		Ｃ多量
	2	7.5ＹＲ	3/4	暗褐色土主体	火山灰微量			ソフト	シルト			Ｃ微量
	3	7.5ＹＲ	4/3	褐色土主体				ソフト	シルト			Ｃ少量
	4	7.5ＹＲ	4/4	褐色土主体				ソフト	シルト			Ｃ少量
	5	7.5ＹＲ	3/3	暗褐色土主体				ソフト	シルト			Ｃ微量
Ⅳ		10ＹＲ	4/6	ソフトローム主体		礫粒		ソフト				Ｃ微量
溝	あ	7.5ＹＲ	3/3	暗褐色土主体		礫粒	基盤礫	ソフト				Ｃ微量
溝	い	7.5ＹＲ	4/3　4/4	褐色土主体		礫粒	基盤礫	ソフト				Ｃ微量
溝	う	7.5ＹＲ	3/3	基盤礫主体		礫粒	基盤粒	ハード				Ｃ少量
溝	え	7.5ＹＲ	3/3	暗褐色土主体	ローム粒			ソフト		焼土粒微量		Ｃブロック
溝	イ	５ＹＲ	3/3	暗赤褐色土主体				ハード	しまり有り	全面焼土		Ｃ少量
	ロ	５ＹＲ	4/4	赤褐色土主体					しまり有り	全面焼土		Ｃ微量
	ハ	7.5ＹＲ	2/1	黒色土主体				ややハード		焼土やや多い		
	ニ	５ＹＲ	3/2	暗赤褐色土主体				ソフト		全面焼土		Ｃやや多い
	ホ	7.5ＹＲ	2/2	黒褐色土主体				ソフト		焼土粒		
	ヘ	7.5ＹＲ	2/1	黒褐色土・Ｃ主体	ローム粒			ソフト		骨片少量		
	ト	7.5ＹＲ	4/4	褐色土主体	ローム粒			ややハード		焼土粒やや多い		Ｃブロック
	チ	7.5ＹＲ	3/3	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒		ハード		焼土ブロック状		

第４図　遺構全体図

Ⅱ　遺構確認調査

1　調査目的

史跡上之国勝山館跡は、昭和54年以来、環境整備に伴う発掘調査を続けて20年目を迎える。本年は、館中心部の北東部に位置する第一平坦面の南西部800㎡を調査した。

この地区の一部は、昭和63・平成元・２年度に調査を実施し、第二平坦面との間を分かつ二重の壕跡、数棟の掘立柱建物跡、竪穴建物跡等を検出している。

しかし、第二平坦面に比べ調査面積も限られており、第一平坦面の性格を窺うには不充分であった。又、第二・三平坦面同様、中央通路の存在が想定されていたにもかかわらず、後世の攪乱のため遺構が十分確認できなかったこともあった。そのため過去の調査結果を補完する意味で、これら過年度調査区の隣接地区と、中央通路想定部分を調査区とした。

以上、本年度の調査目的は、第二・三平坦面で検出した中央通路の第一平坦面での有無と状況、第一平坦面の地割の展開状況、並びにそれらの地割の性格の解明を主眼とした。

2　検出遺構と出土遺物

(1)　位置・概要（第１・２図）

平成10年度調査区は、館主体部の第一平坦面、空壕Ｂ北西側に位置する。第一平坦面は１ｍ～３ｍの比高差をもつ段があり、南半部と北半部に大きく分けられそうである。南半部はほぼ平坦な面であり、北半部は海側へ緩やかに低くなり、更に台地中央部から寺ノ沢・宮ノ沢方向に向かって雛壇状に低くなる。現在、この中央部には自然遊歩道があり、史跡内を見学するルートになっている。

本年度は、４つの地割と掘立柱建物跡６棟、竪穴建物跡５棟、中央通路跡などを検出した。

(2)　層序（第３図・表１）

全体を概観すると北東方向の大手側に低くなる地形で、更に左右の沢方向にも低くなる。全体として南半部地区の空壕Ｂに接する平坦部は盛土により作られ、北半部地区は自然地形の落ち込みや斜面に、基盤礫や基盤粒を多量に含む土を使って盛土がなされていた。

南半部地区平坦面の南部を中心に、一辺60㎝～１ｍ前後の長方形の攪乱がある。特に14Ｊ16・21区付近では径90㎝前後の円形の攪乱が重なり合って多数ある。いずれも耕作時のものと思われる。14Ｊ21区付近では、表土下がすぐⅥ層になり、中世の盛土整地などは見られず削平されている可能性が高い。空壕Ｂに接する調査区南半部地区の平坦面は、最大1.2ｍ以上の盛土により作られていたことを改めて確認した（第29図）。二重の空壕や第二平坦面の切岸を作った時の排土を使って造成したと想定される。14Ｋ21区でも攪乱されてはいるが、焼土混じりの土や基盤礫混じりの盛土と想定される堆積を確認した（ＳＰＡ～ＳＰＡ’）。逆に14Ｊ15区付近の斜面はⅥ層のハードロームなので、切土して整形していると考えられる。

北半部地区13Ｌ19区付近の第一平坦面南西部の端部には１ｍ前後の厚い盛土がなされ、この平坦部も盛土により沢側に作り出されていることがわかった。

自然研究路がある14Ｊ17・22区付近では、館神八幡宮への参拝路であったり、農地への通路であったりしたため、近世以降の人の手が加わっているので、中央通路の想定部分が削平を受けていた。

(3)　掘立柱建物跡

調査の結果、南半部地区の平坦面で六棟を想定した。その内三棟は平成元年度のものと若干違いが生じた。第５図にその異同を示した。今後の再検討により変更になることもありうるので、現段階の試案として御承知いただきたい。北半部地区では六棟を想定しているが、地割全体を調査してはいないため確定でき無かった。この部分は(7)地割で述べるので、南半部地区検出の６棟の概要を述べる。

今回再調査の結果、平成元年度調査検出の柱穴の一部に遺構では無かったのでないかと思われるものがでてきた。過去の調査と今回の再確認調査で、今や完全に覆土が失われてしまっているものもあるので断言は出来ないが、盛土のブロックが覆土の様に見え、それを柱穴として認識してしまったものが幾つかあるようだ。それらの柱穴を図面に記録し、報告されてしまっている例が若干ある。

第１号建物跡（第６図、ＰＬ９－１）：南半部地区平坦面北側14Ｋ17区周辺に位置する。桁行三間、梁間二間、東西棟の建物跡を想定した。平面規模は5.01ｍ×4.24ｍ。柱間寸法は、桁行方向五尺五寸等間。梁間方向は、七尺等間と想定される。

第２号建物跡（第７図、ＰＬ９－１）：南半部地区平坦面北側14Ｋ17区周辺に位置する。桁行三間、梁間三間、東西棟の建物跡を想定した。平面規模は6.63ｍ×4.51ｍ。柱間寸法は、桁行方向は七尺三寸等間、梁間方向は北から五尺三寸、四尺八寸、四尺八寸と想定される。

第３号建物跡（第８図、ＰＬ９－１）：南半部地区平坦面南側14Ｋ16区周辺に位置する。柱穴の配置状況から三つの案が想定できる。

想定案１は、桁行四間、梁間三間、南北棟の建物跡を想定する。平面規模は8.72ｍ×6.00ｍ。柱間寸法は桁行方向七尺二寸等間、梁間方向六尺六寸等間と想定される。

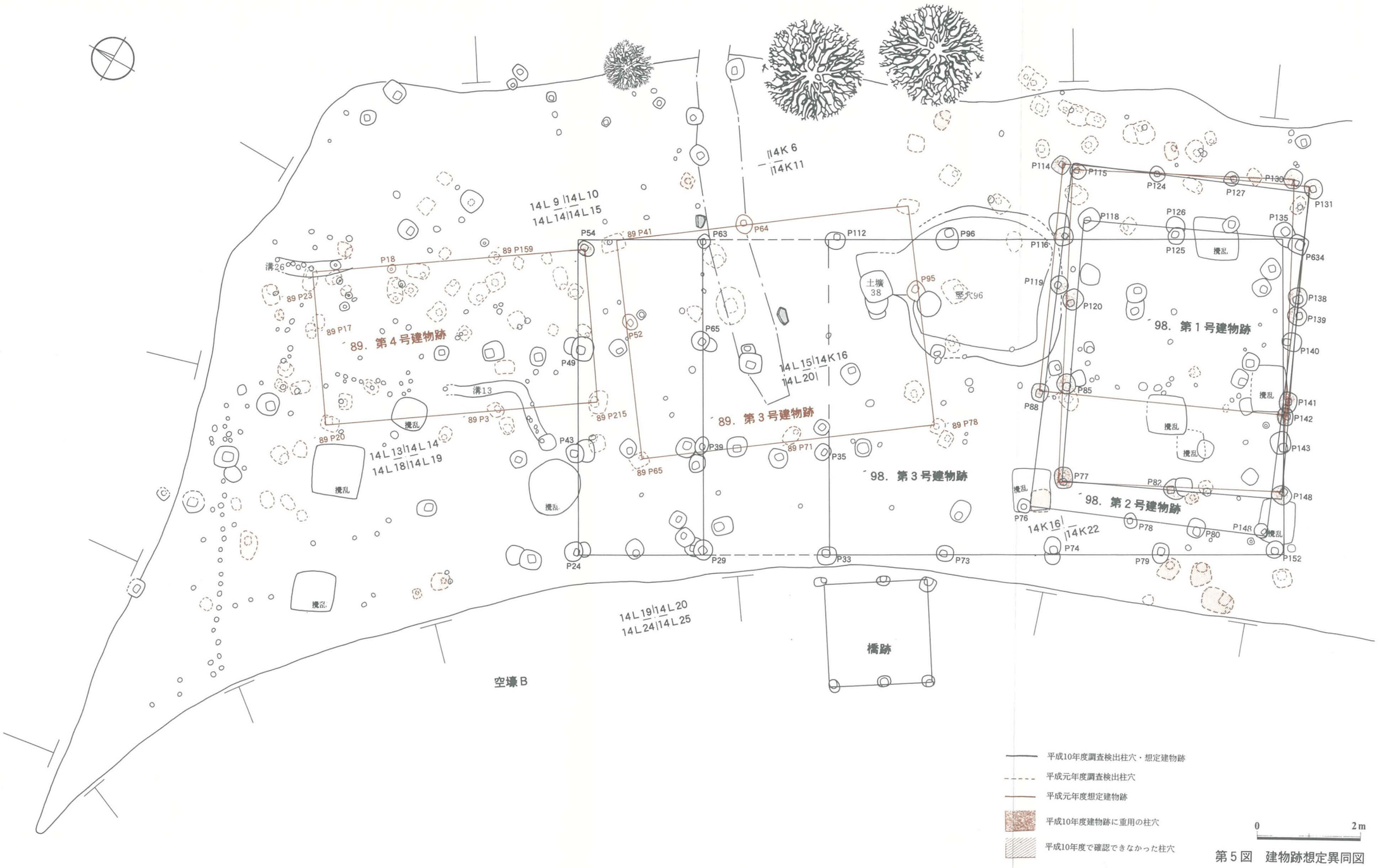
想定案２は、想定案１のものに柱筋の通る三間×一間の小さな建物が北隣に位置する、二棟並立案である。

想定案３は、想定案２の二棟が桁行六間、梁間三間の一棟であると想定する。図上では想定案３で規模を表示している。しかし、Ｐ33-29間、Ｐ112-63の柱間寸法は七尺九寸という、かなり広い柱間となってしまうので、疑念が残る。いずれにしても今後再検討が必要である。

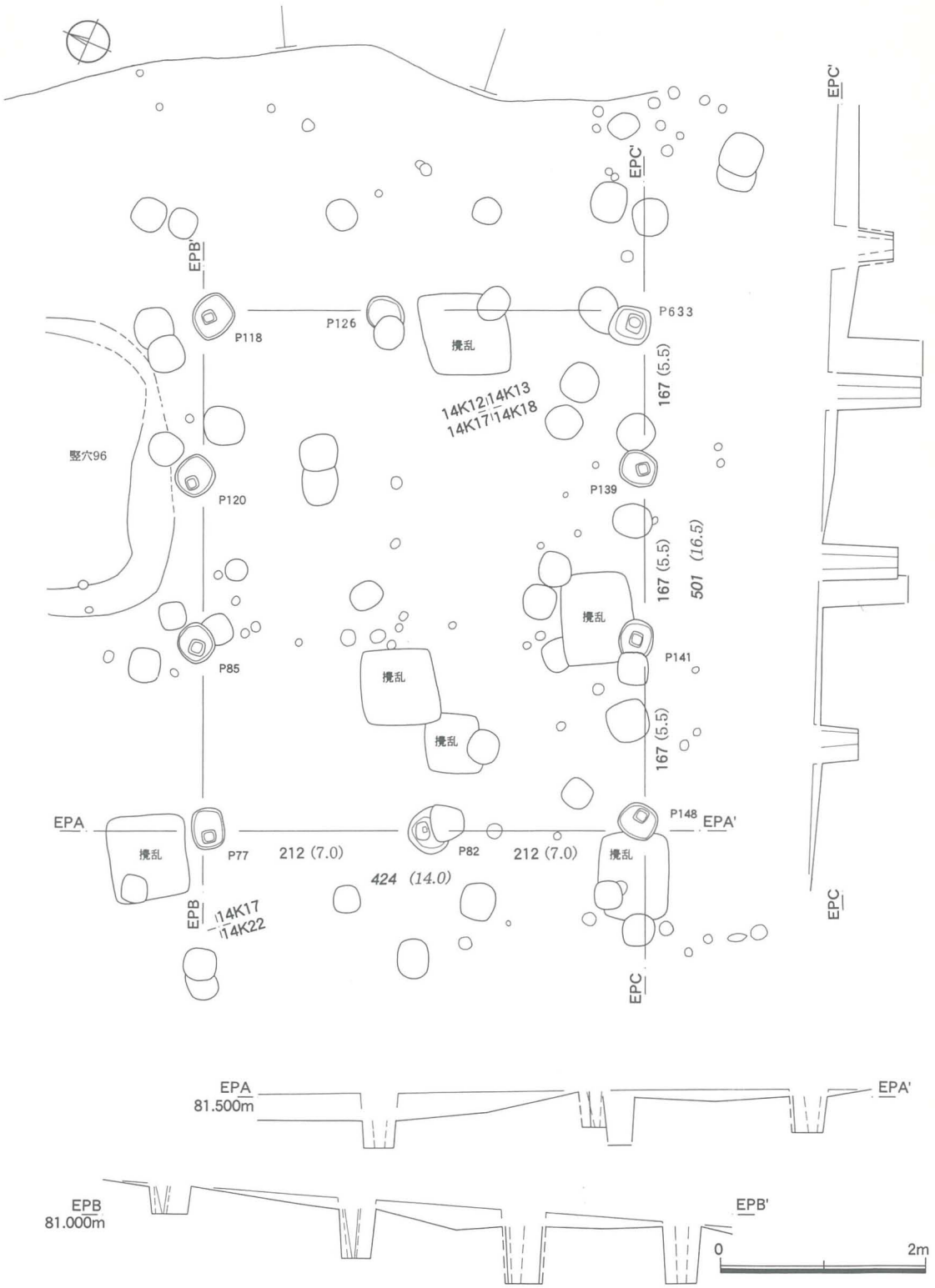
第４号建物跡（第９図、ＰＬ９－３）：南半部地区平坦面南側14Ｋ20区周辺に位置する。桁行三間、梁間三間、東西棟の建物跡を想定した。平面規模は5.37ｍ×4.44ｍ。北東部は溝14等に切られ欠失していると考えられる。柱間寸法は、桁行方向は五尺九寸等間と想定される。梁間方向は西柱列では、ばらつきがあり、Ｐ222－224では四尺、Ｐ229－209間では五尺八寸となっている。また柱通りも悪く西側に開き気味である。西柱列Ｐ224－229と東柱列の残存部分Ｐ200－201間から四尺九寸等間を基準としていることも考えられるが、現段階では確定を留保したい。柱穴の切り合い関係から第５号建物跡より古いと考えられる。

第５号建物跡（第10図、ＰＬ９－３）：南半部地区平坦面南側14Ｋ19区周辺に位置する。桁行三間、梁間二間、南北棟の総柱建物跡を想定した。平面規模は4.75ｍ×3.40ｍ。柱間寸法は、桁行方向は、北から四尺七寸、四尺七寸、六尺三寸。梁間方向は、五尺六寸等間と想定される。柱穴の切り合い関係から６号建物跡より古いと考えられる。

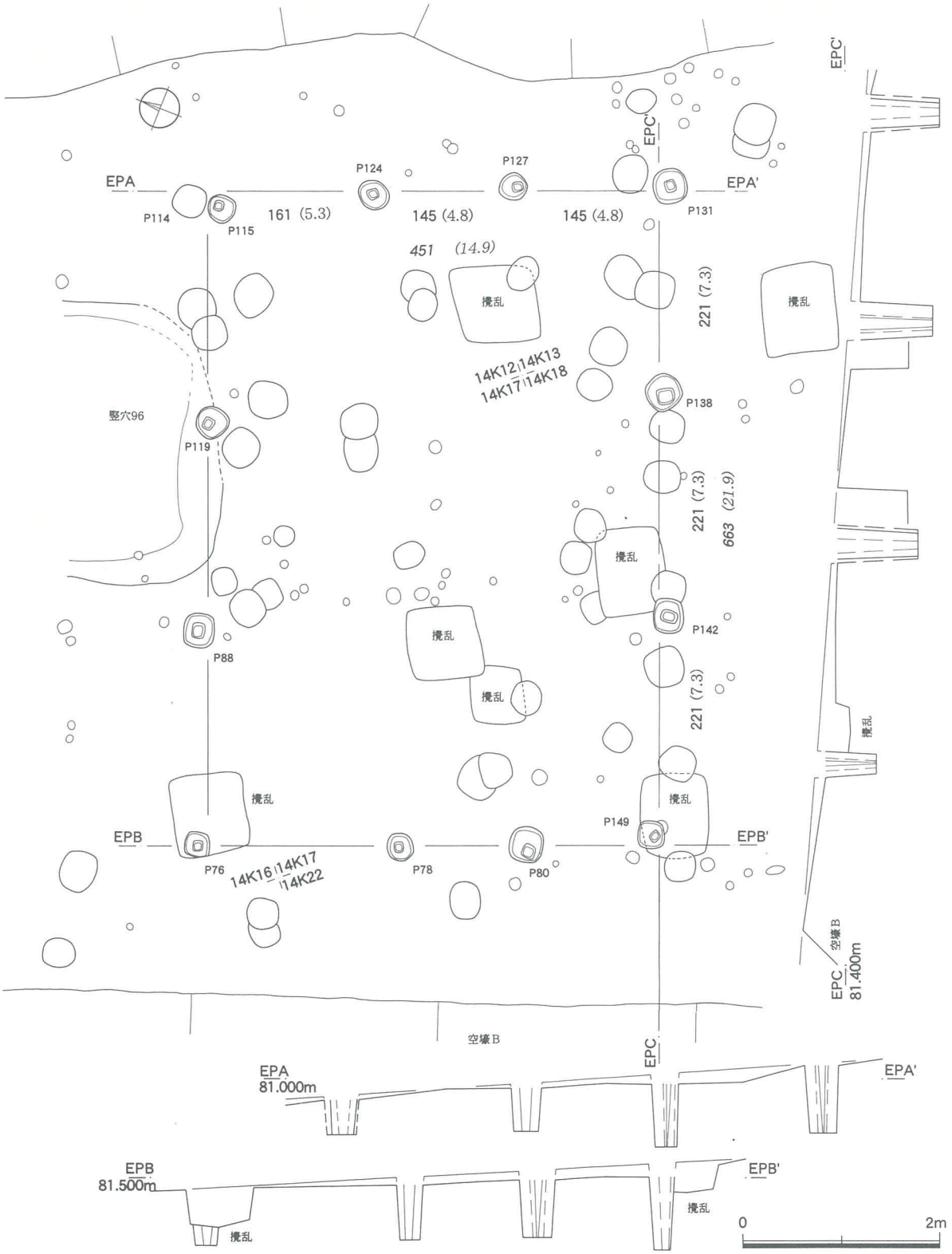
第６号建物跡（第11図、ＰＬ９－３）：南半部地区平坦面南側14Ｋ25区周辺に位置する。桁行四間、梁間二間、南北棟の建物跡を想定した。平面規模は7.28ｍ×4.60ｍ。柱間寸法は、桁行方向は、六尺等間。梁間方向は、七尺六寸等間と想定される。柱穴の切り合い関係から第４・５号建物跡より新しいと考えられる。



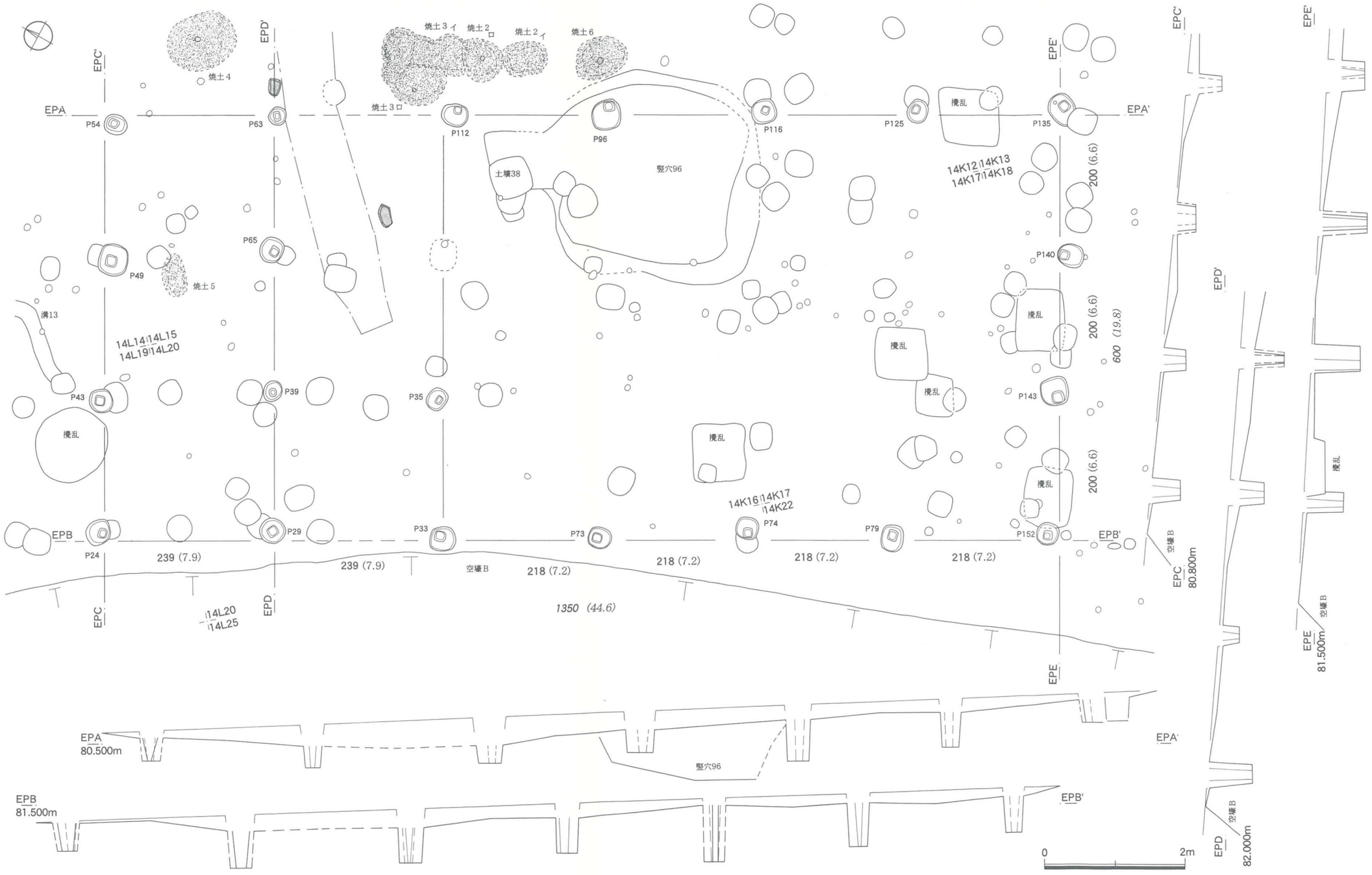
第5図　建物跡想定異同図



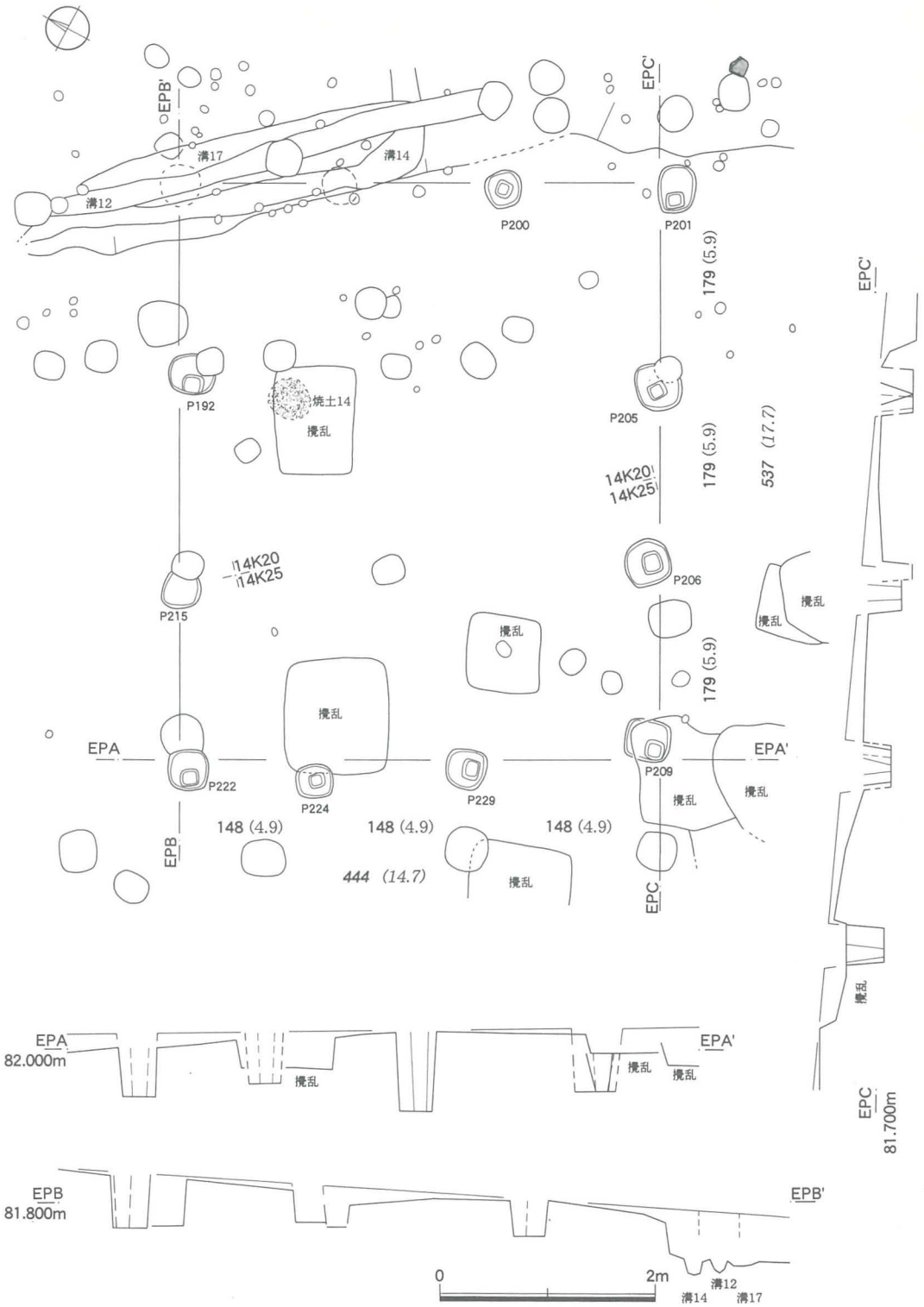
第６図　第１号建物跡想定図



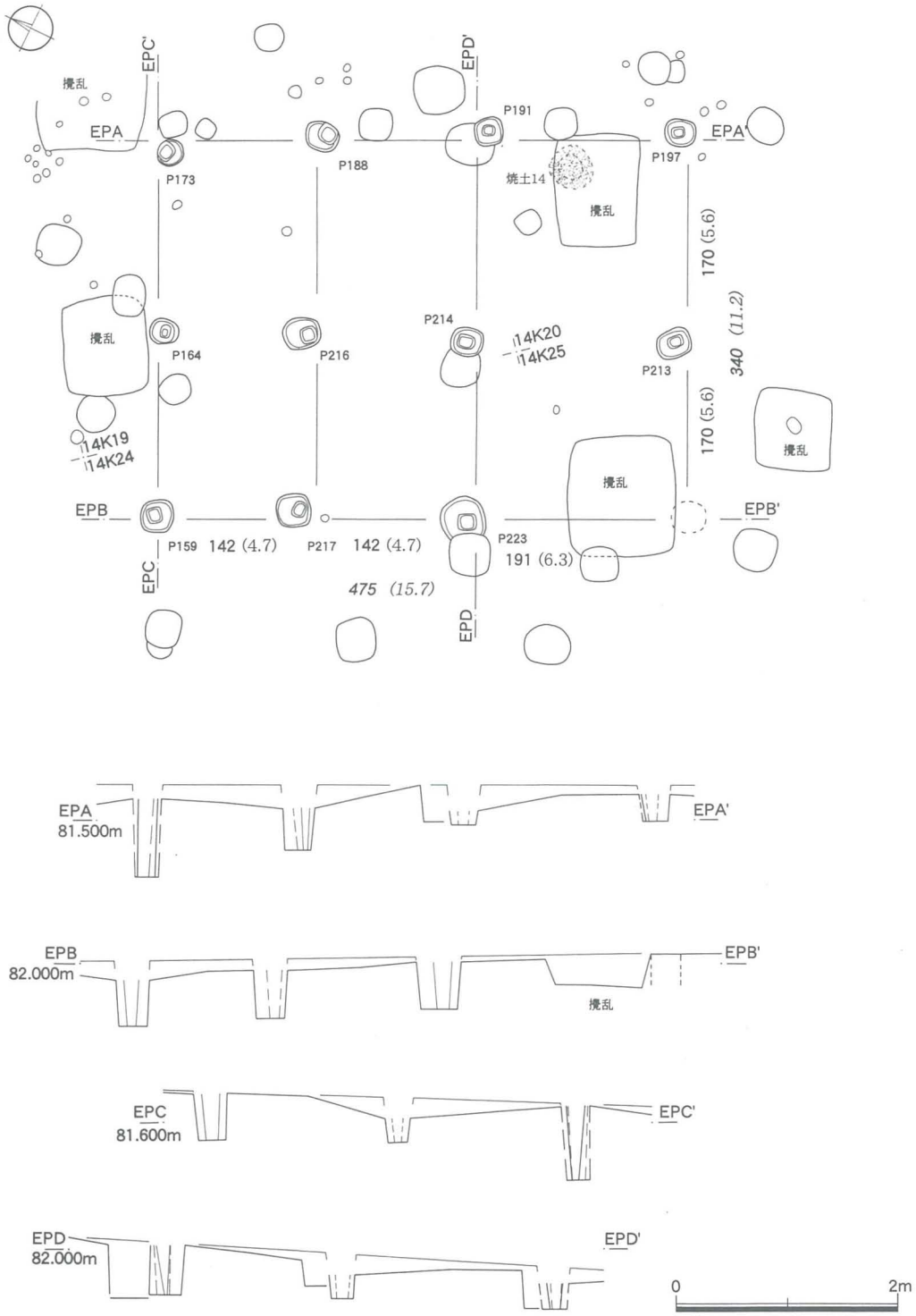
第７図　第２号建物跡想定図



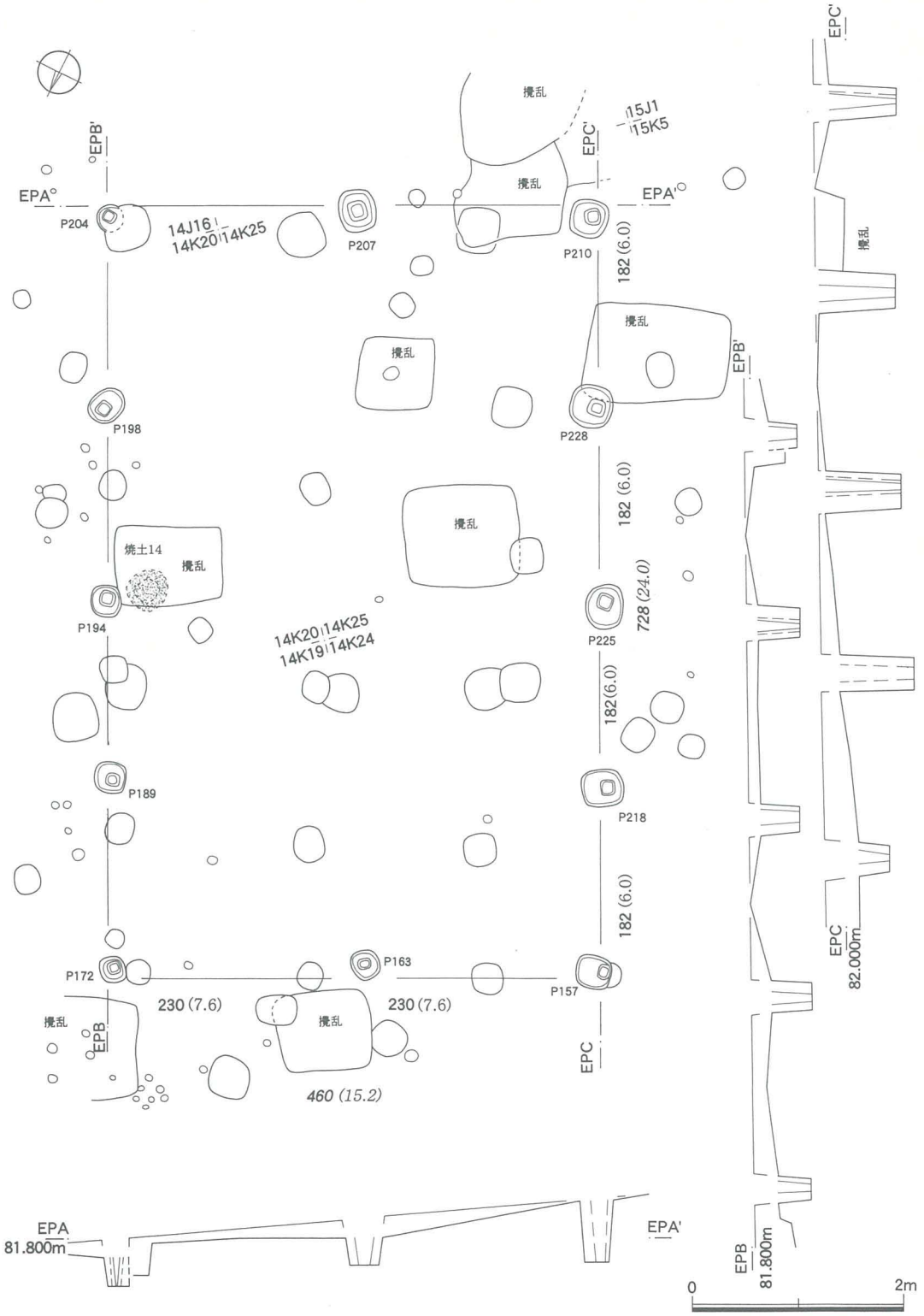
第8図　第3号建物跡想定図



第９図　第４号建物跡想定図



第10図　第５号建物跡想定図



第11図　第６号建物跡想定図

(4) 竪穴建物跡

南半部地区西側で一棟、北半部地区東側で一棟、北半部地区西側で三棟の計五棟を検出した。内三棟は柱穴の重複や数から、建て替えが想定される。

第94号竪穴建物跡（第12図、表４、PL.10－１・２・３）：14Ｌ４区周辺に位置する。平面規模は長辺2.15ｍ、短辺2.05ｍ、北西方向に出入口と想定される張り出し部がある。溝４などに切られている。東壁側部分を除いた床面に溝を検出した。柱位置が想定される場所には掘方は見られず、径８㎝前後の円ないしは楕円形状で、深さ10～20㎝の小さな柱痕跡しか確認できなかったので、打ち込み式の柱の可能性がある。

出土遺物　越前擂鉢、釘がある。越前擂鉢は口唇部が丸みを帯びており、15世紀末葉位に位置付けてよさそうである。

第95号竪穴建物跡（第13図、表５、PL.10－１・４・５）：13Ｌ24区に周辺に位置する。平面規模は長辺2.45ｍ、短辺2.35ｍ、北東方向に出入口と想定される張り出し部がある。隅柱の数からから建て替えが行われたことが想定できる。北壁側部分を除いて床面に溝を検出した。南西部に炭化物の集中箇所を検出した。入口部分は盛土のため確認が困難であった。やや細身の観があるので、南北方向の幅に掘り残しがあるのかもしれない。

出土遺物　青磁稜花皿、青磁碗、染付玉取獅子文端反皿二個体、瀬戸美濃灰釉端反皿、瀬戸美濃灰釉稜花皿二個体（見込に印花あり）、越前甕、釘、一端に径２ミリ程の穴が二つある針、咸平元寳がある。

第96号竪穴建物跡（第14・15図、表６・７、PL.11）：14Ｋ11区周辺に位置する。平面規模は長辺2.5ｍ、短辺2.45ｍ、北西方向に出入口と想定される張り出し部がある。出入口南西部分は土壙38に切られている。発見当初は、茶で示した範囲（第15図）を検出し、焼失の竪穴建物跡が盛土とほぼ同じ土で埋められてると考えた。プラン確認後、四分割で調査を開始、上半部は基盤礫・粒が多量に混じる土で、盛土とほぼ同じ土であり、一気に埋め立てられたと考えられる。その下には炭化物層が２枚ある。この炭化物層は竪穴の掘方を越えて堆積し、発見当初の炭化物範囲となる（PL.11－１）。堀方を越え堆積する炭化物を精査したところ、竪穴床面からほぼ垂直に立ち上がる壁が、上方でラッパ状に広がりその直上に炭化物が堆積していることを確認した。又、炭化物は不明溶解物などが多量に混じるものであることが判明した。

上記の現象から竪穴廃絶後、その窪みを利用して炭化物を捨てたが、その過程で壁面が崩れラッパ状に広がり、それを越えて炭化物が堆積したため、竪穴の掘方より大きく炭範囲が検出されたと思われる。

炭化物層の直上で、かわらけが出土した（PL.２－３）。又、遺物の殆どが炭化物層の直上、直下で出土している。北壁側を除く床面に溝を検出した。又、北・東壁付近で炭化した茅材を検出した（PL．11－２・７・８）ので、焼失住居の可能性も考えられる。柱穴の数から建て替えが考えられる。

出土遺物　瀬戸美濃灰釉蓮弁文丸碗２個体（内１個体は第30図21）。瀬戸美濃灰釉端反皿５個体以上（内１個体は同16）、かわらけ２個体（同23）越前甕、三目札を含む小札、釘、鍋、砥石などがある。

灰釉皿は少なくても５個体分あり、内１点は口縁部が波を打つ形態の稜花皿（PL.18－２－３）で、他は端反皿である。銅銭は景祐元寳の他17枚ある。中には非常に薄いものがあり、「無文銭」の可能性がある。

竪穴を覆う炭化物をサンプリングし、水洗いした結果微細遺物を検出した。炭化種子、魚骨片などがある。特に鍛冶作業の際に出る溶解物と思われるものを多量に検出した。粒状のもの、表面が網の目状を呈する縦長のものとに大きく分かれる。今後の分析を必要とする。

第97号竪穴建物跡（第16図、表８、PL.12－１～４）：14Ｊ24区周辺に位置する。北壁部分が幕末期の溝に切られて不明瞭になっているが、平面規模は長辺2.8ｍ、短辺2.5ｍ、北方向に出入口と想定される張り出し部がある。柱穴は四隅と東西柱筋の間にあり、計６つ検出した。平面規模は、本年度検竪穴建物跡の中で最大である。床面の北西部に炭化物の集中箇所を検出した。炭化種子、魚骨片少量を検出している。北壁側部分を除く床面に溝を検出した。北西部分の覆土中位で坩堝片が大量に出土した（PL.12－１・２）。いずれも、熱を受け溶解している上に、細片になっているも

のも多く、接合はあまりできなかった。観察の結果、少なくても10個体以上はあると推測する。他の遺物も覆土中位を中心に出土している。

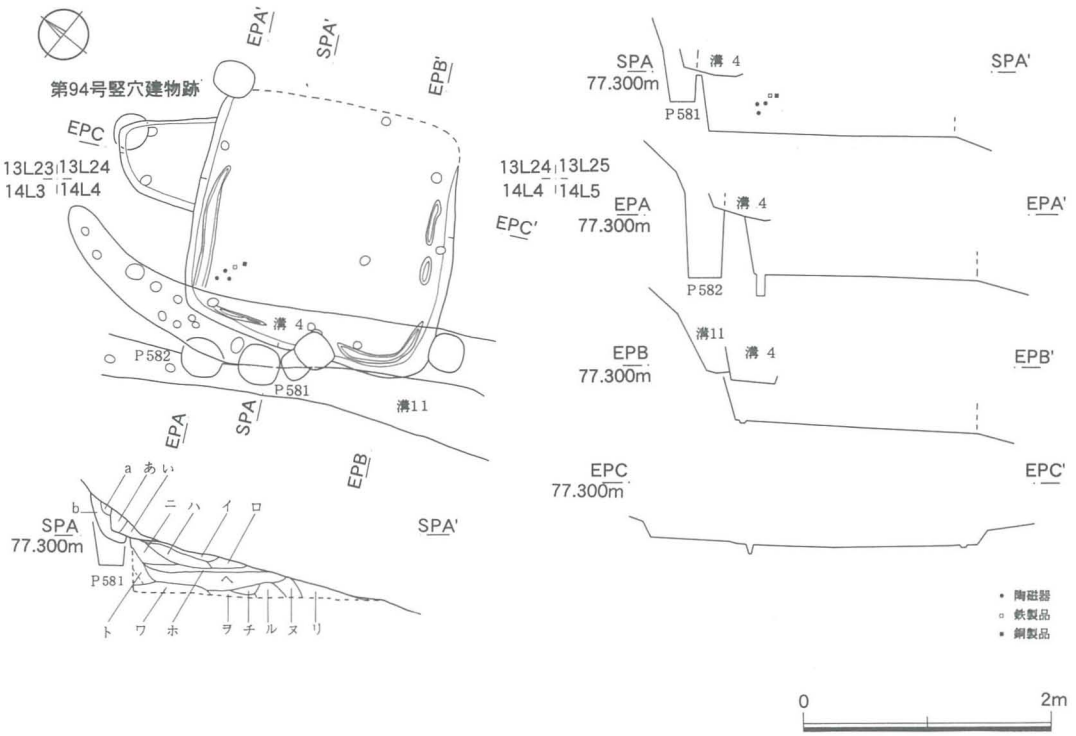
出土遺物　青磁稜花皿、白磁端反皿、赤絵碗、口縁部が強く括れる瀬戸美濃鉄釉碗（大窯Ⅱ期）、刀子、小札、苧引金、締金具（第32図12）、鍋、釘、鉏、銅銭、砥石、坩堝片（PL.20－3・4）、双六駒（第33図16～19）、中柄と思われる骨角器（第33図12）などがある。

坩堝は全て土製品で、径や深さにバリエーションが見られる。緑青の様なものが噴いており、銅用のものかとも推測されるが、結論は化学的分析を待ちたい。表面に籾の圧痕の様なものが観察できる。胎土は礫粒と繊維が混じり、中には米と見られる粒状のものが混入しているものがある。

第98号竪穴建物跡（第17図、表２、PL.12－５・６）：14Ｊ６区に位置する。平面規模は歪な長方形で長辺2.5ｍ、短辺2.2ｍ、北西方向に出入口と想定される張り出し部がある。また、北壁西側には段を有する。北壁側床面に柱穴間を繋ぐような溝を検出した。柱穴の数から最低でも２回以上の立て替えが行われたことが想定できる。柱穴だけではなく壁の位置まで変えたので、歪な平面形を呈しているように見えるのであろう。

土壙41と切り合い関係にあり、土壙41より古い遺構と考えられる。

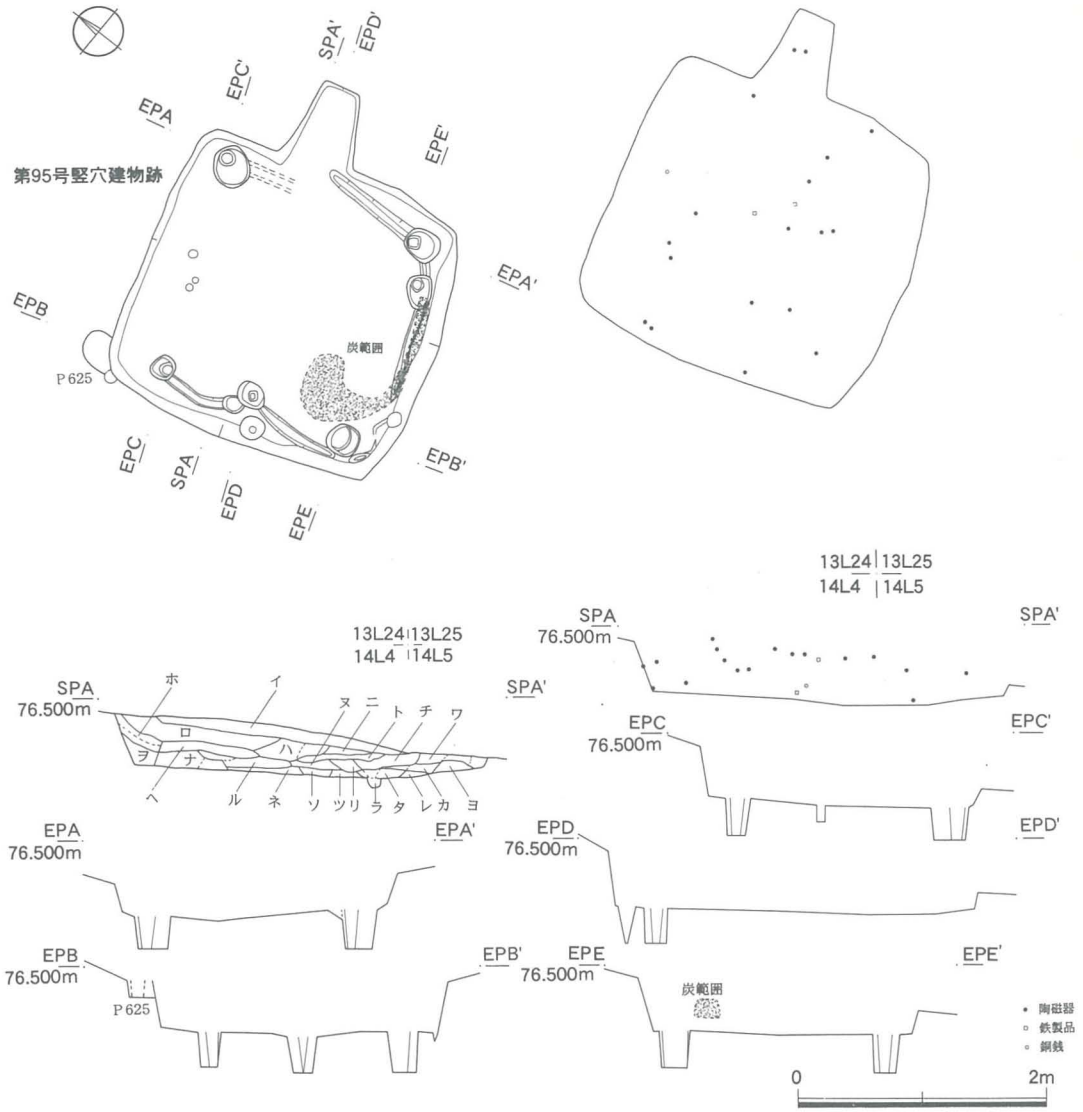
出土遺物　瀬戸美濃灰釉稜花皿、口縁部が鋭角で内削ぎ気味の越前擂鉢、小札、鍋、釘、元祐通寶、中柄または刺突具と思われる骨角器がある。



第12図　第94号竪穴建物跡平面図他

表 4　第94号竪穴建物跡土層観察表

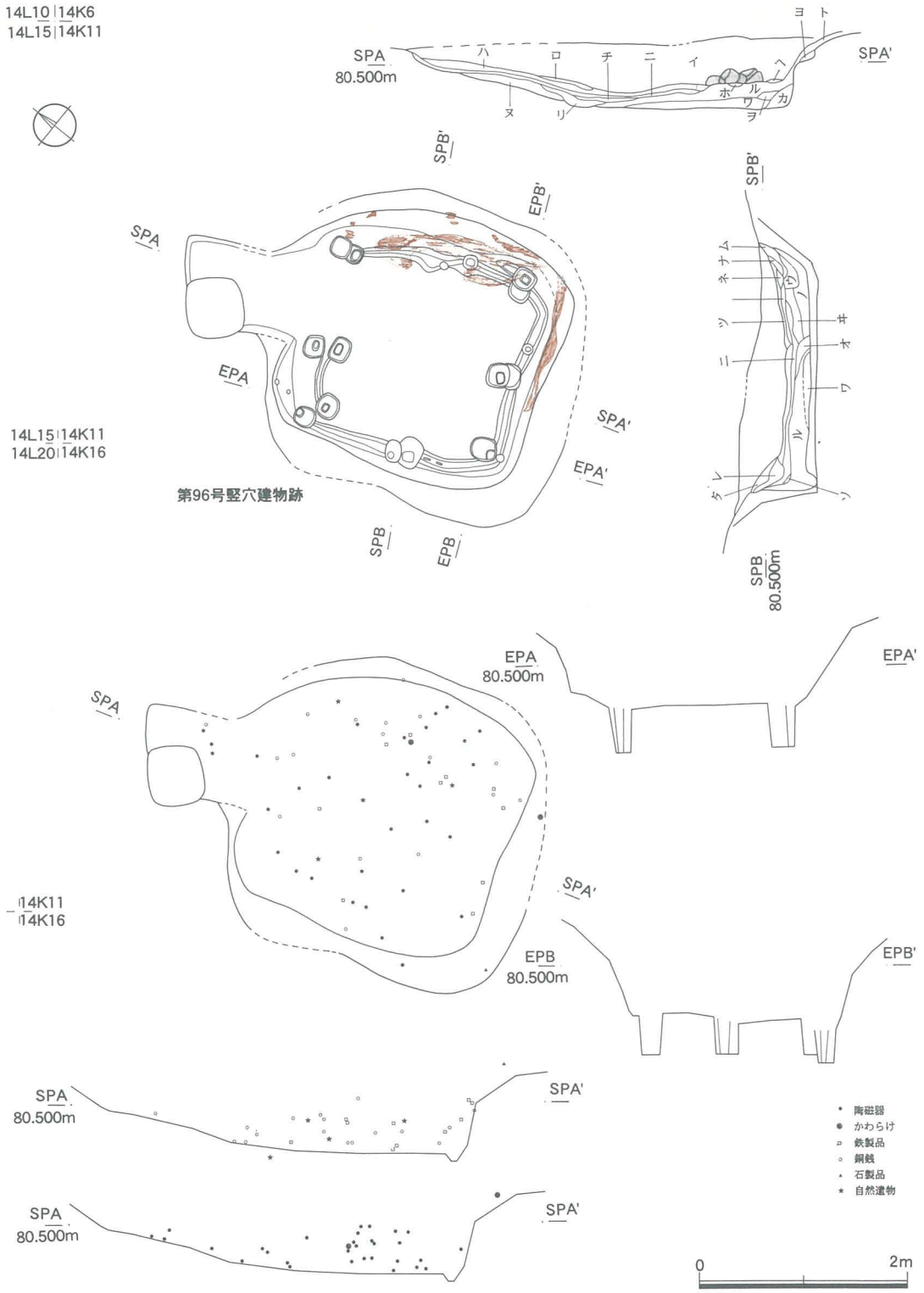
イ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒多量	基盤礫少量		
ロ	10YR 5/4	鈍い黄褐色土主体	ローム粒	礫粒多量	基盤礫多量	ハード	
ハ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤礫多量	(イ)より少しソフト	
ニ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ロームブロック少量　ローム粒	礫粒少量		やや粘質　しまり有り	C少量
ホ	10YR 3/3	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒		(ニ)より少しソフト	C少量
ヘ	10YR 4/4	褐色土主体	ロームブロック40%		基盤礫多量	ハード	C微量
ト	10YR 4/3	鈍い黄褐色土主体	ロームブロック	礫粒	基盤礫多量	粘質	C少量
チ	10YR 4/4	褐色土主体	ロームブロック		基盤礫多量	ハード	C多量
リ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ロームブロック	礫粒	基盤礫	(ヌ)より少しソフト	
ヌ	10YR 4/4	褐色土主体	ロームブロック	礫粒	基盤礫	ハード	
ル	10YR 3/3	暗褐色土主体	ローム粒　火山灰10%		基盤礫	ややソフト	
ヲ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤礫少量	ややソフト	
ワ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ロームブロック	礫粒	基盤礫50%	ハード	
溝4 あ	10YR 3/3	暗褐色土主体	ローム粒		基盤礫少量	ソフト	
い	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤礫	(あ)よりハード	
柱穴 a	10YR 4/4	褐色土主体	ローム粒少量		基盤礫少量		
b	10YR 3/4	暗褐色土主体	ロームブロック		基盤礫多量	(a)より粘質	



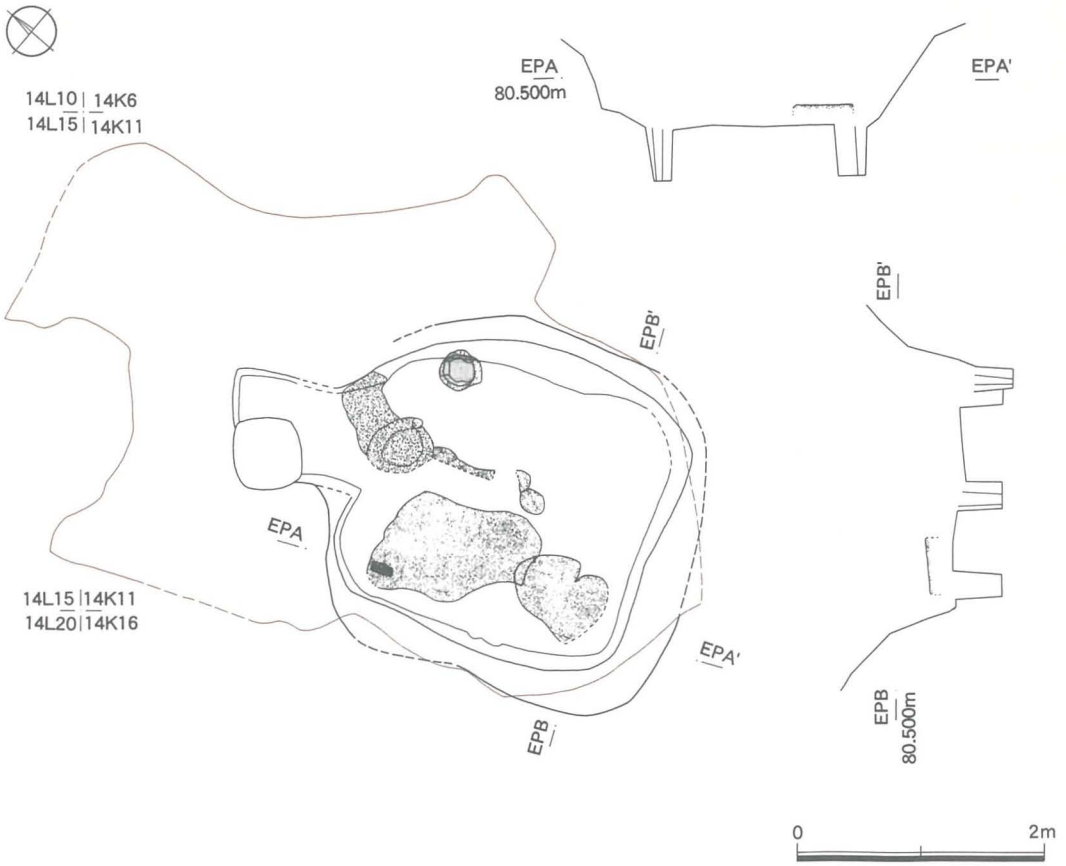
第13図　第95号竪穴建物跡平面図他

表5　第95号竪穴建物跡土層観察表

イ	10YR 4/3	鈍い黄褐色土主体	ロームブロック	礫粒	基盤礫	C少量	焼土粒
ロ	10YR 4/4 4/6	褐色土主体	ロームブロック	礫粒	基盤礫	ハード	焼土粒少量
ハ	10YR 4/4	褐色土主体	ロームブロック	礫粒	基盤礫	ハード	C少量　焼土粒
ニ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ロームブロック	礫粒	基盤礫		C　焼土粒
ホ	10YR 3/2 3/3	暗褐色土主体		礫粒	基盤礫	ややソフト	C　焼土粒
ヘ	10YR 3/3	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒		(ロ)よりすこしソフト	C　焼土粒
ト	10YR 2/3	黒褐色土主体	ローム粒	礫粒少量		ややソフト	C　焼土粒
チ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒少量	礫粒少量　玉砂利少量			C少量　焼土粒少量
リ	10YR 3/3	暗褐色土主体		礫粒　砂混じり	基盤礫	ざらざらソフト	C少量　焼土粒
ヌ	10YR 3/3	暗褐色土主体	ロームブロック	礫粒　砂混じり	基盤礫	(リ)より少しハード	C少量　焼土粒
ル	10YR 3/2 2/3	黒褐色土主体	ローム粒　火山灰	礫粒		ソフト	C　焼土粒
ヲ	10YR 2/2	暗褐色土主体		礫粒　砂混じり	基盤礫	ソフト　粗	C　焼土粒
ワ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒少量	礫粒少量			C少量　焼土粒少量
カ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒少量	礫粒少量		ややハード	C少量　焼土粒少量
ヨ	10YR 4/3	鈍い黄褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤礫		
タ	10YR 4/3	鈍い黄褐色土主体	ローム多い	礫粒			C少量
レ	10YR 3/2	黒褐色土主体	ローム粒少量			ソフト	
ソ	10YR 3/3	暗褐色土主体	ロームブロック	礫粗		ソフト	C　焼土粒
ツ	10YR 4/4	褐色土主体	ローム多量　粘質土	礫粒少量			C少量
ネ	10YR 2/2	黒褐色土主体	ロームブロック	礫粗		ソフト	C　焼土粒
ナ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ロームブロック・粒	礫粒	基盤礫	ハード	C　焼土粒
ラ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒少量	礫粒少量	基盤礫少量	ややハード	焼土粒少量



第14図　第96号竪穴建物跡平面図他



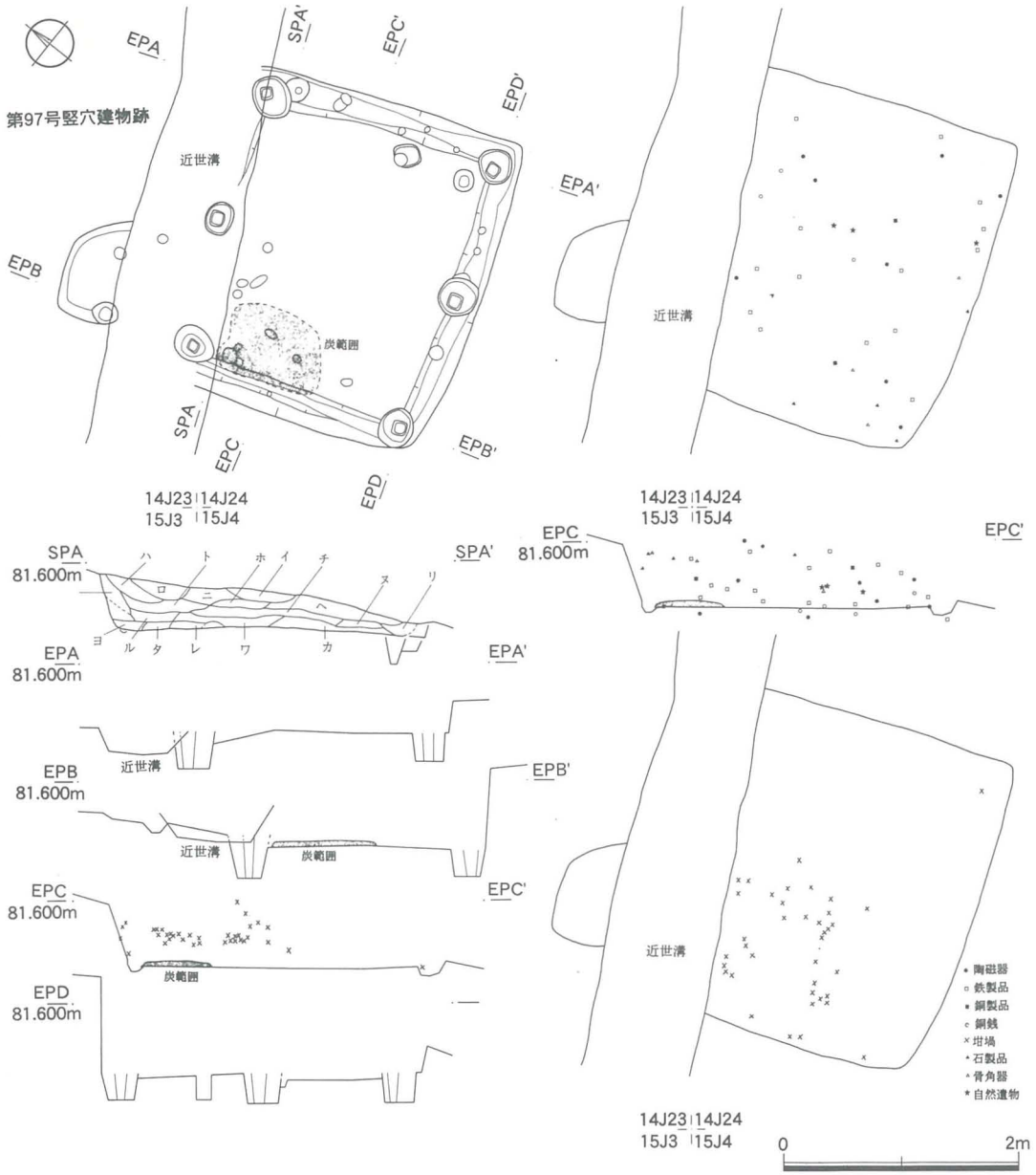
第15図　第96号竪穴建物跡炭・焼土範囲平面図他

表６　第96号竪穴建物跡南北セクション東壁（SPA～SPA′）土層観察表

イ	10YR 3/3	ローム主体	礫粒	基盤礫・粒やや多	ハード		C微量	焼土粒微量
ロ	10YR 2/2	炭化物主体	礫粒	基盤礫				
ハ	10YR 3/4	暗褐色土主体	礫粒			やや粘性	Cやや多	焼土粒少量
ニ	10YR 4/3	ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ主体	礫粒微量				C少量	
ホ	10YR 2/2	炭化物主体			ソフト			焼土粒少量
ヘ	10YR 2/2	炭化物主体			ソフト			焼土粒少量
ト	7.5YR 4/4	褐色土主体		基盤粒多量	ソフト		C微量	
チ	7.5YR 4/6	焼土・炭化物主体			ソフト			
リ	7.5YR 2/1	炭化物主体			ソフト			焼土粒やや多
ヌ	10YR 4/6	ローム主体		基盤礫多量			C少量	
ル	10YR 4/6	ローム主体		基盤礫多量	ややソフト		C少量	
ヲ	10YR 4/4	ローム主体		基盤礫多量	ややソフト		C微量	
ワ	10YR 4/4	ローム主体		基盤礫多量	ややハード		C微量	
カ	10YR 3/4	ローム主体		基盤礫	ソフト		C微量	
ヨ	10YR 4/4	褐色土主体		基盤粒やや多	ややソフト		C少量	

表７　第96号竪穴建物跡東西セクション北壁（SPB～SPB′）土層観察表

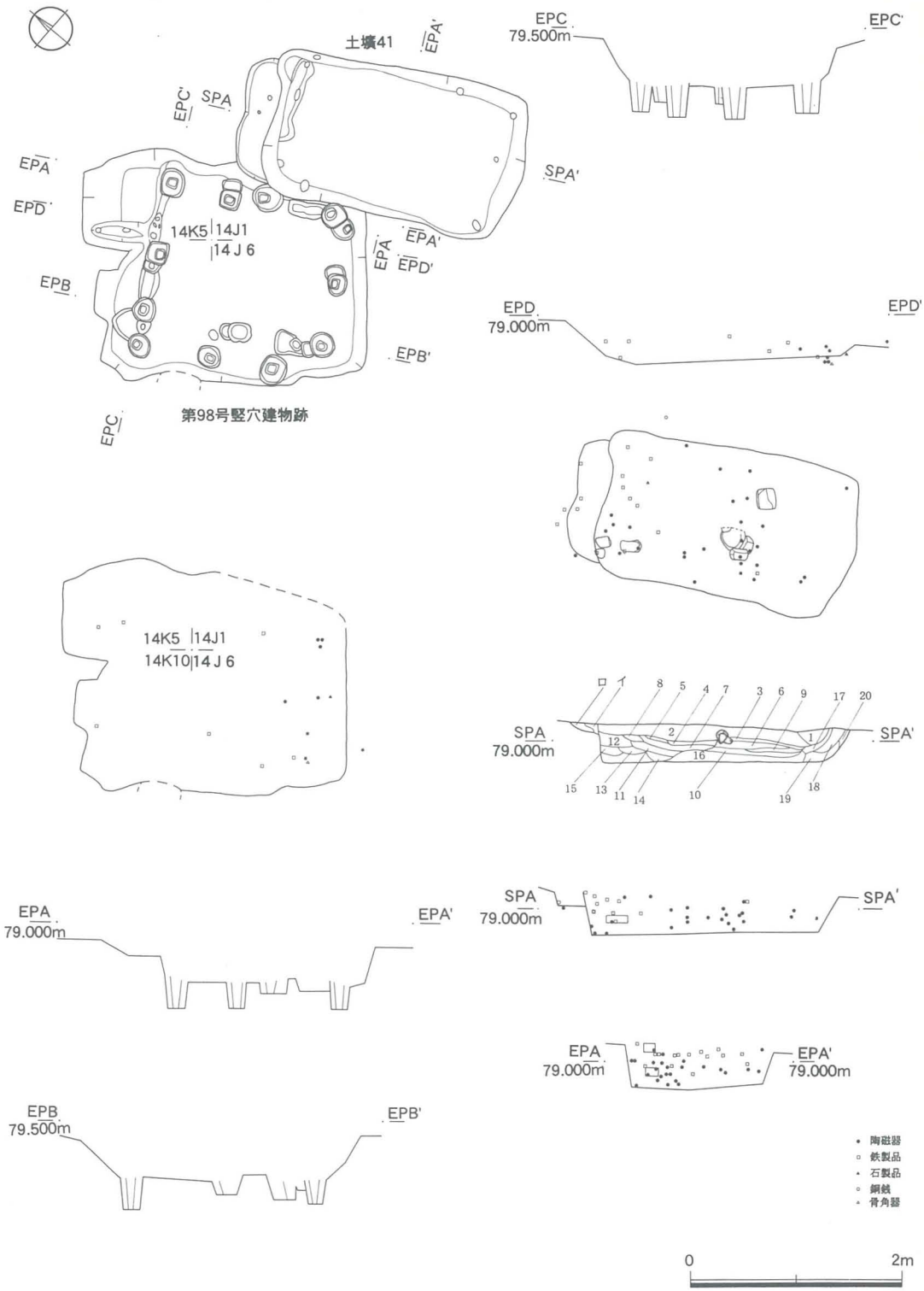
ハ	10YR 3/4	暗褐色土主体	礫粒			やや粘性	Cやや多	焼土粒少量
ニ	10YR 4/3	ﾛｰﾑﾌﾞﾛｯｸ主体	礫粒微量				C少量	
ル	10YR 4/6	ローム主体		基盤礫多量	ややソフト		C少量	
ワ	10YR 4/4	ローム主体		基盤礫多量	ややハード		C微量	
タ	10YR 2/2	炭化物主体	礫粒	基盤礫多量				
レ	10YR 4/4	ローム主体		基盤礫やや多	ややハード		C微量	
ソ	7.5YR 2/1	炭化物主体						
ツ	7.5YR 3/3	暗褐色土主体	礫粒やや多			やや粘性	C微量	
ネ	7.5YR 3/4	暗褐色土主体	礫粒多量		ややハード			
ナ	10YR 2/2	炭化物主体						焼土粒やや多
ラ	10YR 2/3	黒褐色土主体	礫粒		ソフト		C少量	
ム	10YR 4/6	ローム主体			ややソフト		C微量	
ウ	7.5YR 2/2	炭化物主体			ややソフト			焼土粒やや多
キ	10YR 4/4	ローム主体		基盤礫多量	ややソフト		C微量	
ノ	10YR 4/4	ローム主体		基盤礫多量	ややソフト		C微量	焼土微量
オ	7.5YR 3/4	焼土主体			ややソフト		C多量	



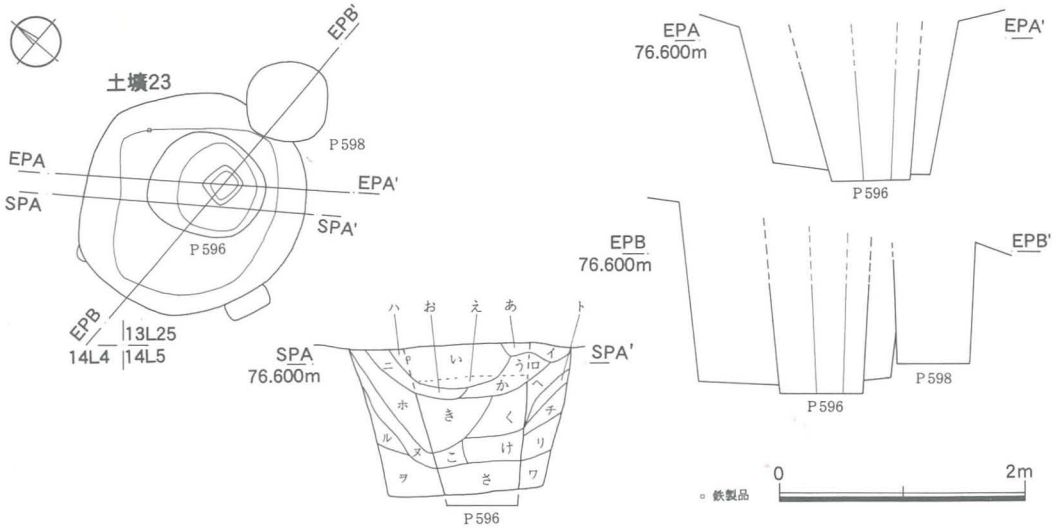
第16図　第97号竪穴建物跡平面図他

表 8　第97号竪穴建物跡土層観察表

イ	10YR 3/3	暗褐色土主体	粘質土	礫粒　基盤礫	ハード	C	焼土粒
ロ	10YR 3/3	暗褐色土主体	ロームブロック	礫粒　石　砂少量	ややソフト	C	焼土粒
ハ	10YR 3/3 3/4	暗褐色土主体	ロームブロック10%　粘質土	礫粒少量	ややソフト		焼土粒少量
ニ	10YR 3/3	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒　砂利少量	ソフト	C	
ホ	10YR 4/3 4/4	鈍い黄褐色土主体		礫粒	ややソフト　粘り有る	C	
ヘ	10YR 4/3	鈍い黄褐色土主体	ロームブロック10%	礫粒　基盤礫	ややソフト		焼土粒少量
ト	10YR 3/3	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒　基盤礫	ややハード		焼土粒
チ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ロームブロック	礫粒少量		C少量	焼土粒少量
リ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒少量	ややハード　しまり有り	C	焼土粒
ヌ	10YR 4/6	褐色土主体		礫粒	ハード	C	
ル	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒少量	ソフト　ポロポロ		焼土粒少量
ヲ	10YR 3/4 4/4	暗褐色土主体	ロームブロック　粘質土	礫粒　基盤礫	ややハード	C	
ワ	10YR 4/4	暗褐色土主体	ロームブロック・ローム粒	礫粒　基盤礫	ハード　しまり有り	C	
カ	10YR 4/4 4/6	暗褐色土主体	ロームブロックやや多い	礫粒　基盤礫	ハード		焼土粒少量
ヨ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒　粘質土	礫粒	ソフト	C	焼土粒
タ	10YR 2/3	黒褐色土主体	ローム粒　粘質土	礫粒		C多量	焼土粒
レ	10YR 3/3	暗褐色土主体	ローム　粘質土	礫粒		C	焼土粒



第17図　第98号竪穴建物跡・土壙41平面図他



第18図　土壙23平面図他

表 9　土壙23土層観察表

イ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒10%	礫粒少量		(イ)より少し粘質		
ロ	注記なし							
ハ	注記なし							
ニ	10YR 3/3	暗褐色土主体	ローム粒少量	礫粒	基盤礫			
ホ	10YR 3/3	暗褐色土主体	ローム粒30%	礫粒少量		しまり有り	C微量	
ヘ	10YR 3/3	暗褐色土主体	ローム粒多量	礫粒少量		(ニ)より粘質		
ト	10YR 3/2	黒褐色土主体	ローム粒少量	礫粒少量		ソフト		
チ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム多量	礫粒少量		やや粘質		
リ	10YR 4/4	褐色土主体	ローム多量	礫粒少量		ハード　粘土質		
ヌ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム多量	礫粒少量	基盤礫少量	粘質		
ル	10YR 4/4	褐色土主体	ローム多量	礫粒少量		ハード　粘土質		
ヲ	7.5YR 4/4	褐色土主体	全面ローム	礫粒少量				
ワ	7.5YR 4/4	褐色土主体	全面ローム	礫粒少量				
柱穴あ	注記なし							
い	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒30%	礫粒	基盤礫	(イ)より粘質	C	焼土粒
う	注記なし							
え	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒多量				
お	10YR 3/3	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤礫	(ニ)より少しソフト		
か	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒40%	礫粒少量		やや粘質		
き	10YR 4/4	褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤礫	ソフト　粗	C	
く	10YR 4/4	褐色土主体	ローム粒	礫粒		(き)より少しハード	C	
け	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒少量　火山灰20%	礫粒		ソフト	C少量	
こ	10YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒多量　火山灰			ソフト	C	
さ	10YR 7/2	にぶい黄橙色	全面火山灰					

表10　土壙41土層観察表

1	7.5YR 4/4	ハードローム主体	ハードローム	礫粒		ややハード	C少量	
2	7.5YR 4/3	褐色土主体	ソフトローム	礫粒		ソフト	C少量	焼土粒微量
3	7.5YR 3/3	暗褐色土主体	ソフトローム			ソフト		焼土粒微量
4	7.5YR 3/3	暗褐色土主体	ソフトローム			ソフト		
5	7.5YR 3/1	暗褐色土主体	ソフトローム			ソフト	C微量	
6	7.5YR 2/2	黒褐色土主体	ソフトローム　黒色土　火山灰少量			ソフト	Cブロック状	
7	7.5YR 2/2	黒褐色土主体	ソフトローム　黒色土			ソフト	Cブロック状	魚骨やや多い
8	7.5YR 4/4	褐色土主体	ソフトローム			ソフト	C少量	魚骨微量
9	7.5YR 2/2	黒褐色土主体	ローム粒			ソフト	Cブロック状	
10	7.5YR 2/2	黒褐色土主体				ソフト　全面赤み有り		焼土粒微量
11	7.5YR 4/3	褐色土主体	ソフトローム			ソフト		焼土粒微量
12	7.5YR 4/3	褐色土主体	ソフトローム			ソフト	C少量	
13	7.5YR 4/3	褐色土主体	ハードロームブロック状				C少量	
14	7.5YR 4/3	褐色土主体	ソフトローム			ソフト		焼土粒微量
15	7.5YR 4/3	褐色土主体				ややソフト	Cブロック状	
16	7.5YR 4/3	ソフトローム主体	ハードロームブロック状			ソフト	C少量	焼土粒微量
17	7.5YR 3/2	黒褐色土主体	ソフトローム			ソフト	C少量	
18	7.5YR 3/2	黒褐色土主体	ソフトローム			ソフト		
19	7.5YR 3/2	黒褐色土主体				ソフト	C微量	
20	7.5YR 4/3	褐色土主体				ややハード	C微量	
イ	7.5YR 4/4	褐色土主体	ローム粒			ややハード	C微量	焼土粒微量
ロ	7.5YR 3/4	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒		ソフト	C微量	

(5) 土壙

第一平坦面北半部地区には多く見られ。南半部地区は三基のみと少ない。

土壙23（第18図・表９・ PL.13－１）：13L25区に位置する。平面形は径90㎝の円形状である。深さ60㎝。土壙覆土中に柱穴Ｐ596が掘り込まれている。Ｐ596が中央付近に掘り込まれているため堆積状況は分かりづらい所が多い。残存部で見ると幾つかの層の流れがあり、入り乱れた堆積状況を観察できないので、一気に埋め戻されたものでは無いと推測する。覆土中より炭化種子、魚骨片、不明溶解物を少量検出した。遺物は青磁碗片１点が出土している。

土壙41（第17図・表10・ PL．12－７・８）：14Ｊ１区に位置する。長辺2.35ｍ、短辺1.45ｍ、深さ35㎝。覆土中位に炭化物を多量に含んだ（土層図６・７・９・15ブロック）層が堆積する。底面四隅でピットを検出した。土留めの壁などの構築物が推測される。北側には幅30㎝、深さ４㎝程の段を有する。

出土遺物　青磁碗、白磁端反皿、見込に吉祥文字をデザインした碁筒底染付皿、染付碗（第30図12)、灰釉端反皿、灰釉連弁文丸碗、口唇部が玉縁状に作られる鉄釉碗（大窯Ⅰ)、口縁部の括れの弱い鉄釉碗（同)、越前擂鉢・甕、砥石（第34図１)、釘、小札などがある。

サンプリングした覆土中より魚骨片、米・小豆などの炭化した種子､不明溶解物などを検出した。

平成９年度調査でも床面にピットがある同様の土壙（土壙１）を検出したが、遺物の量に違いがあり、堆積土に炭化物層が無いので、性格が違うのかもしれない。

土壙48（第19～21図・表11～13・ PL.２－２・15）：14Ｋ15区に位置する。長辺80㎝、短辺70㎝、深さは残存部で最大17㎝を測る。長方形を呈する。この付近は立木があり､根による攪乱などがあり、遺構を捉えるのは困難な場所であった。西部分はＰ178に切られている。

14Ｋ15区付近の盛土を調査したところ黒色土の範囲を検出した。土壙を想定し、半裁したところ銅銭が複数出土し（ PL.15－１)、完掘までに計74枚が出土した（ PL.15－２)。また、前述の立木の根による攪乱で若干の移動が想定される。第19図の図上の一部は、それと考えることもでき、参考までに図示した。

堆積状況から明瞭な立ち上がりを確認できなかったが、銭に木片が付着していたこと、釘（第20図１・２）が２点出土していることから木箱に納められていた可能性があると考えられる。堆積状況からは箱部分を想定する立ち上がりを確認できなかったが、底部に付く段が箱の位置の痕跡と考えられる。

出土遺物　銭種は13種74枚を確認した（表13)。唐銭１種、北宋銭10種、明銭２種がある。錆や擦れのため一部判読できなっかったが、判読可能の範囲で字体などの特徴から予想される銭名を参考までに掲げた。最古銭は開元通寶（初鋳年、621年）で、出土枚数は17枚と最も多い。最新銭は永楽通寶（初鋳年、1408年）である。洪武通寶の10枚の内２枚は、背面右に「一銭」と記されている（第21図14・17)。径は22㎜で、12・13・15・16の24㎜洪武通寶と比べると幾分小さい。孔も外形は方形になっているが、内形は円形を呈する。観察の結果、無文銭と思われる銭は特に見い出せなかったが、模鋳銭も含めて検討の余地がある。

上記の土壙の他にも形態に特徴があり、遺物も若干出土しているものがある。調査区外に延長があるため完掘出来ず、図の作成も未了なので、以下概要のみ記す。

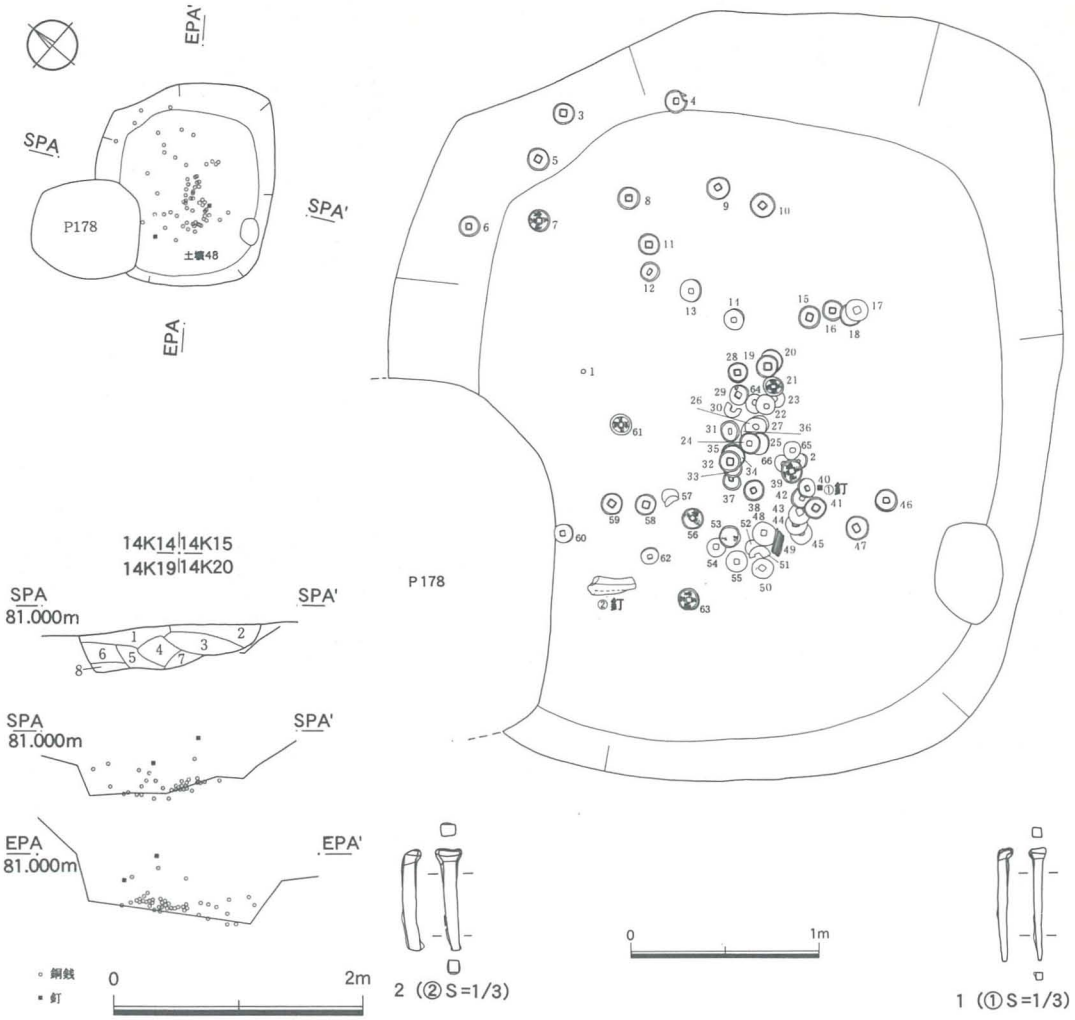
土壙22（ PL.12－７）：14Ｌ25区に位置する。長辺1.4ｍ以上、短辺1.3ｍ、の長方形を呈する。深さ45㎝。土壙41に近い形状を示すと思われる。出土遺物は青磁碗片がある。

土壙46（ PL.12－１～４）：14Ｊ７区に位置する。長辺3.6ｍ以上、短辺1.0ｍの長い土壙である。深さは50㎝。南西部分で溝23を切り、Ｐ452に切られる。溝23より新しく、想定される建物跡より古いと考えられる。

出土遺物は、瀬戸美濃灰釉端反皿（同４)、白磁端反皿、染付端反皿、越前擂鉢、刀子（第32図２・ PL.15－３）などがある。

サンプリングした覆土中より、米などの炭化種子、魚骨片、不明溶解物などを検出した。

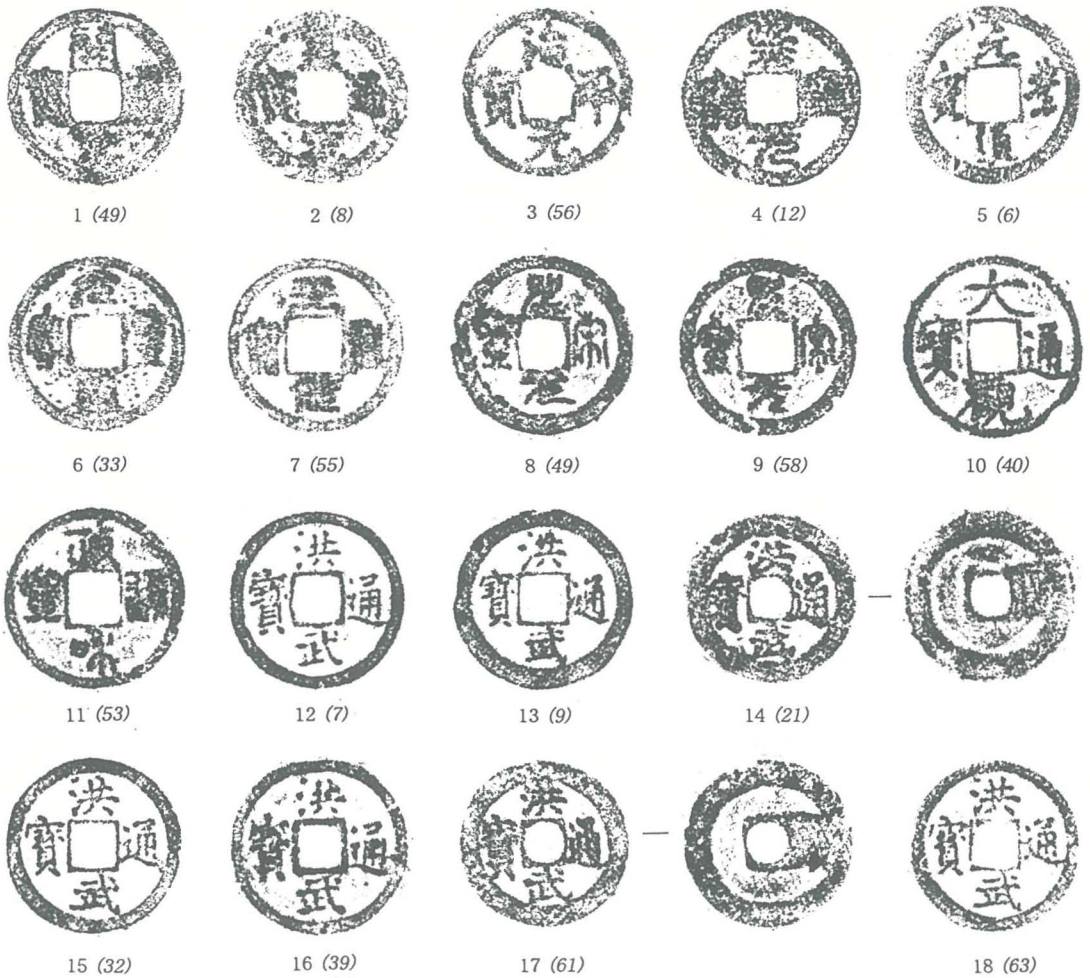
第19図　土壙48と集辺地区銭の出土状況



第20図　土壙48平面図他

表11　土壙48土層観察表

1	7.5YR 3/3	暗褐色土主体			基盤粒やや多	ややソフト	C	骨片	焼土粒やや多
2	7.5YR 3/3	暗褐色土主体		礫粒微量	基盤礫・粒やや多	ややソフト	C	骨片	焼土粒やや多
3	7.5YR 3/3	暗褐色土主体		小礫	基盤粒やや多	ソフト	C少量	骨片やや多	焼土粒微量
4	7.5YR 4/3	褐色土主体			基盤粒微量	ソフト	C少量	骨片やや多	
5	7.5YR 3/4	暗褐色土主体			基盤粒少量	ややソフト	C	骨片少量	焼土粒微量
6	7.5YR 3/3	暗褐色土主体	ロームブロック微量			ソフト	C少量	骨片	焼土粒微量
7	10YR 3/2	黒褐色土主体				ソフト	C	骨片	焼土粒やや多
8	10YR 3/4	暗褐色土主体			基盤粒微量	ややソフト			



第21図　土壙48出土銅銭拓影

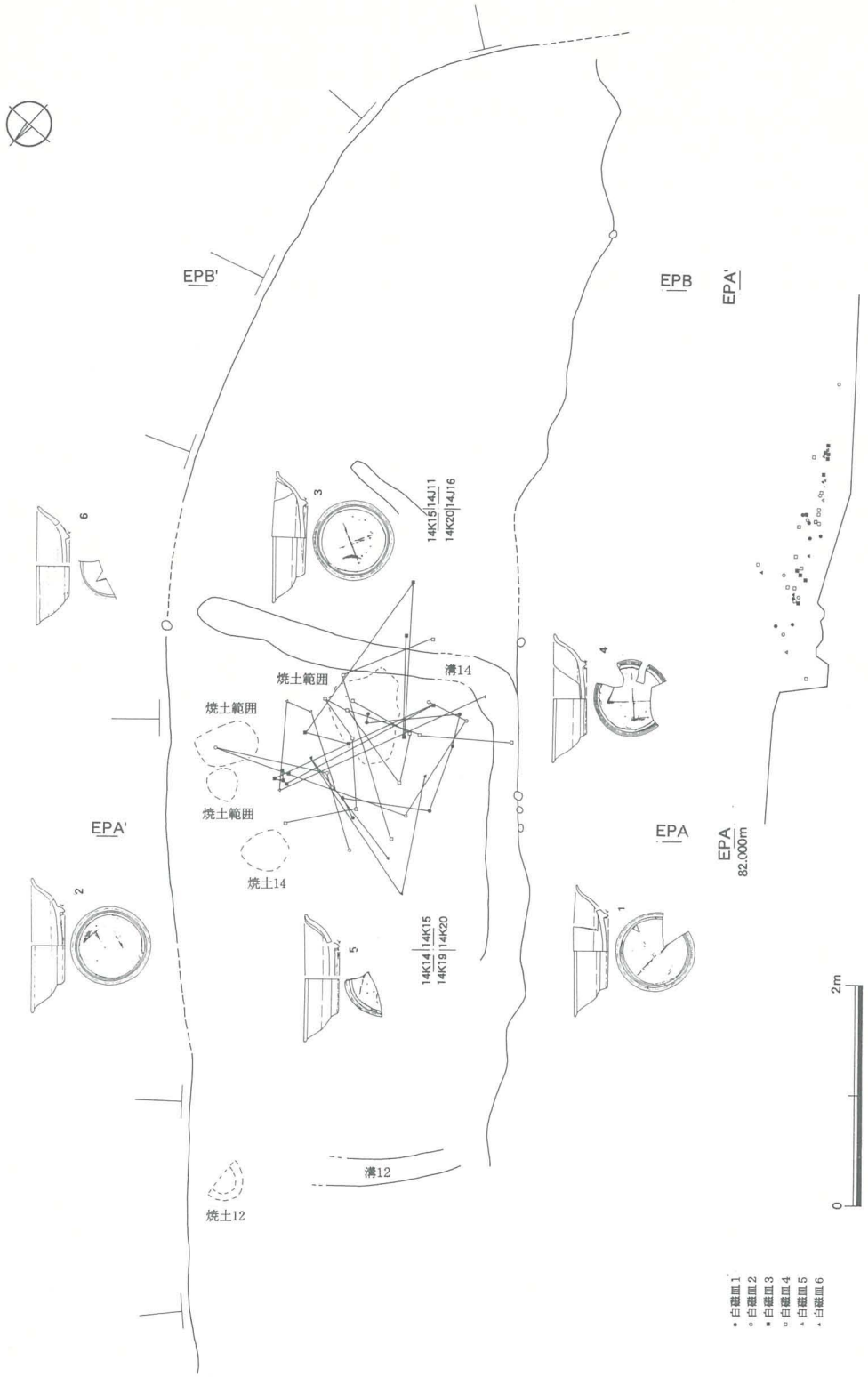
原寸・（）内は出土状況微細図並びに一覧表番号に対応

表12　土壙48出土銭一覧表

No.	銭貨名	備考	No.	銭貨名	備考	No.	銭貨名	備考
1	判読不能		24	皇宋通寶		49	皇宋通寶	
2	開元通寶		25	開元通寶			判読不能	
3	元豊通寶		26	判読不能			開元通寶	
4	天□元寶		27	開元通寶			聖宋元寶	
5	天聖元寶		28	判読不能			洪武通寶	
6	元豊通寶		29	開元通寶			開元通寶	
7	洪武通寶		30	天□□寶	天聖元寶か	50	開元通寶	
8	皇宋通寶		31	開元通寶		51	判読不能	
9	洪武通寶		32	洪武通寶		52	開元通寶	
10	開元通寶		33	元豊通寶		53	政和通寶	
11	□宋□□		34	元□通寶		54	政和通寶	
12	熙寧元寶		35	淳化元寶		55	元豊通寶	
13	判読不能		36	洪武通寶		56	治平元寶	
14	判読不能		37	開元通寶		57	判読不能	
15	天聖元寶		38	嘉□□寶	嘉祐通寶か	58	聖宋元寶	
16	□□元寶		39	洪武通寶		59	元□通寶	
17	永楽通寶		40	大観通寶		60	元□通寶	元符通寶か
18	開元通寶		41	□□通寶	元祐通寶か	61	洪武通寶	背右「一銭」
19	元祐通寶		42	洪武通寶		62	元□□寶	元豊通寶か
	判読不能		43	□□元寶	熙寧元寶か	63	洪武通寶	
	判読不能		44	開元通寶		64	判読不能	
20	判読不能		45	皇宋通寶		65	判読不能	
21	洪武通寶	背右「一銭」	46	開元通寶		66	判読不能	
22	□□元寶	熙寧元寶か	47	元□通寶	元祐通寶か	67	皇宋通寶	
23	判読不能		48	元□通寶	元豊通寶か			

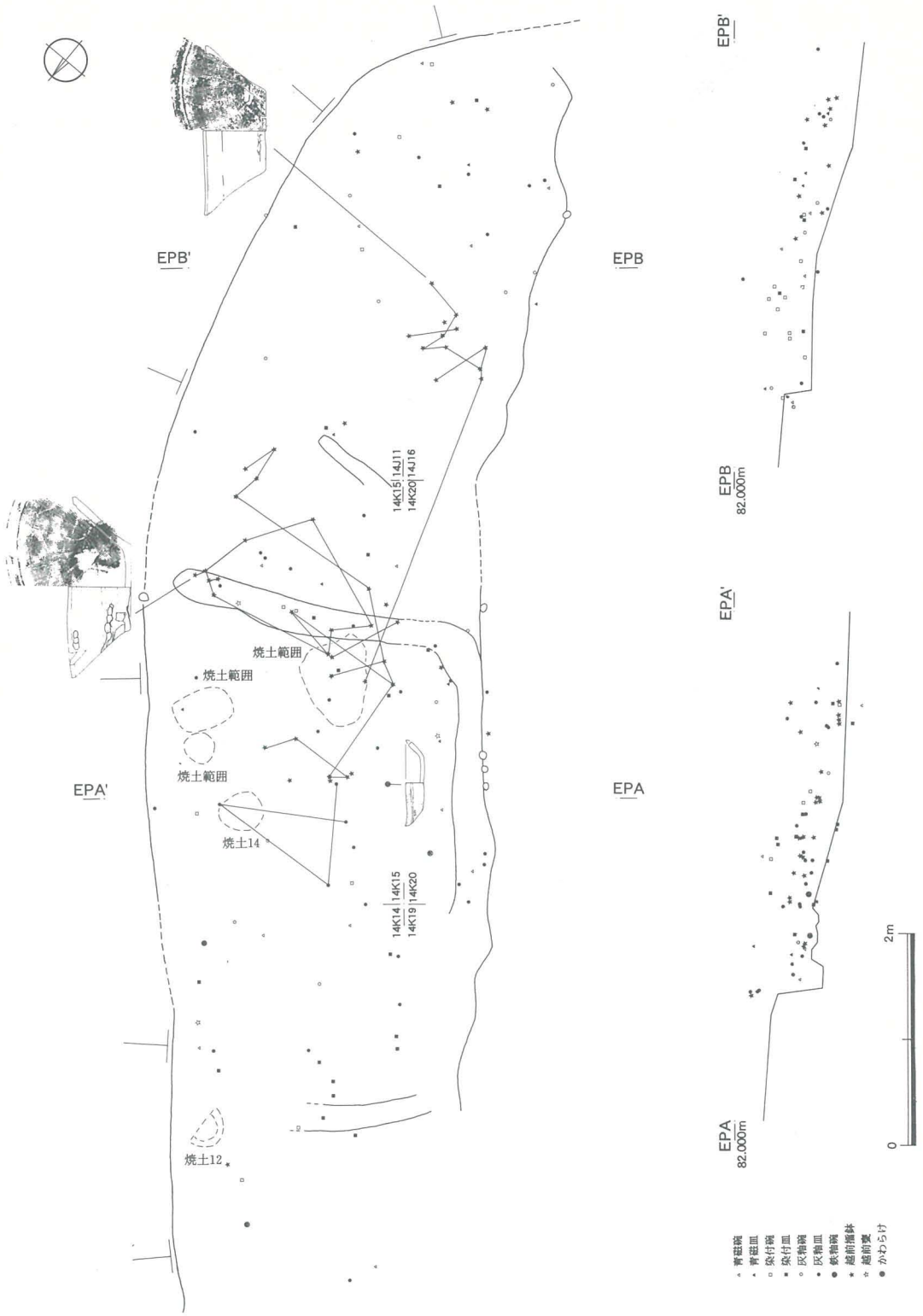
表13　土壙48出土銭集計表

銭貨名	国名	初鋳年	枚数
開元通寶	唐	621	14
淳化元寶	北宋	990	1
天聖元寶	北宋	1023	2
皇宋通寶	北宋	1038	5
治平元寶	北宋	1064	1
熙寧元寶	北宋	1068	1
元豊通寶	北宋	1078	4
元祐通寶	北宋	1086	1
聖宋元寶	北宋	1101	2
大観通寶	北宋	1107	1
政和通寶	北宋	1111	2
洪武通寶	明	1368	10
永楽通寶	明	1408	1
判読不能			29
計			74

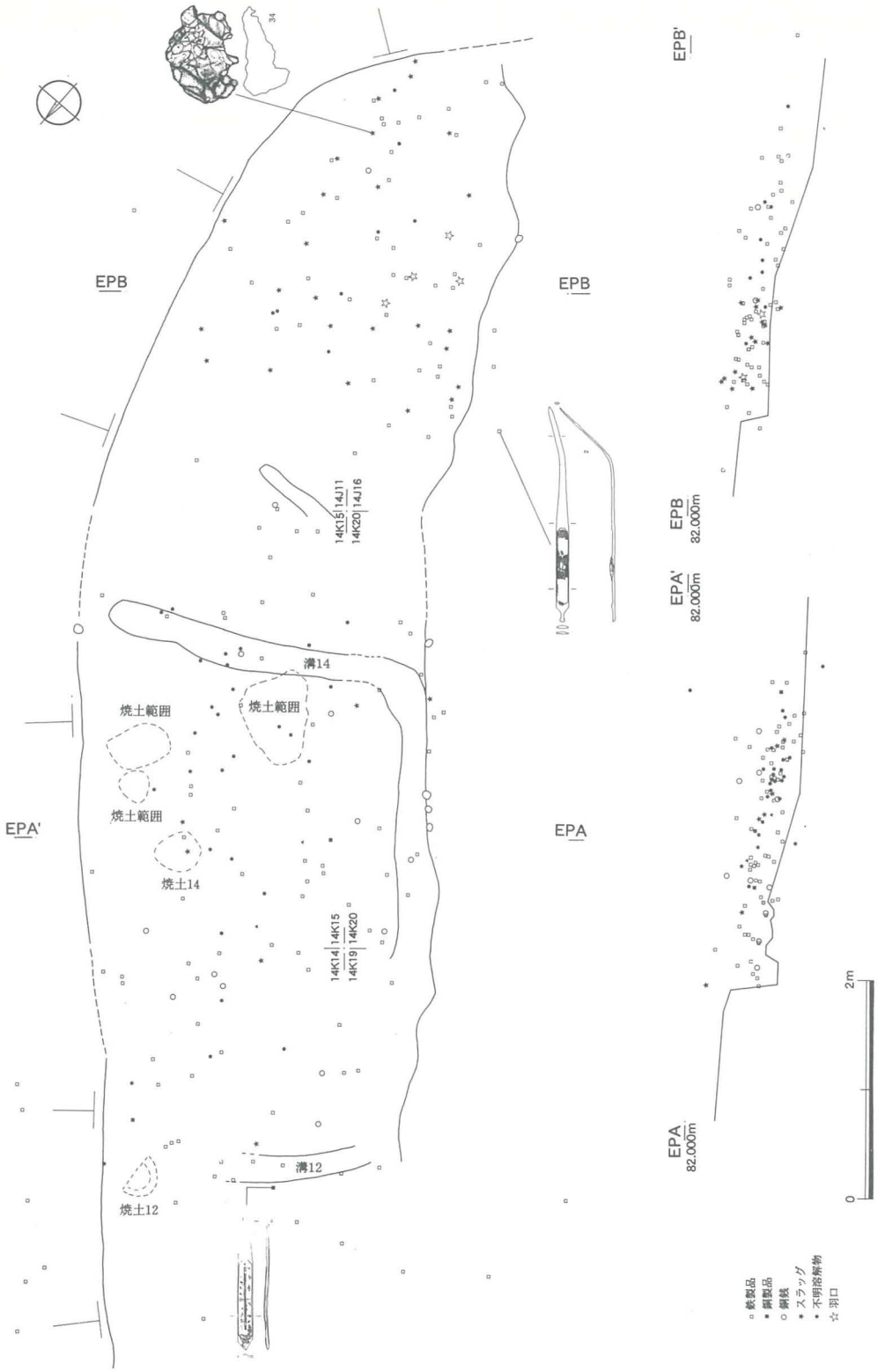


第22図　遺物分布図１（印のある白磁皿）

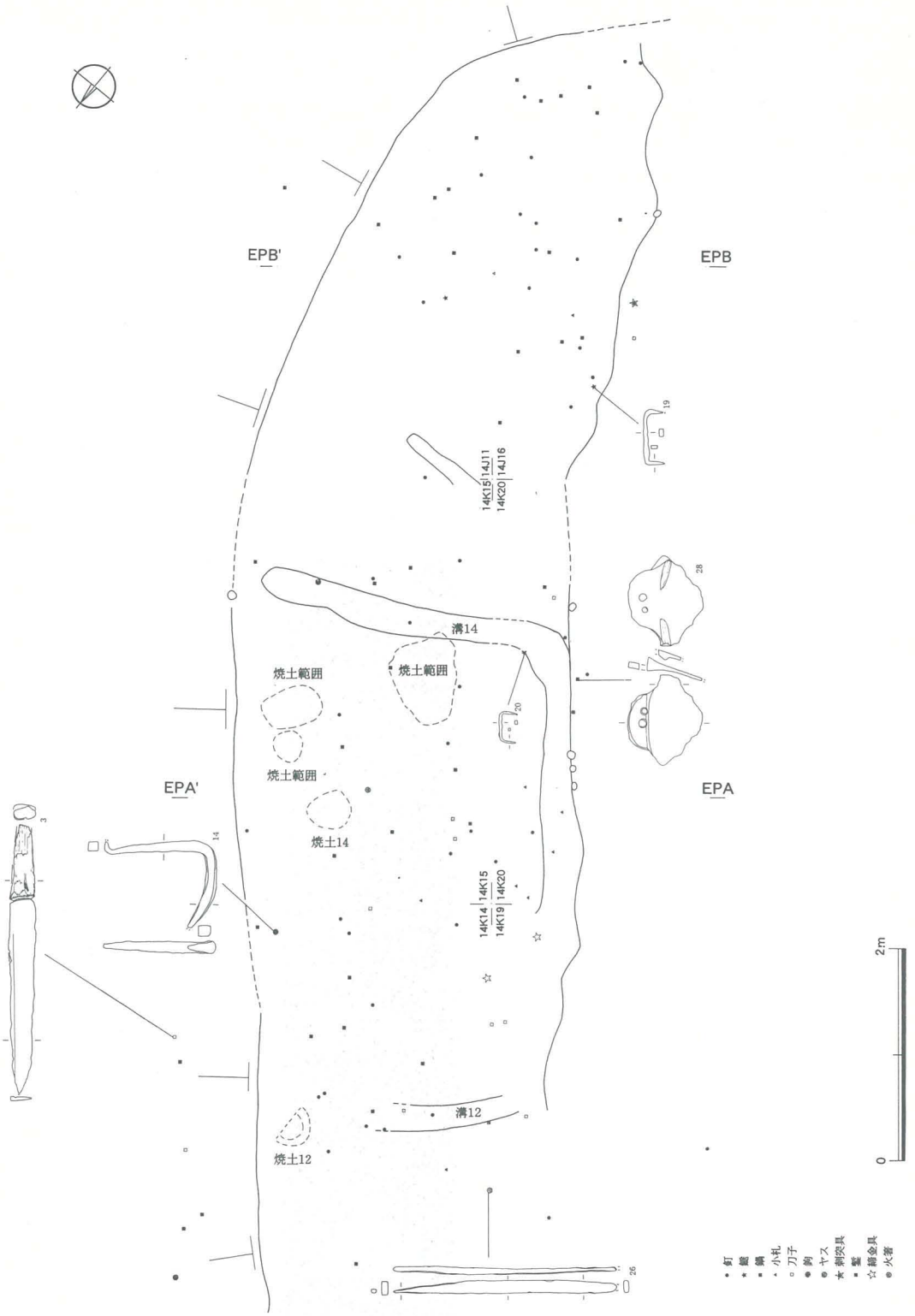
第23図　遺物分布図２（白磁皿）



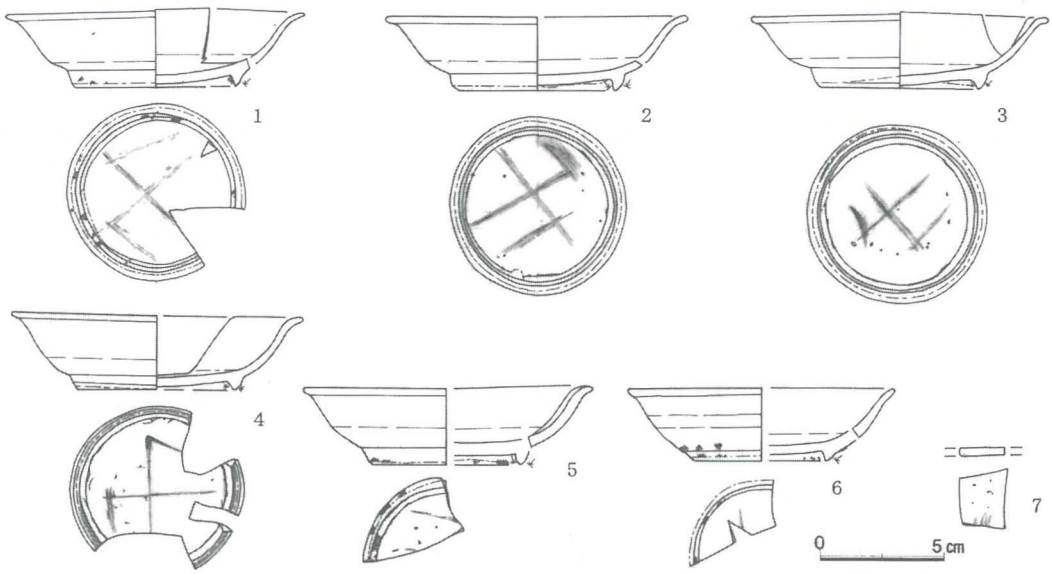
第24図　遺物分布図３（陶磁器）



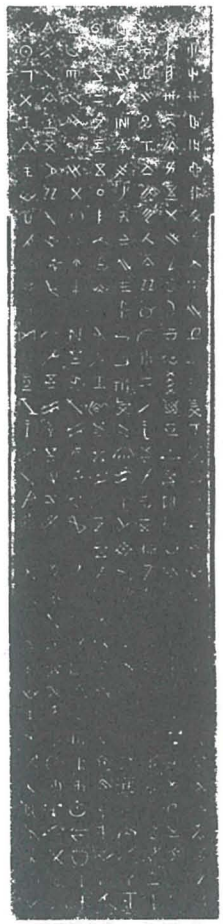
第25図　遺物分布図４（鍛冶・金属製品）



第26図　遺物分布図５（鉄製品・種別）



第27図　調査区出土遺物・参考図

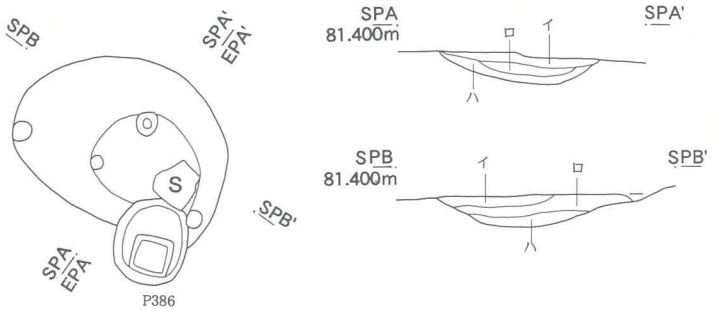


松前城資料館所蔵の「家紋」　札前　一九八五年　松前町教育委員会より

有巣中組	ジュウモンジ	ヤマミチ	ソバツボ	イゲタ	イゲタノナカイチ
カクイゲタ	ソバツボノナカイチ	ゴモンジ	ロクモンジ	カタリューゴ	カラカサ
デヤマ		上有巣上組	ヤマ	ヤマノナカイチ	イリヤマ
ソバツボノシタイチ	カジバサミ	リューゴ	オリマツ	ヤマニキリコミ	
下有巣下組	カギ	カギノソデイチ	サイタリ	コイバシノソデイチ	ニノジ
カッチンコ	ゲノジ	センノジ		向有巣間組	カセ
カセイチ	ヒツカ	ヒイツカノ(デヒイツチノジ)	ナカミジカサン	ダラサン	トリアシ
カタマス		俱	カネ	カネイチ	カネニ
カネサン	カネノミジカデイチ	ミツミダレ	ヒチノジ(ヒチノジ)	タチバナ	
中野	マス	マスイチ	マスニ	ツルカケマス	サカマス

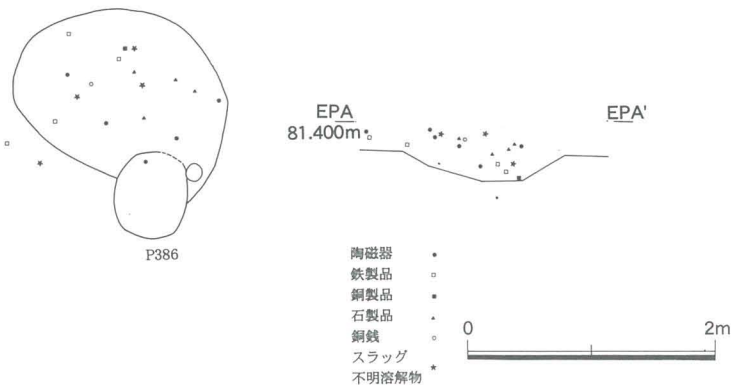
綜合日本民俗語彙　一九五五・五六民俗学研究所編より

14K15 | 14J11
14K20 | 14J16

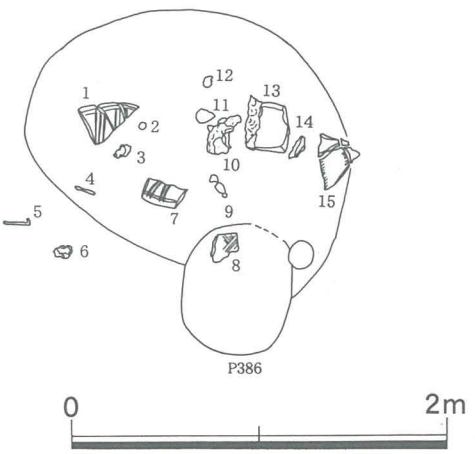


イ	10YR2/2	黒褐色土主体	ローム粒少量	炭化物やや多量	骨片微量	不明溶解物少量	ソフト
ロ	10YR2/3	黒褐色土主体	ローム粒少量	基盤粒少量	炭化物微量	骨片微量	ソフト
ハ	10YR3/3	暗褐色土主体	ローム粒・ロームブロックやや多量	小礫	炭化物少量	ソフト

14K15 | 14J11
14K20 | 14J16

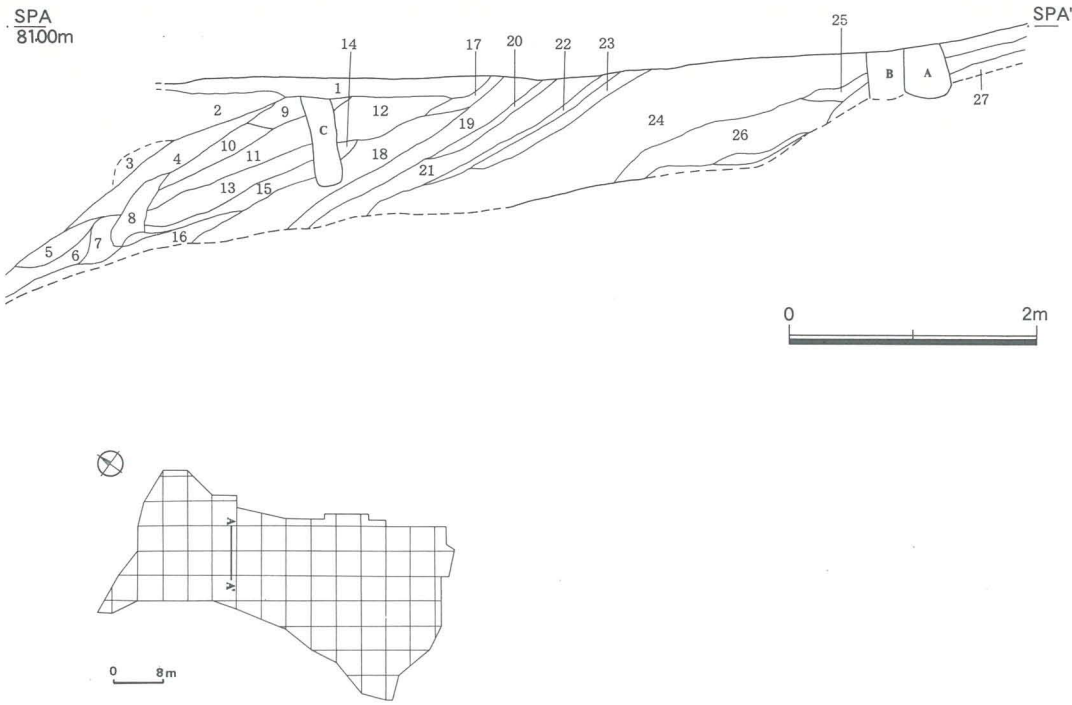


14K15 | 14J11
14K20 | 14J16



1・7・8・15	陶磁器（越前擂鉢）
2	銅銭
3・6・12	不明溶解物
4・5	鉄製品
9・11・13・14	石製品（羽口）
10	スラッグ

第28図　鞴羽口出土状況図他



第29図　盛土堆積図

表14　盛土土層観察表

1	7.5YR	4/4	褐色土主体	ロームブロック　ローム粒		基盤礫・粒			C微量
2	10YR	3/3	暗褐色土主体	ローム粒		基盤礫・粒	ややソフト		C微量
3	10YR	4/4	褐色土主体	ローム粒		基盤礫・粒	ソフト		C少量
4	7.5YR	4/4	基盤礫層	ローム粒		基盤礫・粒	ソフト		C少量
5	7.5YR	4/4	褐色土主体	ローム粒		基盤粒			C微量
6	7.5YR	4/4	褐色主体		礫粒	基盤礫・粒	ハード		C微量
7	7.5YR	4/4	基盤礫層	ローム粒		基盤礫・粒	ソフト		
8	7.5YR	4/4	褐色土主体	ローム粒		基盤粒	ややハード		C微量
9	7.5YR	3/3	基盤礫層			基盤礫・粒	ソフト	焼土粒微量	Cやや多い
10	7.5YR	3/4	基盤礫層			基盤礫・粒	ソフト		C少量
11	7.5YR	4/4	褐色土主体	ローム粒		基盤礫・粒	ややハード		C微量
12	7.5YR	3/4	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒	基盤礫・粒			C微量
13	7.5YR	3/4	暗褐色土主体			基盤礫・粒	ややハード		C微量
14	7.5YR	4/4	褐色土主体	ローム粒		基盤礫・粒			
15	7.5YR	4/3 3/3	暗褐色土主体			基盤礫・粒	ややハード	焼土粒微量	C少量
16	7.5YR	3/4	暗褐色土主体	ローム粒		基盤礫・粒	ややハード		
17	7.5YR	4/4	基盤礫層		礫粒	基盤礫	ソフト		C微量
18	5YR	4/6	赤褐色土・基盤礫層				ハード		
19	7.5YR	4/4	褐色土主体	ローム粒		基盤礫・粒	ややハード		
20	7.5YR	4/4	褐色土・基盤礫主体			全面5～6cmの円礫			C微量
21	7.5YR	3/3	暗褐色土主体	ローム粒	礫粒		ソフト		C少量
22	10YR	4/4	基盤礫層			全面5～6cmの円礫			
23	7.5YR	4/6	基盤礫層			全面5～6cmの円礫			
24	10YR	4/4	褐色土・基盤礫層	ローム粒		基盤礫・粒	ハード		
25	7.5YR	4/4	褐色土・基盤礫層	ローム粒		基盤礫・粒	ハード		
26									
27									

(6) 通路跡（第４図・ PL.６・７）：14Ｊ８区～15Ｊ12区にかけて東西に位置し、調査区外、北東方向に延長があると想定される。区画溝でもある溝16・20を側溝とし、溝端部を含め道幅約４ｍと想定する。東側に寄って道幅約5.6ｍの幕末期の通路（本書附図青刷部分）があり、この側溝により遺構の一部は攪乱を受けている。路面の全体が基盤礫・粒混じりの土によって整地がされている。路面を切っている幕末の側溝の壁を観察したところ、路面の下層には14Ｊ７区付近では焼土ブロックが見られる。通路設置以前の遺構の一部の可能性も高いが、炭化物などが混じるので、整地土として投げ込まれたもののと考えられる。一部礫で擁壁されている（ PL.６－１・２）。北西側も同様に礫で擁壁していたようであるが、残存状況が悪く一部しか検出できなっかた。溝16・20の南西側延長の段縁にも溝があった可能性が高いが、後世もこの周辺が通路であったことや、植樹された桜などの根により一帯が攪乱を受けていたため検出できなかった。溝底面には小柱穴が列状に並ぶ。第二・三平坦面に続く中央通路の延長と考えられる。

(7) 地割

南半部地区の中央通路に面する南東部で一つ、北半部地区で三つ、溝や段で区画される地割を検出した。北半部地区で検出した地割は、その大半が調査区外に広がる可能性があり、全容は不明である。未調査区の第一平坦面の様相を知るためにも重要であり、以下所在遺構や想定できる遺構の概要を記す。中央通路跡を挟んで北半部地区南側にも、２つの地割が想定できるが、前者よりも調査面積も狭く確認できた遺構も少ないので今回は割愛する。

14Ｋ15区周辺地割（第19・22～27図、 PL.16）

調査区中央14Ｋ15区周辺で溝12・14・17と段に画される地割を検出した。空壕Ｂに北に隣接する平坦面南半部地区は溝や段による地割を作らない大きな平坦面（曲輪）であり、その中にあって北東部を画するこの地割は異質な存在である。地割内には柱列（Ｐ186・185・390、Ｐ379・384・387・388、Ｐ382・386・389）を検出した。一案では、この段と溝は古い地割りの残骸で、柱列はそれに伴う掘立柱建物跡のものとも考えた。しかし、段の下にある北半部地区14Ｊ６区周辺地割では遺構の重複が多く、館成立時から存在していたと思われるので、南半部地区の地割がある時期まで、この部分に張り出していたとは思えない。従って、前述の柱列は建物跡ではなく、塀と考えた方が良さそうである。

又、この地割からは大量の遺物が出土し、中にはこの地割の性格を示唆すると思われる遺物もある。以下、遺物の種毎に概略を記す。

高台に印のある白磁皿について（第22・27図・PL.３・17）

高台に印のある白磁皿が７個体出土した。年代は16世紀全般を通して見られるもので、福井県朝倉氏一乗谷遺跡や青森県浪岡城跡など、各地の戦国期遺跡でもよく見られるものである。勝山館跡でも、瀬戸美濃灰釉端反皿と並んでよく見られる遺物である。内６個体は端反皿で、１点は底部片のみで、器形は不明である。１～４は印は鎌あるいは鍬を交差させたような形であり、５・６の２点も同じ印を記していると考えられる。７はこの地割外の遺物であるが、同類のものとして掲げた。小さい破片なので、印の形態は推測出来ない。肉眼・ルーペによる観察の結果、釉薬の上に書かれたものであることを確認した。線と平行な非常に細かな引っ掻き傷が認められるので、堅いもので引っ掻き、擦り込むように書かれたと推測される。顔料の特定などは、化学的な分析を待たなくてはならない。１～４は、いずれも最初に×印に交わる点から書き始めているようである。この印がある白磁皿についての現段階での位置付けは後述をした。

出土分布状況は14Ｋ15区に集中して見られる。更に細かく見ると、溝14を越える破片は僅かである。このことから、これらの白磁皿はセット関係にあることが想定される。しかし、垂直分布を見ても分かるように、地割の底面よりもかなり高いところから出土しており、溝が廃絶している可能性もある。あるいは溝との直接的関係は見いだせないのかもしれない。

その他の陶磁器について（第23・24図）

青磁蓮弁文直口縁碗、青磁稜花皿、白磁端反皿（上記の印のあるものとは別個体と想定できる）、染付端反碗、染付蓮子碗、染付玉取獅子文端反皿、瀬戸美濃灰釉端反皿、瀬戸美濃灰釉丸碗、てづくね成形の「かわらけ」、越前擂鉢（第31図２・３）

などが出土している。第31図２は14Ｋ15区を中心に、第31図３は14Ｊ16区（鞴羽口出土ピット）を中心に出土している。上記擂鉢は全体の７割～９割程度の状態にまで復元できた。単なる遺物の流れ込みでは無く、この場所で廃棄されたことが想定できよう。しかし、すべての陶磁器片がこのように接合が出来たわけでも無いので、細片の中には流れ込み遺物も当然存在すると思われる。出土陶磁器の推定年代を見ると、15世紀後半から16世紀前半までのものに収まる。

鍛冶関連遺物と金属製品について（第25図）

スラッグと不明溶解物と仮に呼んでいるものが纏まって出土した。両者が混在している部分もあり明瞭な線引きは出来ないが、スラッグは14Ｊ11・16区に、不明溶解物は14Ｋ15区に集中する傾向にある様に思える。14Ｊ16区付近では鞴の羽口が出土している。

鉄製品は釘、鋏、鍋、火箸、小札、刀子、締金具、鉤、ヤス、鑿などの多種多様な製品が見られる。

銅製品は笄（第33図２）、銅銭がある。

製品種別の状況（第26図）

釘・鋏、鍋は全体的に散らばって出土している。刀子、小札は14Ｋ20区にやや多く見られる箇所がある。刀子は溝14に画される地域に分布する。締金具も溝14に画される場に分布するが、大きな特徴とすることは出来ない。

鞴羽口とピット（第28図、PL.16－３～６）

14Ｊ16区で鞴の羽口片（第図32図36）が出土した。周囲は黒色土が堆積しており、四分割して堆積状況を確認しながら掘り下げたところ（PL.16－５・６）、平面形が長軸90㎝、短軸65㎝の楕円形で、底面が窄まる擂鉢状のピットになった。土壙と呼べる程大きくもない。サンプリングした覆土からは、不明溶解物や焼けた粘土塊、魚骨片、炭化種子を検出している。鞴の側からは、前述の越前擂鉢（第31図３）が出土した。口唇部断面形態はやや鋭角を為し、16世紀前半に位置付けられるものである。分布図に石製品としてあるものは全て鞴羽口の破片である。他に刀子、釘、銅銭、などが出土している。

地割と遺物との関係について

この狭い地割の性格を示唆するものとして、鍛冶関連遺物がまず挙げられよう。スラッグや不明溶解物の集中出土は、この場が鍛冶作業場の一部であったこと想起させる。特に両者の集中傾向は若干異なる様相を示し、何らかの要因によるものと考えられる。しかし、炉などの遺構は検出できず、出土した鞴羽口も破損して廃棄されたものと考えられるので、単なる廃棄場所でしかないのかもしれない。そうなると前述の両者の集中箇所の違いも分別した廃棄の結果とも推測できる。

遺物の垂直分布状況を見ると、いずれも床面よりは上の覆土中位辺りに集中して出土する。ただ鉄製品や一部の越前擂鉢、染付皿、瀬戸美濃灰釉皿は幾分床面に近い所で出土しているように思える。このことから陶磁器の多くは地割が埋没する段階の遺物と考えられそうであるが、鉄製品や陶磁器の一部には地割が埋没する以前のものもあると思われる。しかし、垂直分布図を見て分かるように、それが遺構面が２面あるということを強く示す様な分布とはならないようである。この地割の堆積土は黒色・黒褐色土であり、周辺の盛土層のような基盤礫を多量に含む土ではない。人工の盛土では無く、腐植土の自然堆積層かもしれない。以上のことから、分布の傾向の僅かな違いは、埋没の段階での違いから生じた程度なのかもしれない。

他の遺構との関係

一部重複する第４号建物跡との前後関係が、現場段階では判然としなっかったため強い断定は出来ないが、第４号建物跡の柱穴底面レベルよりも低いところに段の底面があるので、この地割造成時に柱穴は削り取られたと考えられる。よって第４号建物跡が先行し、その後この地割が作られたと思われる。

小結

この小地割の性格は現段階では、明らかにし得ないが、建物を区画する地割と全く異質なものであることは、間違いなかろう。建物を建てられない僅かな空間を遮蔽する柱列からは、特別な意味を持っていた空間であったことを想定させる。又、多種多様な遺物の集中は、この場での意図的な廃棄を反映したものと考えられる。特に印の記された白磁皿の一括出土は、この場の性格を示す遺物として再考が必要である。

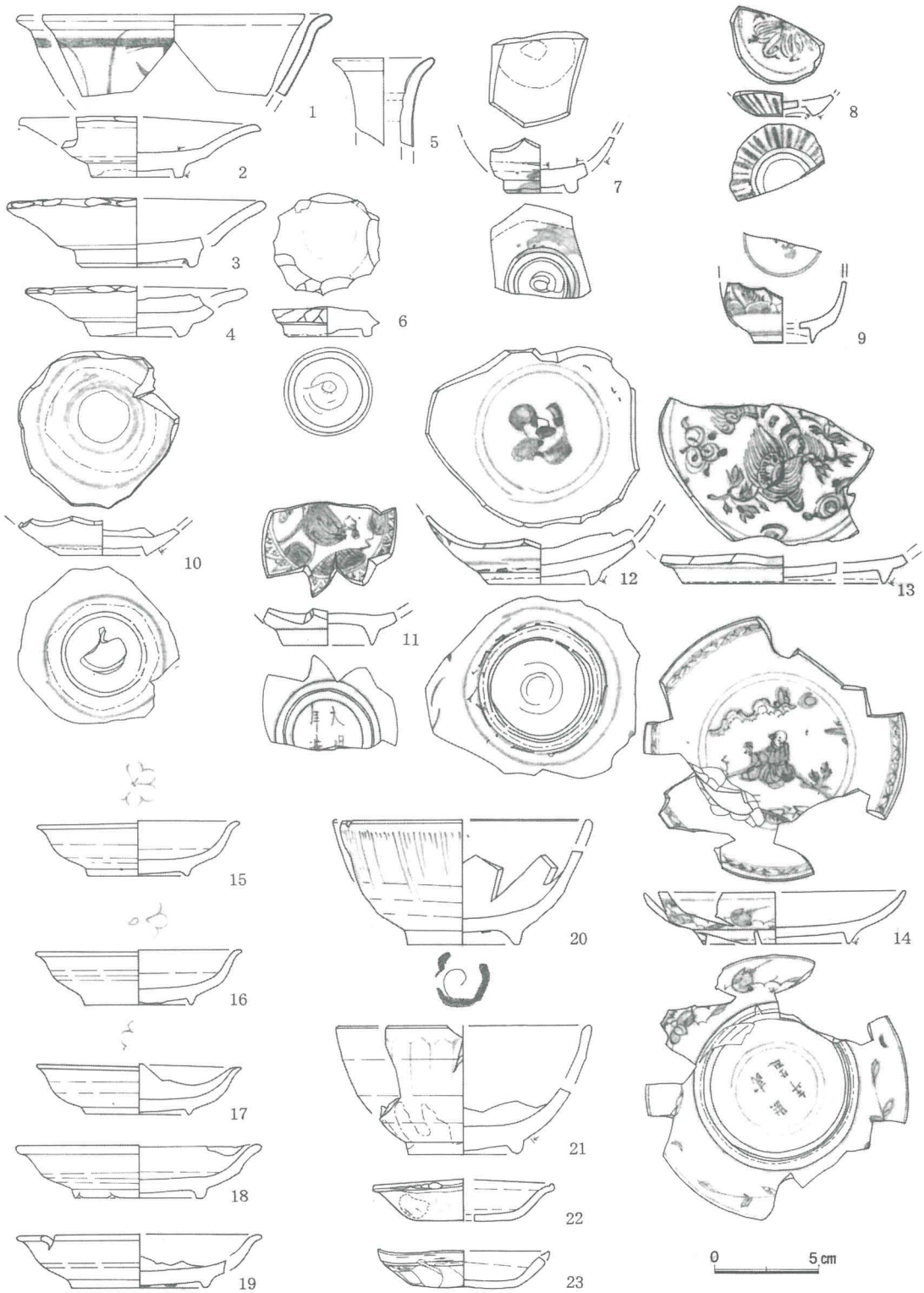
13Ｌ25区周辺地割（PL.８）：調査区北西部13Ｌ24・25・14Ｌ４・５・14Ｋ1区周辺に位置す

る。段と溝４（他に溝８・10によって画される時期を想定できる)によって画される。遺構は第94・95号竪穴建物跡、土壙22・23、溝３・７がある。焼土、炭化物の集中ブロックがある。調査区境界13Ｌ24付近をトレンチ調査した結果、寺ノ沢に面する縁辺部は、最大１ｍ程の盛土による造成がなされていることを確認した。溝に伴うものと想定する炭化材を（PL.８－２～４）検出した。Ｐ539・541・547・551・567・570・575・579、Ｐ553・568・571・576・581・583、Ｐ540・545・550・566・569・573で柱列が想定できる。Ｌ字状にしか並ばず、Ｐ573他やＰ579他の柱列は鈍角に開くので、建物の柱列ではなく塀と考えられる。また、段の壁面に水平方向のピットを検出した。上記の塀の可能性を指摘した柱に伴うものかもしれない。

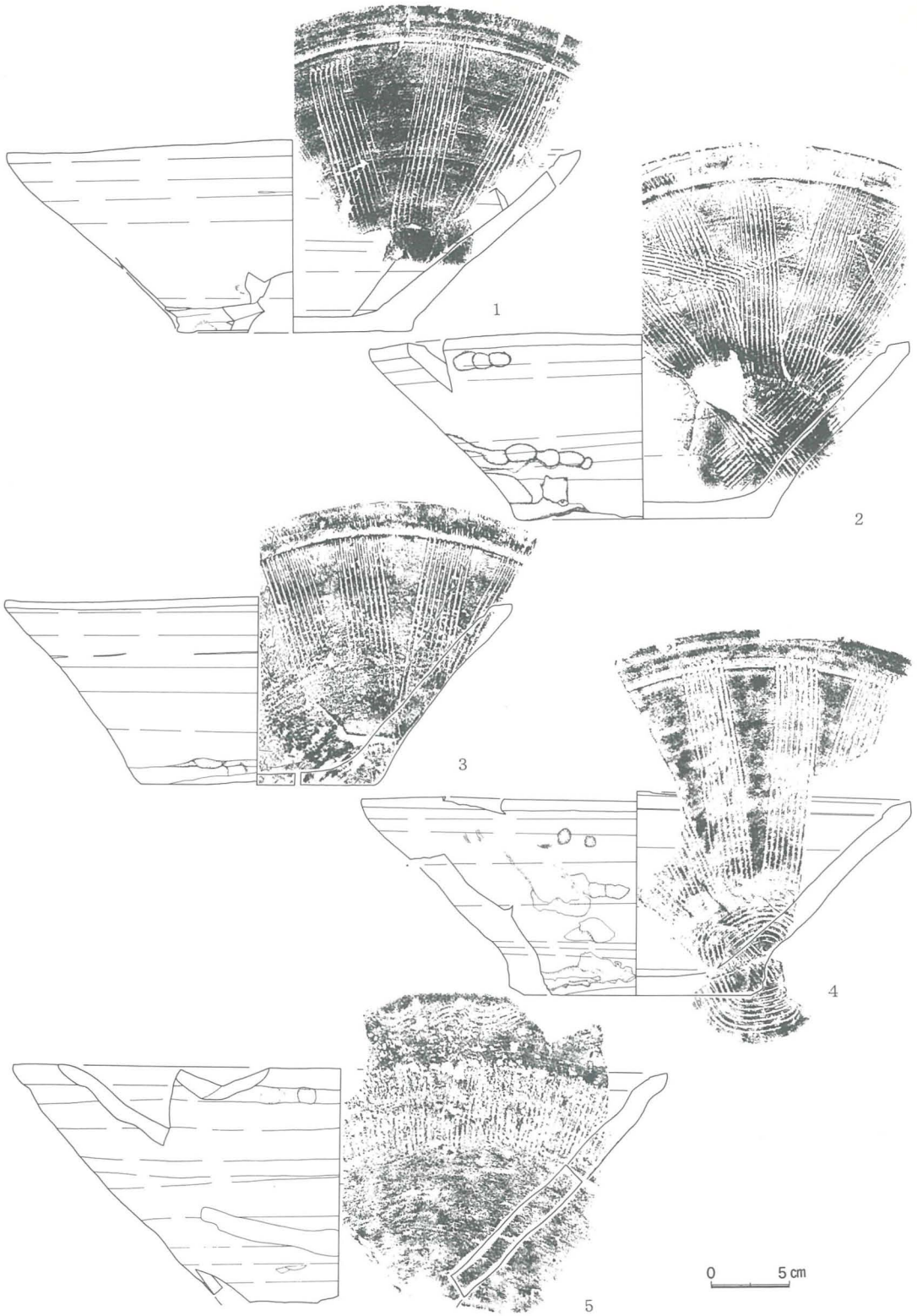
溝と段の斜面から珠洲擂鉢（第31図５）が出土した。他に瀬戸美濃灰釉端反皿なども出土している（PL.８－６)。また骨角器は14Ｋ１区で13点出土している（第33図13～16)。

14Ｋ２区周辺地割（PL.９－１・２）：調査区北部14Ｋ２・７区周辺に位置する。段と溝６によって画される。遺構は土壙34・40がある。北東方向14Ｋ２区周辺は、自然地形では北西方向に下がる緩やかな傾斜となっており、その部分を平らにするためと思われる基盤礫混じりの盛土を確認した。Ｐ494・500・511・516・529、Ｐ493・498・510・515、Ｐ517・519・506・512・526、で柱列が想定される。Ｐ517の柱列は、矩形になりそうなので、建物跡として想定できるのかもしれない。

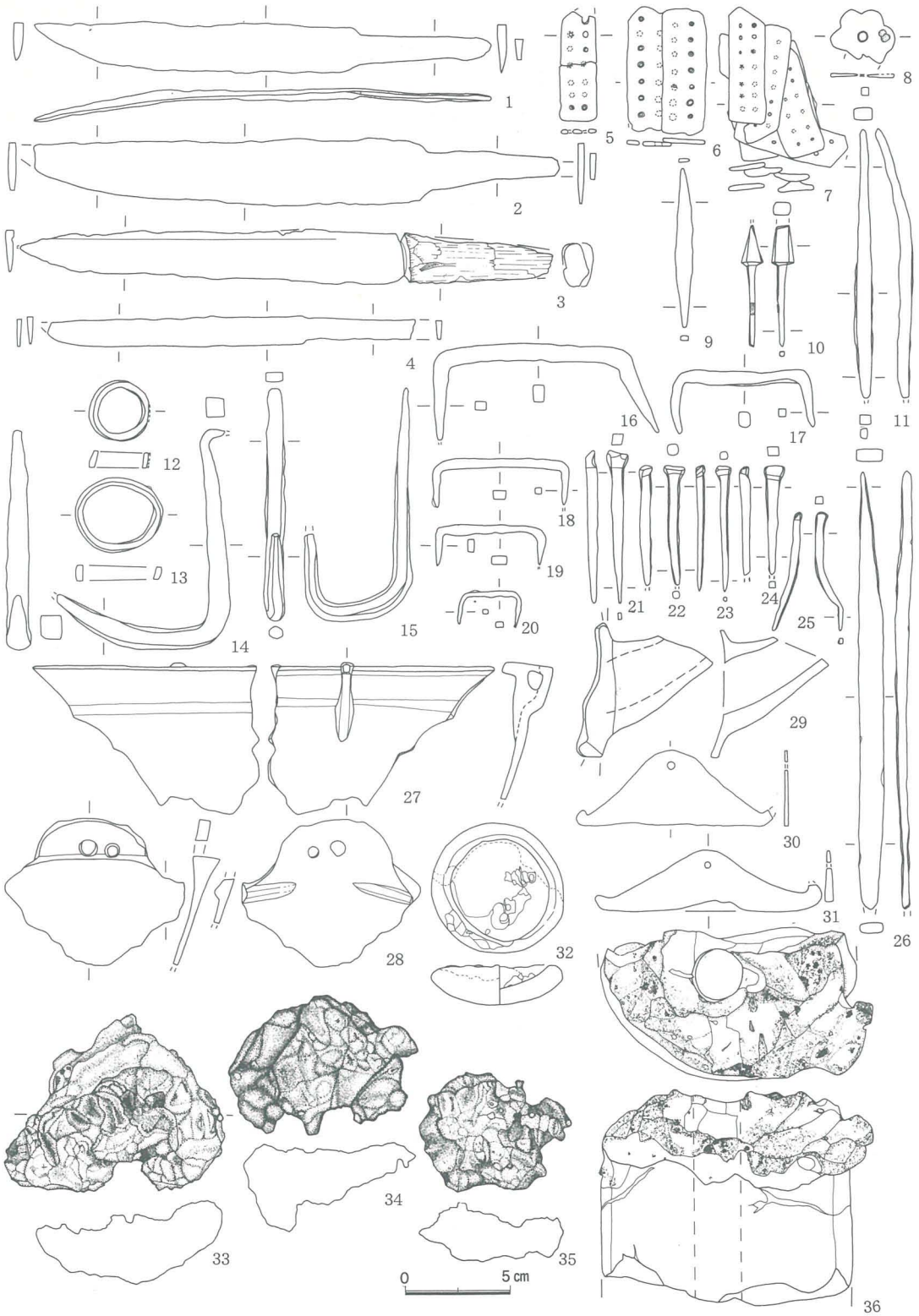
14Ｊ６区周辺地割（PL.９－３）：調査区北東部14Ｋ９・10・14Ｊ６・７区周辺に位置する。中央通路の側溝を兼ねる区画溝16に画される。遺構は、溝19・23、掘立柱建物跡５棟、第98号竪穴建物跡、土壙41・46、焼土16などがある。柱穴は方50㎝前後と大きいものもあり、第二平坦面に見られる間仕切りを持つ中規模クラスの建物跡（例平成９年度調査第９号建物跡)の柱穴に匹敵する。Ｐ467・462・430・440・444・448で三間×二間以上、Ｐ465・461・432・443・447で二間×二間以上、Ｐ399・404・411・421・427・469で桁行四間以上×梁間二間以上、Ｐ398・407・415・425・429・438・456で桁行五間以上、Ｐ402・410・417・423・428・436・457・464で桁行五間以上×梁間二間以上の計５棟の建物跡が想定でき、同時併存の可能性のものを除くと４回の建て替えが想定される。



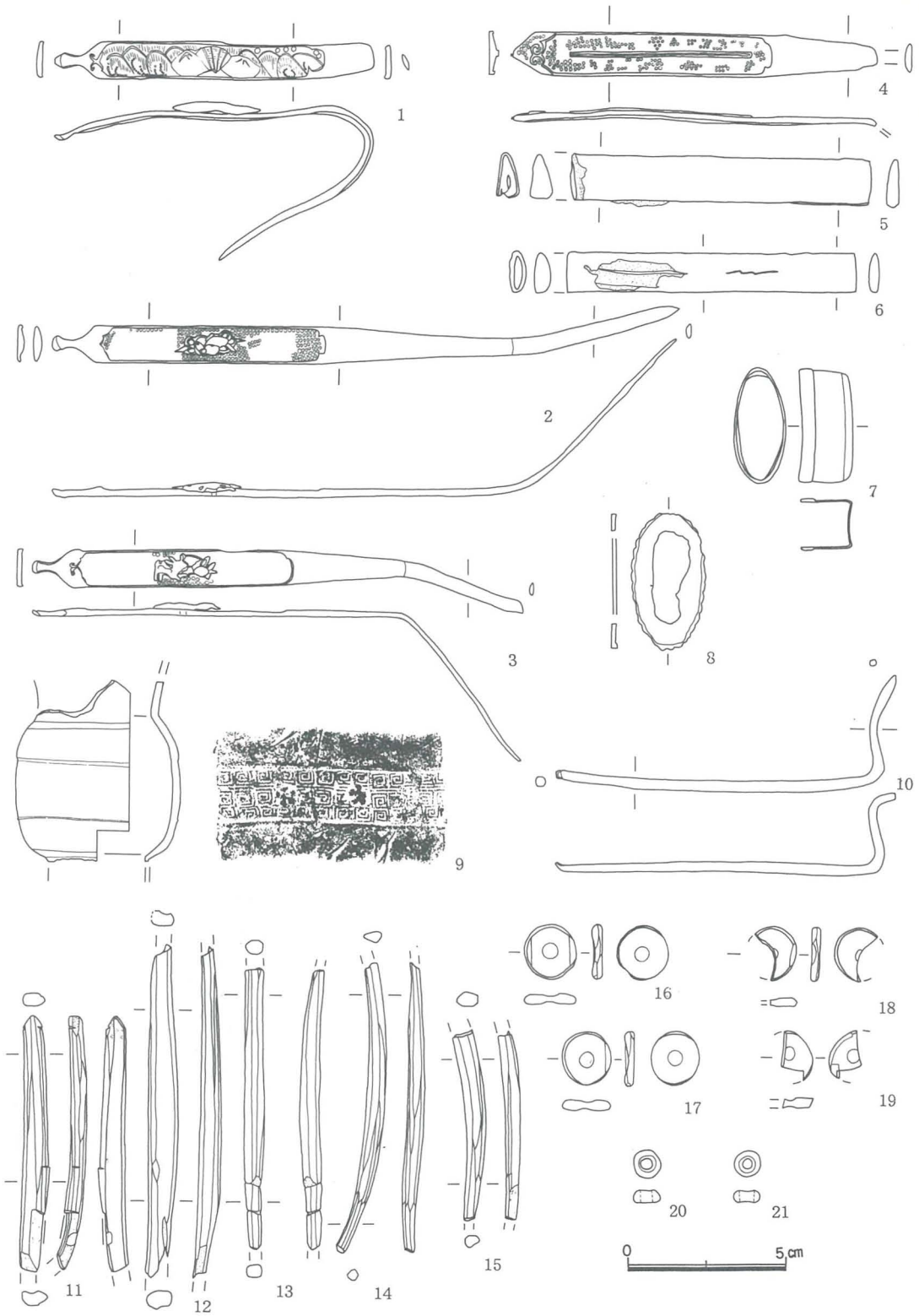
第30図　調査区出土遺物（陶磁器）



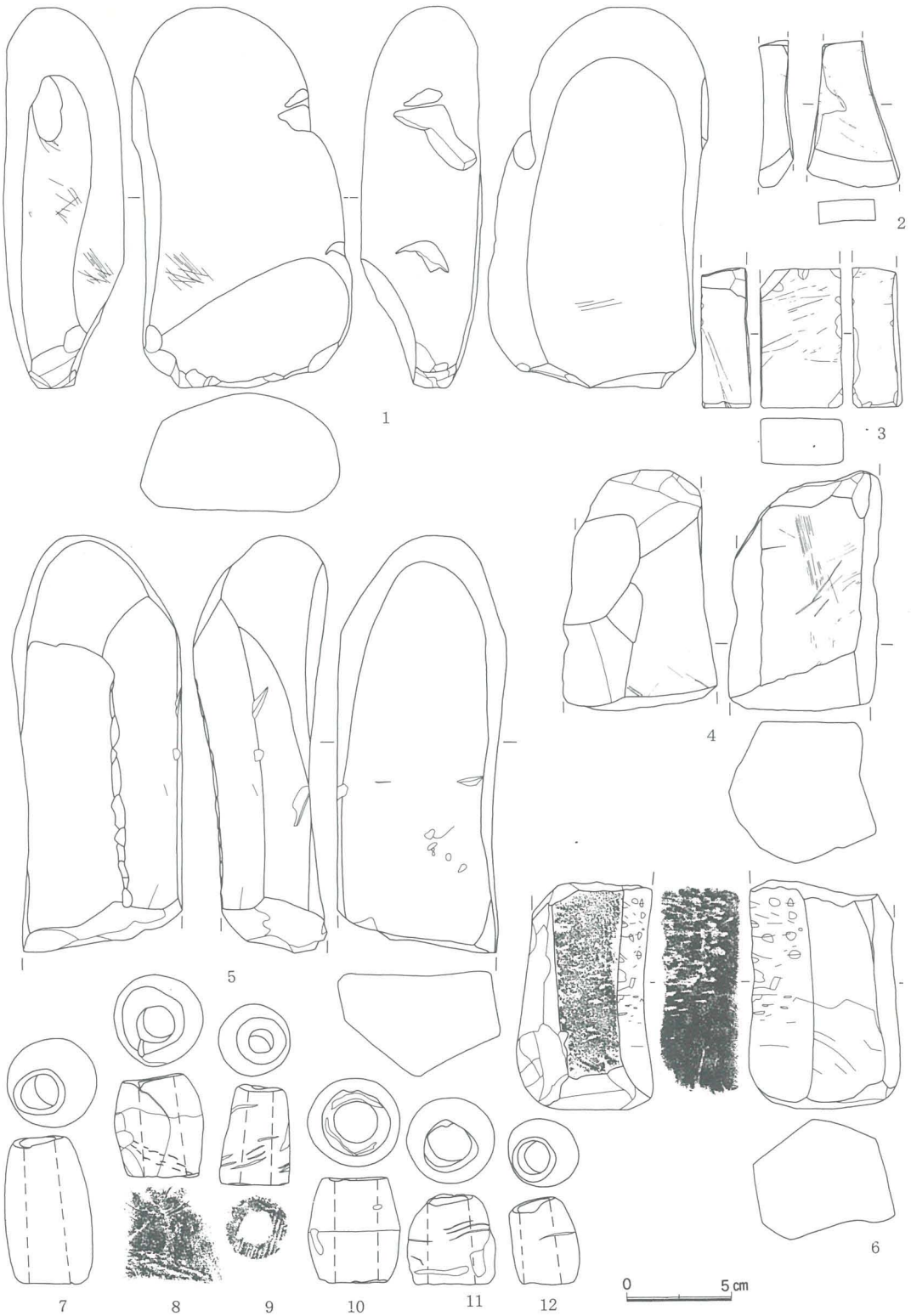
第31図　調査区出土遺物（越前・珠洲擂鉢）



第32図　調査区出土遺物（鉄製品・鍛冶関連遺物）



第33図　調査区出土遺物（銅製品・骨角器）



第34図　調査区出土遺物（石製品・土製品）

(8) 出土遺物の概要

陶磁器・金属製品・土製品・石製品・骨角器他、計4,581点出土した。他に縄文土器・石器、擦文土器、土師器が出土した。以下、第27・30～34図、PL.3・4・17～20で示した遺物を中心に、全体的な様相を記す。尚、実測図掲載遺物の個々の特徴、法量については遺物観察表（表15～17）を参照されたい。

a 陶磁器（第27・30・31図・PL.17～19）

勝山館期のものは、破片数で2,692点出土した。破片点数で見ると、国産陶器が1,423点、52.9％、舶載品1,269点、47.1％で国産品が上回っているが、供膳具のみで見ると舶載品が6割以上を占める。また、碗の比率が高いように思われる。ここ数年の第二平坦面の調査では、碗は皿との合計数の25％前後であることが多かったが、今回の調査では、32％でやや多い傾向にある。この中では特に灰釉碗の点数が多い。ここ数年の第二平坦面の調査では、平成六年度の（152点）を除き、70点前後の出土であったが、2倍余りの146点の破片が出土している。調理具、貯蔵具は殆どが越前である。

青磁（第30図1～6）225点出土した。端反碗、無文直口縁碗、剣先蓮弁文・蓮弁文直口縁碗、稜花皿、瓶の頚部などがある。

1は器表面に幅の広い蓮弁がある端反碗である。上田編年では15世紀段階に位置付けられ勝山館跡出土青磁の中では、年代的に古いグループに属する。稜花皿は内禿と施釉してあるものの二種がある。底径（高台径）4㎝のものが多いが、5㎝のものもある。6は内禿の皿を打ち欠いて、高台部を円盤状に加工したものである。過年度の調査でも同様のものが出土している。

白磁(第27図1～7・第30図7)473点出土した。切高台皿、底部から大きく外反する皿、小杯などがあるが、端反皿が大部分を占める。

前述の通り端反白磁皿には印が記されたものがある。

染付（第30図8～14・PL.15）552点出土した。端反碗、直口縁碗、蓮子碗、糸底端反皿、糸底丸皿、碁筒底皿、碁筒底小皿、小杯がある。

10は内禿の碁筒底皿。漳州窯系のものと考えられる。13の獅子皿は底径9.7㎝で勝山館跡で比較的多く出土する口径12.0㎝、底径6.2㎝の獅子皿よりもはるかに大きい。過年度調査で、これとほぼ同じ大きさと思われる獅子皿が、もう一個体出土している。

赤絵　碗・小杯13点出土した。いずれも小片であり、大きさは不明である。

朝鮮　白磁碗、小碗片など6点出土した。

瀬戸・美濃（第30図15～21・PL.18－2・19－1）灰釉664点、鉄釉87点の計751点出土した。灰釉は連弁印花文丸碗、櫛目状印花文丸碗、端反皿、稜花皿、丸皿、菊削皿がある。鉄釉は輪高台・内反高台の碗、稜皿、茶入がある。いずれも大窯期のものである。他に窖窯期の鉢、腰折皿がある。また位置付けがはっきりしないが、大窯Ⅰ期相当と推定される内禿（あるいは縁釉とすべきか）の大皿などがある。

灰釉皿の口縁部残存破片で見ると端反皿が殆どであり、大部分が大窯Ⅰ期（五期区分）に位置付けられるものと考えられる。

端反皿は口径8.4㎝、9.4㎝、11.4㎝などのバリエーションがあり、細分化が出来るので、今後検討が必要である。また端反皿の中には、漆継ぎの痕跡が認められるものもあった。

稜花皿は少なくても三個体ある。器形としては、端反皿の一類であるが、端部をつまんで波打つ形状を作り出している。

大皿（PL.4－1・19－1－6～9）としたものは、口径19㎝、底径9㎝前後と推定する。口縁部は反る。平成9年度の調査でもほぼ同じ大きさの1個体が出土し（概報XIX P73、第53図7）、他にも同じ大きさと思われるものの破片が数点出土している（参考としてPL.4－1に一部を載せた）。勝山館出土品の灰釉皿では非常に少ないものである。

15・16は端反皿で、焼土17（PL.2－4）からの出土品であり、いずれも被熱している。18は端反皿で高台に焼成後付けられた溝が3カ所ある。各々の溝に対となる溝や、擦り傷は認められないので、複数個を括るためにつけられたものでは無いようであり、目的は不明である。21の剣先蓮弁文丸碗は釉が垂れた様なかかりかたをしている。内側底には細かな擦り傷があり、茶筅ずれと考えられる。

志野　出土数は9点と非常に少ない。

唐津　出土数は2点と非常に少ない。いずれも

皿片である。

越中瀬戸　鉄釉碗片が１点出土している。

珠洲（第31図５、PL. ８－６）擂鉢片が４点出土した。底部は欠失しているが、全体のほぼ半分を残存する擂鉢１個体が出土している。口唇部の波紋・卸目は、かなり摩耗して薄くなっている。口唇部が緩やかに立ち上がる特徴から、吉岡編年のⅥ期（1570年代）に相当すると思われる。

越前（第31図１～４）擂鉢、甕片628点が出土。擂鉢は、口唇部丸味を帯びるものと断面形が鋭角をなすものがあるが、後者が多い。鋭角をなすものには、口端部が水平になり、内傾して三角内面口唇部に段を明瞭に作るもの、浅い溝状になるもの、削ぎが弱いものなどがある。他に卸目を密に施す16世紀後半に位置付けられるものもある。

甕・壺類は接合があまり出来ず、全体の形状を窺える資料は少ないが、口径７㎝を計る壺、口縁部の肥厚から16世紀前半に位置付けられそうな甕などがある。甕の表面は施釉、無釉両者ある。

かわらけ（第30図22・23・PL．18－３・４）22点出土した。特徴から少なくても６個体あると想定できた。いずれも口径8.5㎝前後のものでほぼ同じ大きさと考えられる。てづくね成形によるもので、内面は横方向のナデ整形が認められる。製作技法から京都系土師器皿と考えられる。

信楽　壺ないしは甕と思われる破片が５点出土した。大きな破片ではないため法量は不明である。

土製品（第34図７～12）陶錘、瓦片、計20点出土した。

土錘（７～12）15点出土し、少なくても13個体を想定できる。いずれも中心部に孔がある管状のものである。算盤玉状あるいは長楕円形に成形している。８点は破片であるが６点は長軸が計測可能であり、大きく２グループに分かれる。４㎝前後の小型、７㎝前後の大型となる。胎土は礫粒を多量に含むものと、礫粒はあまり無く、赤い鉱物が斑点状に見えるものの二種がある。

b　金属製品（第32・33図、PL.２～４）

鉄製品（第32図１～31、PL.19－３・４．20－１）394点出土した。鏃、小札などの武具、刀子などの利器、各種大きさのある釘・鎹、内耳・吊耳鉄鍋などの煮炊具、その他苧引金、火箸、火打金などがある。

８は花弁の様な形をした板状の製品である。中央に径５㎜ほどの穴がある。製品の名称・部位は不明である。27は内耳鍋で、口縁部２センチの所に段を有する。29は瓶などの注口と考えられる。26の刺突具としたものは、尖った方を基部とすべきかもしれない。

銅製品（第33図１～10・PL.19－２）62点出土した。

武具（１～８）小柄、笄、鍔、鉏、柄頭、茱萸など23点出土した。

３は２羽の兎をモチーフにした飾りを装着している。飾りが付く部分は魚々子地になっている。１～３はいずれも大きく折れ曲がっている。４は蕨手文を陽刻で表現していてる。飾りが付く部分は魚々子地に一文字状の陽刻のみで、別作りの飾りが付かない。前三者は蕨手文は印刻で（２は蕨手文が確認できなかった）、別作りの飾り鋲を装着するなどの類似点があるが、４は技巧的に異質な印象を受ける。また幅も若干広い。５・６の小柄は素文である。

吊手金具（PL.19－２－10）は甲冑の部品の可能性もある。

仏具（９）９は花瓶の胴部と考えられる。中央に上下３列の雷文を施した文様帯があり、その上には５つの花弁がある花が浮き彫りになっている。石川県穴水町白山橋遺跡34号配石で出土した花瓶と意匠、胴部径ともほぼ一致し、同型のものと推測する。平成６年度の調査では、飲食器の高台（概報ⅩⅥP56．35－４）としたものがあるが、これも同型の花瓶の高台と考えられる。

他に亜字形花瓶の台部分と思われる破片（PL.２－12）、鉦、金剛盤か香炉（同13）の脚がある。

その他（10）10は簪と考えられる棒状の製品である。一端は錐状に作られ、もう一方は折り曲げた箆状に作られている。和鏡破片が３点出土した（PL.19－２－14～16）。14・15は同一個体と見られるものである。推定径7.6㎝、厚さ1.8㎜。鏡背面に藁の様なものが厚い錆と絡みついてしまって意匠の詳細はわからないが、二重の圏線を確認できる。16は二重の圏線と松の文様を確認した。あるいは上記２点と同一個体なのかもしれない。

銅銭（表19）無文銭を含む20種243枚出土した。内74枚は前述の土壙48から出土したものである。他に寛永通宝が４枚出土している。

判読可能なものの内、最古銭は開元通寶（初鋳年、621年）で17枚、最新銭は洪武通寶（初鋳年、1368年）で16枚出土した。北宋銭が15種45枚あり判読可能なものの38.8％を占め、明銭は２種23枚で19.8％を占める。背面に「一銭」と記された洪武通寶が３枚出土している。14Ｋ７区で「無文銭」が27枚重なって出土している。径が19㎜前後と小さい上に非常に薄い。14Ｋ８区では、六枚の銭に、藁のようなものが通された状態で出土している。

錆や擦れにより判読不能としたものの中には無文銭と分類してもよいのかもしれないものなどが含まれていると思われる。また、判読可能の中には、模鋳銭が含まれている可能性も捨てきれず、問題点や課題が残る。

ｃ　鍛冶関連遺物（第32図32～36・ PL. 20－２～４）368点出土した。石製・土製鞴の羽口。坩堝片（ PL. 20－３・４）、鉄滓、不明溶解物がある。32は溝18からが出土した坩堝（とりべ？）である（ PL. 14－９）。鉄滓（33～35）は14Ｋ15・20・14Ｊ11・16地区を中心に157点出土している。大小種類があるが、513ｇもある大きめの椀形滓もある。また、金属加工の際に生成されたと思われる不明溶解物は、現場で点取り上げ可能な大きさのものだけでも115点出土している。他に土壙の覆土などから鍛造剝片を検出している。

ｄ　石製品（第34図１～６）33点出土した。砥石は浄清寺砥石と考えられるもの等31点出土している。１・２・５は 肌理の細かい白色を呈するもので、軟らかめの石である。４・６は肌理が粗く硬めの石である。

他に茶臼片が２点出土している。

ｅ　骨角器（第33図11～19）45点出土した。中柄・刺突具（11～15）は39点出土した。細片が多く個体識別は難しいが、20個体以上あると考えられる。11は断面の形状から鹿の中足骨から作り出したものと考えられる。いずれも被熱している。双六駒（16～19）４個の内２個は破損しているが、径16㎜のほぼ円形を呈するものと思われる。いずれも両面の中央部に径4㎜程の僅かな凹みがある。いずれも被熱している。

骨角器ではないが、馬の歯、陸獣・海獣と考えられる骨、貝なども出土している。

ｆ　ガラス玉。（第33図20・21）。図示したものの他にサンプリング土中から、外径3.8㎜、穴径1.5㎜、紫色の非常に小さな玉を検出している。

表15　出土遺物観察表（陶磁器）

	法量			釉調	胎土	特徴	出土地点	図版番号
	口径	底径	器高					
青磁碗	(150)		(39)	グレイみの黄緑	グレイみの黄	連弁文、端反碗。篦描による幅のある連弁。	14K19Ⅲ	第30図1
青磁皿	(115)	44	29	グレイみのオリーブグリーン	黄みのグレイ	弁先に合わせた3本の櫛目文。内底、畳付以下露胎。	14K'6Ⅲ	第30図2
青磁皿	124	52	33	明るいグレイみの緑	黄みのグレイ	弁先に合わせた3本の櫛目文。内底の釉を掻き取る。重ね焼跡有り、外底蛇の目状に釉を掻き取っている。	18M11.4Ⅰ	第30図3
青磁皿	106	40	34	グレイみのオリーブグリーン	ブラウンみのグレイ	弁先に合わせた3本の櫛目文。内底には2本の圏線。	14J18近世溝 14K15Ⅲ	第30図4
青磁瓶	(46)			浅い黄緑	黄みの白	頸部内面口唇より1cm部分で釉が厚い。	14J7Ⅲ	第30図5
円盤状製品		42	14	明るいグレイみの緑	明るいオリーブみのグレイ	青磁皿の高台脇を打ち欠き仕上げられる。	Ⅰ	第30図6
白磁碗		32		薄い黄	薄い黄	外面腰以下露胎。内底蛇の目状に釉を掻き取る。胎土陶質。	14J12Ⅲ	第30図7
染付皿		26		黄みの白	ブラウンみの白	碁筒底。外面菊花弁文、内面十字花文、畳付から外底部にかけて露胎。	14J9.4Ⅱ	第30図8
染付杯		28		黄みの白	白	外面高台際に、界線3本胴部文様不明。内面梵字文、畳付とその周囲を露胎。腰部連弁文。	14K14Ⅲ	第30図9
染付皿		40		グレイみの黄	薄い黄	碁筒底。外面高台際に界線、内面界線、外底、内底とも無釉。陶質。	14J9Ⅰ	第30図10
染付碗		43		青みの白	黄みの白	外面高台際に界線、高台内「大明年造」。内面、三角帯文内に人物。	14J23 近世溝	第30図11
染付碗		50		黄みの白	白	外底部に2本の界線。内底部2本の界線内にダミ技法による花弁。高台脇まで施釉、釉垂れ著しい。	14J1土壙41 18K15ⅠⅡ	第30図12
染付皿		97		黄みの白	白	外面畳付を除く総釉。高台際3本の界線。内面二重界線の中に玉取獅子。	14J24Ⅰ	第30図13
染付皿	126	70	25	黄みの白	白	外面口縁直下及び高台際に界線。胴部花鳥文。底部、洪武年造、内面直下半円帯文底面二重界線内に人物文。	17M1Ⅰ	第30図14
灰釉皿	96	48	26	グレイみの黄	薄い黄	端反口縁。付高台全面施釉。見込印花文。被熱。内面赤色。	14J15 焼土17	第30図15
灰釉皿	97	51	26	グレイみの黄	薄い黄	端反口縁。付高台全面施釉。見込印花文。被熱。胴部以下一部に煤。	14J15 焼土17	第30図16
灰釉皿	97	50	24	グレイみの黄	薄い黄	端反口縁。付高台全面施釉。見込印花文。被熱。	14J15Ⅲ	第30図17
灰釉皿	117	62	26	グレイみの黄	薄い黄	端反口縁。付高台全面施釉。	14K1 P550掘方	第30図18
灰釉皿	116	65	27	グレイみの黄	黄みのグレイ	端反口縁。付高台全面施釉。	14K11・12 竪穴96	第30図19
灰釉碗	123	53	60	グレイみの黄	薄い黄	直口縁。細連弁。全面施釉。内底に釉だまり。	14K12 P116掘方	第30図20
灰釉碗	122	54	61	グレイみの黄	鈍い黄みのオレンジ	直口縁。剣先連弁。施釉が雑で外面は釉垂れが著しい。内面に茶筅ずれ様の傷有り。	14K11・12 竪穴96	第30図21
かわらけ	86	45	20		鈍い黄みのオレンジ	てづくね成形。ナデ整形。	14K11・12 竪穴96	第30図22
かわらけ	82	52	19		薄いオレンジ	でづくね成形。ナデ整形。器内外面とも煤が付着する。	14K15Ⅲ	第30図23
白磁皿	120	(64)	31	黄みの白	白	端反口縁。畳付とその周辺を除き全面に施釉。畳付高台際に砂粒が付着。高台内に印有り。	14K15Ⅲ 14K20Ⅲ	第27図1
白磁皿	121	64	30	黄みの白	黄みの白	端反口縁。畳付とその周辺を除き全面に施釉。畳付高台際に砂粒が僅かに付着。高台内に印有り。	14K15Ⅲ	第27図2
白磁皿	120	64	30	黄みの白	白	端反口縁。畳付とその周辺を除き全面に施釉。畳付高台際に砂粒が僅かに付着。高台内に印有り。	14K15Ⅲ 14K20Ⅰ	第27図3
白磁皿	117	63	32	明るいオリーブみのグレイ	黄みのグレイ	端反口縁。畳付とその周辺を除き全面に施釉。高台内に印有り。	14K15Ⅲ	第27図4
白磁皿	114	60	32	黄みのグレイ	黄みのグレイ	端反口縁。畳付とその周辺を除き全面に施釉。畳付高台際に砂粒が付着。高台内に印有り。	14K15Ⅲ	第27図5
白磁皿	108	54	29	黄みの白	黄みの白	端反口縁。畳付高台脇及び口縁下に砂粒が付着。高台内に印有り。	14K15Ⅲ	第27図6
白磁皿	25	20	3	黄みの白	黄みの白	底部小片。長さ25mm 幅20mm 厚さ3mm。	14L15Ⅲ	第27図7
越前擂鉢	362	148	114～117	浅い赤みのブラウン	濃い赤みのブラウン	口唇断面形鋭角で内削り気味9条1単位右廻り、内面に3つの段がつく。	14J15Ⅲ	第31図1
越前擂鉢	340	158	108～115	グレイみのブラウン	ブラウンみのグレイ	口唇断面形やや鋭角1単位のみ擂し目が斜上に横走する。10条1単位左廻り。	14J11Ⅲ 14K15Ⅲ	第31図2
越前擂鉢	318	146	115～119	黄みのブラウン	浅い黄みのブラウン	口唇断面形、鈍角9条1単位擂目左廻り。	14J16 羽口周辺	第31図3
越前擂鉢	346	152	123	黄みのブラウン	浅い黄みのブラウン	口唇断面形、やや鋭角、8条1単位擂目右廻り、見込みも右廻りの円状の擂目。	14J15Ⅲ	第31図4
珠洲擂鉢	(410)		(198)	暗い青みのグレイ	グレイみの黄	素地は粗悪、指押さえ痕あり、器面が段状。擂目は一部分抜けるものの密、使用のため著しく摩耗。	14K1溝10・ 14K1Ⅲ	第31図5

表16　出土遺物観察表（鉄製品・鍛冶関連遺物）

種別器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特　　徴	出土地点	図版番号
刀　　子	24	5	212	54.3	茎長62㎜。	14Ｊ15焼土17	第32図１
刀　　子	29	4	(250)	61.4	茎長63㎜。	14Ｊ7Ⅲ	第32図２
刀　　子	26	4	(203)	43.6	木質の柄が残る。	14Ｋ14Ⅲ	第32図３
刀　　子	13	2	(174)	19.3	刃先・茎尻欠損。	14Ｊ15Ⅲ	第32図４
小　　札	18	2	(52)	5.3	本小札。穴が二列。	14Ｊ1Ⅲ	第32図５
小　　札	37	2	59	17.5	本小札。穴が二列。２枚重。	14Ｊ15Ⅲ	第32図６
小　　札	62		76	44.6	本小札。穴が二列。６枚重。	14Ｊ1Ⅲ	第32図７
不　　明	(31)	2		2.7	六弁の花状。	14Ｊ16Ⅲ黒色土	第32図８
鏃	9	2	76	4.7	断面扁平。	14Ｋ20Ⅲ	第32図９
鏃	11	6	(57)	6.7	鏃身先端部欠損。	14Ｋ15Ⅲ	第32図10
不　　明	9	7	(128)	20.2	ヤス状鉄製品、断面角。	14Ｊ16Ⅲ	第32図11
締　金　具		3		6.2	外径28㎜、内径22㎜。	14Ｊ24竪穴97	第32図12
締　金　具		4		13.4	外径40㎜、内径35㎜。	14Ｊ17Ⅲ	第32図13
鉤	10	11	(104)	59.2	断面四角形。かえしが付く。Ｌ字型。	14Ｋ14Ⅲ	第32図14
鉤	10	10	(111)	41.7	Ｕ字型に近い。こしまげから先の断面丸。	14Ｋ14Ⅲ	第32図15
鎹	8	5	107	37.3	断面角。	14Ｋ15Ⅲ	第32図16
鎹	7	7	69	15.2	断面角。	14Ｊ17Ⅲ	第32図17
鎹	6	5	64	10.3	断面角。	14Ｊ16Ⅰ	第32図18
鎹	8	4	52	9.3	断面角。	14Ｊ16Ⅲ	第32図19
鎹	4	3	30	1.7	断面角。	14Ｋ20Ⅲ	第32図20
釘	6	5	72	7.2	折釘。	14Ｊ24竪穴97	第32図21
釘	5	5	(57)	5.2	折釘。	14Ｊ1竪穴98	第32図22
釘	4	4	60	2.1	折釘。	14Ｊ13Ⅲ	第32図23
釘	6	5	(52)	5.7	折釘。	14Ｊ7Ⅲ	第32図24
釘	4	4	56	3.0	折釘。	14Ｊ8Ⅲ	第32図25
不　　明	13	9	(208)	63.9	ヤス状鉄製品。	14Ｋ14Ⅲ	第32図26
鉄　　鍋	(72)	5	(106)	64.8	内耳。	14Ｌ15トレンチ	第32図27
鉄　　鍋	(70)	4	(85)	99.0	吊耳二孔。	14Ｋ20Ⅲ	第32図28
鉄　　瓶	(63)		(64)	144.2	注口部分。	14Ｊ22.3ⅠⅡ	第32図29
火　打　金	36	3	(94)	26.7	三角形状の頂部に４㎜弱の紐掛穴が有る。	14Ｋ15焼土11	第32図30
火　打　金	29	3	(107)	31.2	三角形状の頂部に2㎜の紐掛穴が有る。	14Ｋ7.3Ⅰ	第32図31
る　つ　ぼ				46.9	口径62㎜、器高19㎜。緑青のある銅滓が付着。	14Ｋ13溝18	第32図32
鉄　　滓	70	33	89	320.3	椀形滓。	14Ｊ16Ⅲ　羽口周辺部	第32図33
鉄　　滓	66	43	90	212.8	椀形滓。	14Ｊ16Ⅲ	第32図34
鉄　　滓	68	27	53	110.1	椀形滓。	14Ｊ15Ⅲ	第32図35
羽　　口			(103)	573.7	石製。空気孔23㎜。先端部は多孔性のガラス質溶解物付着。	14Ｊ16Ⅲ　羽口周辺部	第32図36

表17　出土遺物観察表（銅製品他）

種別器種	幅	厚さ	長さ	重量g	特　　徴	出土地点	図版番号
斧	12	3	166	21.2	木瓜形の枠内全体に松を刻む。中央の紋は松と竹。	14K20Ⅰ	第33図1
斧	12	4	197	23.8	魚々子地、中央に草花の透かし文様。	14J16Ⅲ	第33図2
斧	12	4	178	19.3	魚々子地、中央に二羽の兎。鋲止め。	Ⅰ	第33図3
斧	14	3	(115)	20.2	魚々子地、中央に凹を有す一本の隆帯。	14K14Ⅲ	第33図4
小　柄	15	7	(94)	21.1	銅板を刀子の柄に密着して巻いた物。	14L4竪穴94	第33図5
小　柄	13	5	(91)	17.1	銅板を刀子の柄に密着して巻いた物。	14J15Ⅲ	第33図6
鐺	15	1	36	9.8	釘穴が無し。	14L4Ⅰ	第33図7
切　羽	23	2	43	5.0	周囲に細かい連弧文。端部がやや厚い。	14J15.1Ⅰ	第33図8
花　瓶		2	(57)	50.3	胴部に三列の雷文帯。雷文帯上に二個の五弁花。	14J15Ⅲ	第33図9
不　明			145	8.5	断面丸、太さ3㎜、一片がL字状に折れる。	Ⅰ	第33図10
鏃	15	9	80	3.3	陸獣骨。下からの削り込みにより、小さな逆刺を作出。被熱。	14K15Ⅲ黒色土	第33図11
中柄又は刺突具	10	7	103	5.2	陸獣骨。両先端が欠損。	14J24竪穴97	第33図12
中柄又は刺突具	7	6	88	3.8	海獣骨。両先端が欠損。被熱。	14K1Ⅲ	第33図13
中柄又は刺突具	6	6	92	3.3	海獣骨。両先端が欠損。被熱。	14K1Ⅲ	第33図14
中柄又は刺突具	5	6	60	2.4	海獣骨。先端部が欠損。被熱。	14K1Ⅲ	第33図15
駒		3		1.4	径17㎜。	14J24竪穴97	第33図16
駒		3		1.4	径17㎜。	14J24竪穴97	第33図17
駒		3		0.8	径（17）㎜。欠損品。	14J14.1Ⅰ	第33図18
駒		3		0.6	径（16）㎜。欠損品。	14J14.1Ⅰ	第33図19
玉		4		0.5	ガラス玉。鈍い青緑。外径9㎜、内径4㎜。	14J7Ⅲ	第33図20
玉		4		0.4	ガラス玉。薄い青緑。外径9㎜、内径3㎜。	14J14	第33図21
砥　石	99	57	180		砥面三面、自然石の側面に深い抉り有り。	14J1土壙41	第34図1
砥　石	42	10	(69)		砥面四面、側面に鋸目が残る。	14L3Ⅰ	第34図2
砥　石	39	23	(66)		砥面三面、短冊形。	Ⅰ	第34図3
砥　石	73	66	(113)		砥面二面、整形が雑。	14J1竪穴98	第35図4
砥　石	76	49	(193)		砥面五面、使用頻度が高いためか各面とも鞍状。	13L24ⅠⅡ	第34図5
砥　石	72	50	(108)		砥面六面、二面に長さ約5㎜の刀痕（？）が多数有り。	14J19P56柱痕	第34図6
陶　錘			70	105.7	最大径42㎜、孔内径19㎜。	14J9Ⅲ	第34図7
陶　錘			49	81.8	最大径42㎜、内径18㎜。粘土の接合痕が顕著。胴部下半に二本の縄目痕有り。	14L5Ⅲ	第34図8
陶　錘			48	56.4	最大径44㎜、孔内径13㎜。底部とした部分に成形時のものと思える簾の痕有り。	14J16Ⅲ	第34図9
陶　錘			50	81.7	最大径44㎜、孔内径21㎜。	14K3.8ⅠⅡ	第34図10
陶　錘			43	58.8	最大径42㎜、孔内径23㎜。	Ⅰ	第34図11
陶　錘			41	35.9	最大径33㎜、孔内径21㎜。	14J6P23掘方	第34図12

表18　出土遺物集計表（陶磁器）

（総破片点数）

産地	舶載							国産														
種別	中国					朝鮮	小計	瀬戸美濃		志野	唐津	カワラケ	土器	越前	珠洲	信楽	越中瀬戸	小計	碗皿計	合計	近世	総計
器種	青磁	白磁	染付	赤絵	褐釉			灰釉	鉄釉													
碗	123	20	258	11		3	415	146	76								1	223	638	638	84	722
皿	99	439	289			1	828	508	8	8	2	22						548	1,376	1,376	38	1,414
杯		7	5	2			14						1					1		15	3	18
盤	2						2	2										2		4		4
香炉		2					2	1										1		3		3
擂鉢							0							468	4			472		472	2	474
瓶・壺・鉢	1						1	7						160		5		172		173	19	192
袋物		5					5		1									1		6	20	26
その他						2	2		2	1								3		5	6	11
計	225	473	552	13	0	6	1,269	664	87	9	2	22	1	628	4	5	1	1,423	2,014	2,692	172	2,864

表19　出土遺物集計表（金属製品他）

種別			点数	重量(g)
鉄製品	武器・武具	鏃	4	24.5
		刀子	91	654.1
		刺突具	1	20.3
		小札	124	337.2
		喰	4	19
	計		224	1055.1
	狩猟・漁撈	ヤス	1	63.9
		鉤	4	131.2
		締金具	21	156.1
		苧引金	3	37.7
	計		29	388.9
	建築	釘	256	757.7
		鋏	9	124.3
		鋸	1	5.2
		鑿	6	147.9
	計		272	1035.1
	生活具	鍋	385	7562.3
		鉄瓶	1	144.2
		容器	1	2.5
		火打金	1	31.2
		火箸	6	36
	計		394	7776.2
	不明		22	195.2
合計			941	10450.5
鍛冶関連	羽口		21	319.4
	スラッグ		157	8957.5
	不明溶解物		115	355.9
	銅滴		1	3.3
	るつぼ		74	
合計			368	9636.1

種別			点数	重量(g)
銅製品	武器・武具	小柄	2	38.2
		笄	5	89.9
		鍔	1	5
		鉏	5	42.3
		柄頭	1	9.8
		縁金具	4	4.4
		管	1	3.8
		茱萸	1	0.5
		鋲	1	0.4
		吊手金具	2	49.9
	計		23	244.2
	宗教具	鉦	2	201.7
		脚	1	11
		花瓶	2	57.4
	計		5	270.1
	生活	鏡	3	17.5
	計		3	17.5
	不明		31	61.3
合計			62	593.1
石製品	茶白		2	
	砥石		31	
合計			33	
骨角器	中柄又は刺突具		39	
	駒		5	
	不明		1	
合計			45	
土製品	陶錘		15	
	瓦		5	
合計			20	
玉			3	

	銭名	国名	初鋳年	点数
銅銭	開元通寶	唐	621	17
	宋通元寶	北宋	960	2
	淳化元寶	北宋	990	1
	至道元寶	北宋	995	1
	咸平元寶	北宋	998	1
	天聖元寶	北宋	1023	6
	景祐元寶	北宋	1034	1
	皇宋通寶	北宋	1038	8
	治平元寶	北宋	1064	2
	熙寧元寶	北宋	1068	2
	元豊通寶	北宋	1078	7
	元祐通寶	北宋	1086	7
	元符通寶	北宋	1098	1
	聖宋元寶	北宋	1101	3
	大観通寶	北宋	1107	1
	政和通寶	北宋	1111	2
	淳熙元寶	南宋	1174	1
	洪武通寶	明	1368	16
	永楽通寶	明	1043	7
	無文			30
	判読不能			127
	計			243
	寛永通宝			4
合計				247

Ⅲ　小括

1　遺構

中央通路の発見

調査区南東部、現在の自然研究路付近で館の中央通路と思われる遺構を検出したことは、今年度調査でも特筆すべきことであろう。過年度の調査で、第二・三平坦面で確認したものは側溝外縁を含め4.0～4.2m前後の道幅である。本年度第一平坦面で検出したものは、ほぼ同じ道幅であり、それの延長と考えられる。複数年度の図面合成によるため、誤差などの修正が必要であり、いま少し検討しなくてはいけないが、第一平坦面と第二・三平坦面の中央通路は一直線上にのるものではない。これは館中心部をのせる丘陵の地形が、第一平坦面では西北部分が谷地形になり、第二・三平坦面よりも幅が狭くなるので、第一平坦面の中軸線が第二・三平坦面より、北東方向になってしまうために起きる現象と考えられる。あるいは通路を直線で見通せないように、意識的に軸線を変えていたとも当然考えられるので、この現象の要因は多角的に分析される必要がある。しかし、両者は館中央を貫き、館内を結ぶ意図をもって作られたことはほぼ間違いないであろう。

大規模な盛土造成

空壕Ｂの北に接する平坦面（曲輪）の南半部地区は盛土造成によって作られていることを改めて確認した。一部しか基盤層まで掘り抜いていない状態であり不明な点もあるが、第二平坦面より傾斜する地形の斜面を切岸し、二重の空壕を掘上げた時の土を用いて造成したと考えられる。

又、この平坦面上は14Ｋ15・14Ｊ11区部分を除いて、地割を施していないのが特徴である。これは第二・三平坦面で多数確認した地割、屋敷地ではなかったことを示唆していると推測した。

段や溝により画された地割

調査区北半部地区の中央通路に面する14Ｊ６区では、柱穴の大きさから検討すると第一平坦面にも中規模クラスの建物跡が想定できる。また建物跡の建て替え回数も第二平坦面同様５回前後は想定できそうである。北半部地区の地割は第二・三平坦面の地割と似た様相を持っていると考えられる。しかし、中央通路に面しない13Ｌ25区周辺地割、14Ｋ２区周辺地割は建物跡も想定できない状態で、今ひとつ状況が掴めない。又、第一平坦面北半部地区は大手方向だけではなく、沢に向かっても低くなる地形にあり、中央通路に面する地割と面しない地割での高低差は第二・三平坦面と比べると非常に大きくなっていて、かつ地割の長軸方向も一定してない様に思える。このような地形から見ると、第二・三平坦面とは異なる様相も持ち合わせている可能性も高い。概報XIXでも推測したように、第二・三平坦面と類似する要素は、中央通路に面する地割のみにしか適応しないのかもしれない。概報XIXでも推測したように、中央通路に面する地割が面しない地割を優越する現象として捉えることが可能かもしれない。今後の調査により具体像の解明が待たれる。

銭埋納遺構と想定される土壙48

勝山館跡では、これまでに約2,000枚程の銅銭が出土しているが、遺構内から纏まって出土したのは、これが初めてである。土壙内に箱が納められていたような痕跡を検出しているので、箱に納めて埋められたものと考えられる。所謂埋納銭と考えてよかろう。しかし、埋納の意図は全くもって不明である。一部遺構が攪乱を受け銭が四散している可能性もあり、埋納時の原型を保っていないのが残念である。

2　遺物

出土陶磁器の年代

珠洲Ⅵ期擂鉢をはじめとして、大窯Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期、16世紀第４四半期以降に位置付けられる、唐津・志野皿、漳州窯系のものと思われる染付皿など多種多様の陶磁器がある。年代的には勝山館築城当初から廃城期のものが一通り出土している。又、勝山館築城以前の年代に位置付けられ、伝世品と思われる青磁蓮弁文端反碗等が一部見られる。出土陶磁器の様相は第一平坦面が第二・三平坦面同様、勝山館築城期から廃城期まで機能していたことを示唆しているのだろう。当然、他地区からの流れ込みも考えられるが、しかし、壕を越えて遺物が大量に移動することは考え難く、基本的に第二・三平坦面から２次移動したものは少ないと考える。量的には壕内の第二・三平坦面同様、大窯Ⅰ期（第１・２小期）段階相当のものが最も多い。年代的には武田信広の勝山館築城期から２

代目館主の光広（信広子息）時代に相当すると思われる。この時期の遺物集中は、光広が松前大館に移動する前の勝山館の収容人員数を反映していることも考えられているので、今後細かい分析が必要となってくるであろう。灰釉稜花皿や大型の皿などあまり出土することが無い遺物も複数見られ、バリエーションも確実に豊になりつつあるので、瀬戸美濃製品に関しては更に注目して行きたい。

印のある白磁皿

過年度の出土遺物を再調査したところ、過年度の調査でも印を記した白磁皿が2個体出土していることが判明した。一点は第三平坦面館神八幡宮跡に近い地点で出土した。底部のみしか残存しないので形状は不明であるが、糸底であることから端反皿が推測される。高台裏には呉須で草花が描かれている。印は×印に見えるが、片方の先端には直角に交じわる線があり、鎌の様な形状を呈している。今回出土のものに似ている様な感じを受けるが、失われた部分に続きがあるので、断定できない。もう一点は空壕Aから出土している。これも底部の一部のみしか残存しないが、端反皿と推測する。高台裏に呉須で銘のようなものが描かれている。印の形状は三角形の様に見えるが、失われた部分に続くので、不明である。また、他にも高台裏に印が針書きされた瀬戸美濃鉄釉碗（大窯Ⅱ期、概報Ⅳ P.16第10図25）がある。今後、資料を再検討するに当たってこのような資料が確認される可能性があるだろう。

現段階では白磁皿というものに記すことが大きな特徴と思える。今の所、青磁や染付、瀬戸美濃灰釉碗・皿には見られない。上記の鉄釉碗の例はあるが、白磁が意図的に選ばれているのではなかろうか。

それでは、この印は一体どのような意味を持つのだろうか。先ず、印の形や底面に記す共通性から想起されるのが、擦文土器の底面にヘラがきの印が記されたものである。小平高砂遺跡、札前遺跡などの遺跡で多数見つかっている。他に印の形態から見て考えられる類例として、第27図に参考図を掲げた。1は松前城資料館所蔵（村岡ツヤ氏旧蔵）で、江戸後半の頃の落部（八雲）アイヌの門標といわれるものに記された印である。いわゆる「シロシ」を集成したものと思われる。2は岐阜県に伝わるもので、杣の所有を表すために木に記す印を集成したものであり「木印（キジルシ）」といわれるものである（久末久義、渡部孝三・孝之氏御教示）。また民具によく見られる焼き印や墨書した「家印（いえじるし）」にも似ている。いずれにしても所有を示す印であり、この白磁皿に記された印も所有印と推測される。

アイヌ民族博物館所蔵資料(虻田町亮昌寺旧蔵)には漆器碗の高台裏に印を付けたものがある（榎森進先生御教示による）。高台裏に記すという行為からは、それらとの共通項があり、そのことがアイヌ民族の印である可能性を示しているのではないか（長谷部一弘氏御教示による）という見方が出来そうである。しかし、高台裏に記す行為が、アイヌ民族特有のものと位置付けるにはまだ検討を要する点もある。石川県普正寺遺跡でも記号様の印は15世紀に位置付けられる切高台白磁皿に見られる。高台裏に記すという行為や、この様な記号は本州からやって来た和人社会にも当然あると考えられ、ただ印の形態からは、それがアイヌ民族のものか和人のものかはどちらとも言えない。

多種多様な遺物が多量に見られる出土地点の場のあり方を考えてみると、「送りの場」として想起されるかもしれない。しかし、「送り」遺構の概念が確立していない以上、そのような解釈は困難である。この場所は塀で遮蔽することによって大きな平坦面の中に小さな空間を区別して作り出していたことは間違いないが、遺構と遺物の関係が判然としない以上、これ以上遺構との関係の推測は差し控えたい。

アイヌ民族と和人が混在する地域にある勝山館の地理的位置、勝山館がアイヌ民族との日本海側の交易の拠点として位置付けされること、館内から大量に見つかった骨角器の存在を併せ考えると、白磁に記された印はアイヌ民族の「シロシ」と解釈することがよいと思われる。松崎が勝山館跡出土骨角器に見られる刻みを「シロシ」に近いものと位置付けたように、この白磁皿も器物に付けられた「シロシ」と位置付けたい。

今回出土した白磁皿は、勝山館跡出土陶磁器の一部がアイヌ民族に帰属していたことを示唆する重要な遺物と考えられる。しかし、上記の通り印を記す行為はアイヌ民族に限ったものではなく、他にも解釈の余地があることを明記しておきた

い。印のあるもの＝「非和人社会的なもの」と位置付けたわけではなく、あくまでも一つの試案として提示したものである。今後、陶磁器ばかりではく、器物全般に記された類例を渉猟した上で多くの方々と議論し、この遺物の持つ意味について再考したい。

かわらけ

勝山館跡ではあまり出土することが無く、中世の陶磁器に関する先行研究にも、非かわらけ地域と位置付けられる程である。出土物の殆どが、破片で点数は200点に満たない。平成四年度の調査で銅鋳造遺構から出土したもの（概報XⅣ P.22 第11図３）と５個体ほどが形状を窺い知れる。てづくね整形であることから、いずれも京都系のものと推測される。今回出土のものは平成４年度出土品よりも小さく、形態は北陸地域で16世紀前半に位置付けられる京都系土師器皿と非常に似ている。あるいは、北陸地域で作られた京都系土師器皿がもたらされたのではなかろうか。また金属加工に関係すると想定される場と遺物のある付近から出土していることは、平成四年度出土時に銅鋳造遺構から出土したこととも共通する。金属関係の職人と「かわらけ」に、どのような関係があったかは明らかに出来ないが、勝山館跡出土のかわらけの在り方を検討する上で、重要な視点になるであろう。

鍛冶関連遺物

鞴の羽口、坩堝片（銅用か）、スラッグが大量に出土している。第二平坦面の調査で出土した量に比べると格段に多い。遺構としては確認はされなかったが、この周辺部で鉄や銅の精製・加工などをしていた可能性が高い。昭和63年度の空壕Ｂに接する地区の調査では、鞴の羽口や鉄滓などが出土しているが、今回出土した遺物もそれらと関係するのではなかろうか。第97号竪穴建物跡覆土から坩堝片が大量に出土したことは、第96号竪穴建物跡同様、竪穴建物廃絶後、鍛冶作業の際生じたものを処理する廃棄坑として利用されたのかもしれない。

銅製仏具について

三具足の一つとして招来したものかと思われる花瓶が見つかっている。三具足は禅宗をはじめとする鎌倉新仏教の諸宗派などに見られる仏具である。今までは密教法具や念仏宗の鉦などを確認していたので、それらの宗派の存在を推測していたが、今回の発見から、禅宗の存在も想定することが出来るのかもしれない。しかし、三具足は「君台観左右帳記」に見られるように書院の床飾りとして用いられることもあり、即仏具とすることは出来ないのかもしれない。いずれにしても新出の銅製品という意味で、興味深いものと言えるであろう。

フローテーション作業で検出した微細遺物

鍛冶関連の遺物である鍛造剝片や不明溶解物、被熱した粘土塊などを検出している。粘土塊は鞴の羽口・坩堝片や、作業時に周辺の粘土（炉・張床？）が焼けたものと考えられる。あるいは、鋳型片であったのかもしれない。被熱した粘土塊は、平成６年度調査で検出した第59号竪穴建物跡でも多量に検出し、その一部は土壁が焼けたものと推測され、被熱した粘土塊には多様なケースが想定される。遺構の性格解明の為にも、今後特に注意すべき遺物かと思われる。他には炭化した米、小豆、山葡萄、胡桃などの種子、数種の不明炭化種子、獣骨・魚骨・貝類の細片なども多数見つかっている。

３　今後の課題

今回の調査は、壕外に位置する中心部の一端という地域の新たな一面を窺わせ、鍛冶関連遺物や印のある白磁皿、銭埋納遺構の初検出など予想外に収穫の多い調査であった。いつものことながら、遺物と遺構の関係と帰属年代の検討が不十分であることは、調査員の怠慢の結果であり、大変申し訳なく思っている。

今回の調査で特に感じるのは、遺物の化学的分析の必要性である。形態や、材質の肉眼観察が第一義的になされねばいけないのだが、遺物の持つ情報の最大限を引き出すためには化学的分析は避けて通れない。白磁皿の印の顔料（？）は早急に分析されねばならぬと感じる。又、鍛冶関連遺物も今回資料が増加した為、化学的分析が必要と思われる。幸い過年度までの調査では度々専門の先生に分析していただいて、興味深い結果をいただいている。しかし、長い期間の調査で資料が膨大に蓄積されている上に、遺跡の地区毎に遺物にも異なる様相があると思われる。地区毎にそれらを分析することによって、地区毎の性格が更に浮かび上がってくることが充分考えられる。新出土の

種子、骨などにも地区毎の種の違いや、過去の調査において未検出の種があることも考えられ、更なる調査が必要であろう。

陶磁器に関しては、勝山館跡出土陶磁器片４万点余りの内１万２千点以上を占める瀬戸美濃製品の整理は重要である。大窯Ⅰ・Ⅱ期（小期区分では第１・２・３小期）に位置付けられる端反皿の分類が、遺構の年代決定を考える上で重要であり、早急に再検討すべきである。同様に他の産地の製品も検討を必要とすることは言うまでもない。

未調査区には虎口推定地、中央通路の延長などがあり、又、地割の展開状況と建物跡の形態、鍛冶関連遺構の解明など数々の課題もある。今後の調査により、北半部地区の様相が明らかとなり、南半部地区との比較検討出来る日が待たれる。

Ⅳ　保存処理

１　鉄製品再処理

鍋、羽釜、火箸、火打金、釣り針、鎌、釘、鋏、小札、鏃、刀子など480点の処理を行った。錆除去後、エタノール脱水、パラロイドNAD-10のソルベントナフサ溶液による減圧樹脂含浸を行った。含浸処理後、接合等を行った。

保管はRP剤、酸素インジケーターとともに気密性の高いフィルムに封入している。

又、処理済みのもので錆が発生し、劣化が始まった鍋、弦、火箸、火打金、鎌、釘、鋏、小札、鏃、刀子など400点の再処理をあわせて行った。

劣化の原因は、樹脂の浸透が不充分だったことも考えられるが、保存管理に問題があったことも考えられる。以前はシリカゲルを一緒に封入していたが、その取り替えが充分行われなかったことも原因の一つと考えられる。除湿の為のシリカゲルが湿度を多量に含んだ状態のまま封入されていたことが悪影響をもたらしたのであろう。

２　銅製品

煙管、小柄、毛抜き、和鏡、銭など103点の処理を行った。エアーブラシ、メス等による錆除去後、エタノール脱水後、ベンゾトリアゾールのエタノール２～３％溶液による減圧樹脂含浸を行った。含浸処理後、接合等を行った。

保管はRP剤、酸素インジケーターとともに気密性の高いフィルムに封入している。

Ⅴ　まとめ

平成10年度の調査区は昭和63・平成元・２年度の調査区に隣接し一部重複する地区である。この３年間に亘る発掘調査によって、勝山館跡の第一平坦面と第二平坦面とは、大きな段差と二重の空壕で明確に区分されていることや段（空壕）の上である第二平坦面の端部には柵列が巡り、中央には橋が架けられ、櫓なども想定された。空壕は屈曲して設けられ、所謂、「横矢掛け」を呈することも判明した。又これらの構成は勝山館の形成された初期の段階、遅くとも16世紀初めを大きく下らない頃と想定した。これは一つには橋跡部分に通ずる第二平坦面上の中央通路に切られる竪穴建物跡の床面直上から越前擂鉢が出土した元年度の調査であり、今一つには、第一平坦面の最奥部に掘り切られた二重の空壕のうち「空壕Ｂ」とした外側の壕を渡る橋の柱跡に付属するとした、陶磁器を一括埋納した祭祀土壙を検出した平成元年度の調査によるところであった。平成２年度の調査で大型の建物跡が見つかり、第二平坦面の重要性が推され、以降昨９年度までの調査で「客殿跡」その他各種の建物跡が中央通路を挟んで両側に繰り返し立ち並ぶ様相を示し得たところである。

こうして第二平坦面の様相が推された結果、昭和63年度の調査で空壕Ｂの外側の平地に想定された建物跡や平成元年度調査で同じく空壕の外側に想定された建物跡の規模と第二平坦面の建物跡との相違、更には63年度に出土した鞴の羽口の存在等から、第一平坦面の果たした勝山館跡内での機能の解明が課題となった。

一方、第二平坦面に中央通路がしっかり通っていることから、その先に位置する空壕を渡る橋が、二重の壕を一直線上に通るのか、平成元年度検出の空壕Ｂを渡る橋との関係を明らかにすることは、今後の勝山館跡整備にあたっての導線・ルートの決定の上でも解決しておかなければならないこととなった。こうした経緯から、文化庁や北海道教育庁文化課のご指導の下、本年度の調査が実施されたところである。

調査区南東に町道の自然研究路が通る。この路から空壕Ｂに沿って40ｍ、通路沿いに16ｍ、寺ノ沢沿いに10ｍ、前面北東部36ｍ程の歪んだ台形状のおよそ530㎡程の平場が「空壕Ｂの外側の平地」である。この平場は前述のように空壕掘り上げ土等の土砂で北東から北西の範囲に広く盛り土、整形され作られている。この平地北部の盛り土が最も厚く1.2ｍを越える。しかもこの盛り土の平場の北東部は旧地形が沢状に入り込んで寺ノ沢に向かって傾斜しているが、更にこの傾斜部分を通路側から寺ノ沢方向に三段に削平している。この為、北部の平場とその下の削平面との段差が３ｍ余りをなす切り岸が作られている。

これは自然研究路を挟んで本調査区にほぼ対応する南東半の昭和63年度調査区下の狭い小さな段の東部の現地形が大きな段差を見せていることから若干の食い違いを作りながらも左右を対応させ、この第一平坦面の中を更に二段に区分していたことを窺わせている。しかも既述のように調査北隅の削平部分14Ｋ１区から珠洲焼Ⅵ期のかなり使いこまれた擂鉢が出土したことから、ほぼ勝山館跡の早い段階から、この形状は意図的に作られたことが推定されよう。

調査ではこの段差を補強・強調する意味でも前方及び寺ノ沢沿いで柵列跡を想定したが14Ｌ13・18区の小柱穴列を検出したのみであった。なお14Ｌ９・10区のＰ55～60、更にＰ11、12等の検出から、それらを繋ぐ塀の存在が想定される。

平場は大きく１～３号建物跡、96号竪穴建物跡等の検出された北西部と4～６号建物跡の検出された南東部に２分され使用されている。

北西半では平場の地形に長軸を平行する（空壕Ｂに沿う）３号建物跡とこれに長軸の直行する１、２号建物跡、そして竪穴96などが検出されている。３号と２号建物跡の新旧は不明であるが、２号建物跡よりは３号建物跡と１号建物跡が古い。２号建物跡と１号建物跡は間面、軸線がほぼ揃っており連続しての建て替えが想定される。従って３号建物跡はこの２、１号建物跡に先行すると推されよう。又Ｐ70・90・87・84・146（更には68？）と連なる柱列は、竪穴96に伴う塀状の柱列とも見れるが、今まで竪穴にこうした柱列の伴った例が無いことから、３号建物跡と軸線を同じくする建物跡の一部とも推される。尚３号建物跡を３×４間とし、その北西に１×３間の建物跡が併存すると推定しているが、尚３×６間の建物跡について

も留保しておきたい。尚２、１号建物跡の時期に、Ｐ47、48、50、51、66、69・68、38、31、28、26、25、22、45、44、42、41などの柱穴からなる小さな建物跡が併存したかと推される。或いはＰ64・62なども使用した１・２号建物と同様の建物跡も想定されるところであるが、これらについては、前述のように盛り土上での柱穴確認という困難さから、推測の域を出るものではない。

96号竪穴はその覆土中に瀬戸・美濃大窯Ⅰ期の碗などがあり、早い時期の廃絶が考えられる。遺憾ながら全ての遺物を観察出来ていないため、その年代はなお留保したい。又、本遺構は焼失による廃絶の状態を示すと推するが、陶磁器等の遺物の二次的被熱の無いことなどから、その跡地への二次的廃棄も想定されている。焼失時の竪穴に伴うものとすれば、竪穴の帰属一括遺物として、有用であるが、又そのセット等更に考えなければならない。他方二次廃棄についてはその帰属などについて接合関係も含め、検討が必要である。

南東半には４～６号建物跡とその北東部の溝と段、塀で画された区画が検出されている。この区画は更に北西と南東に２分されそうである。

４号建物跡の長軸はこの平場の長軸に直行し、５、６号建物跡のそれは平行する。又、４号建物跡と北東の区画とは併存しないであろう。４号建物跡は、北西半の２、１号建物跡と同形態で軸線も揃い、５・６号建物跡は３号建物跡と軸線をほぼ同じくする。しかし乍ら４号と５・６号建物跡の新旧関係は２・１号と３号建物跡のそれとは逆の関係にある。新旧の誤認の懼おそれも無い訳ではないが、むしろこれらの建物跡が、この平場全体中で併存するものであったと把えておきたい。そうすると３号建物跡に対応して４号建物跡があり、２・１号に対応して５・６号建物跡があったと想定することができ、その５、６号建物跡に併せて北東の区画も作られていたと推し得よう。又４号建物跡の北東面の２本の柱穴の欠失もこの時として矛盾がないとできよう。なお建物の性格等については遺物等も含め、更に検討を加えることとしたい。

南東半北部の区画は、南東のピットとその周辺に集中する鞴の羽口やスラッグが示す鍛冶作業空間と溝12・14等で画された区画に２分されるようである。双方に共通する不明溶解物がその区別を曖昧な物にしているが、むしろそれを除くと前述のようにピットと鉄滓、鞴の羽口という抽出が可能と推されるところである。

溝で画された北東側は記号の付された白磁皿の一括出土や銅銭埋納の土壙等が見られるが、作業等に関連するものは少なく、廃棄ないしは祭祀の場と考えるべきであろうか。擂鉢や他の陶磁器の出土の把え方によっては廃棄場所ともできるが、捨場としては狭く浅い空間であり、それを目的として画されたとすることは難しい。、松田の述べるようにそれぞれ分別の上廃棄されたとすれば、この区画は意識的に特定の物を廃棄した場所であって、一般的なゴミ捨場としての区画とは異なることになる。それ故にこそ小区画の浅い段でも有効ということでもあろうか。又こうした廃棄の場とした場合、その出自は５、６号建物跡に求めるのが自然であろう。しかしながら、銅銭埋納土壙と特殊な白磁皿、更には他の遺物等との間にどう一体性を持たせ得るかなど即断しかねるところがあり、今少し後考することとしたい。

この南東半の端部Ｐ379、203、245、244、251、252、253、254、263、270、254等の柱穴列がこの面を遮る塀等の柱列であろう。

この平場に隣接する自然研究路があるが、これと若干軸線を違えて、勝山館跡時代の通路が検出された。松田の述べるがごとく中央通路が第一平坦面をも貫いていることになろう。又その一部側壁に石積みが見られたのは新しい知見である。

この中央通路が空壕Ｂにとりつき、Ａを渡る橋と一直線、又は一体となってＢを渡るのか、平成元年度検出のＢを渡る橋を介してＡを渡るのかが今一つの課題であった。３号建物跡が存在している間はこのＢを渡る橋は使用できないのでそれ以降となろう。従って少なくともそれ以前は、中央通路の延長上を渡ったことと推される。これに関連して、土壙一括の陶磁器のうち越前の小甕を年代決定の示準とし、16世紀初め頃まで或いは遡るかともしたが、越前の年代観である16世紀第２四半期頃とすべきかも知れない。1529年瀬田内アイヌの攻撃前後頃である。

他に触れるべきところもあるが既に紙幅も尽きた。不充分なままに擱筆することをお赦し願いたい。諸先学皆様の変わらぬご指導をお願い申し上げ、結びとしたい。（松崎）

報告書抄録

ふりがな	しせき　かみのくにかつやまだてあと
書　　名	史跡　　上之国勝山館跡XX
副 書 名	平成10年度発掘調査環境整備事業概報
巻　　次	20
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	松崎水穂　松田輝哉
編集機関	上ノ国町教育委員会
所 在 地	〒049－0614　北海道檜山郡上ノ国町字大留100　01395－5－2230
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村名	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
勝山館跡（かつやまだてあと）	上ノ国町字勝山（かみのくにちょうあざかつやま）	013625	C-02-40	41° 48′	140° 6′	平成10年 5月11日 ～ 11月12日	800㎡	環境整備事業に伴う調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
勝山館跡	城　館	中　世	掘立柱建物跡6棟 竪穴建物跡5棟 通路跡	陶磁器 青磁・白磁・染付 赤絵 朝鮮 瀬戸美濃・志野・ 越前・珠洲 唐津　かわらけ 鉄製品 鍋・刀子・小札 銅製品 武具・仏具・銭 骨角器	鉄滓、坩堝、鞴の羽口などの鍛冶関連遺物が多量に出土した。 京都系土師器皿が出土した。 高台裏に印のある白磁皿が7個体出土した。

図　版

ＰＬ．１　調査区全景

1　調査区全景（北東から）

2　調査区全景（南西から）

1　14J16鞴羽口出土状況

3　第96号竪穴建物跡かわらけ出土状況

2　土壙48銅銭出土状況

4　焼土19灰釉皿出土状況

PL. 2　鞴羽口出土状況

1　印のある白磁皿

2　印のある白磁皿

3　舶載陶磁器

4　瀬戸美濃灰釉碗・皿

1　瀬戸美濃灰釉皿

2　かわらけ

3　鍛冶関連遺物

4　土壙48出土銅銭

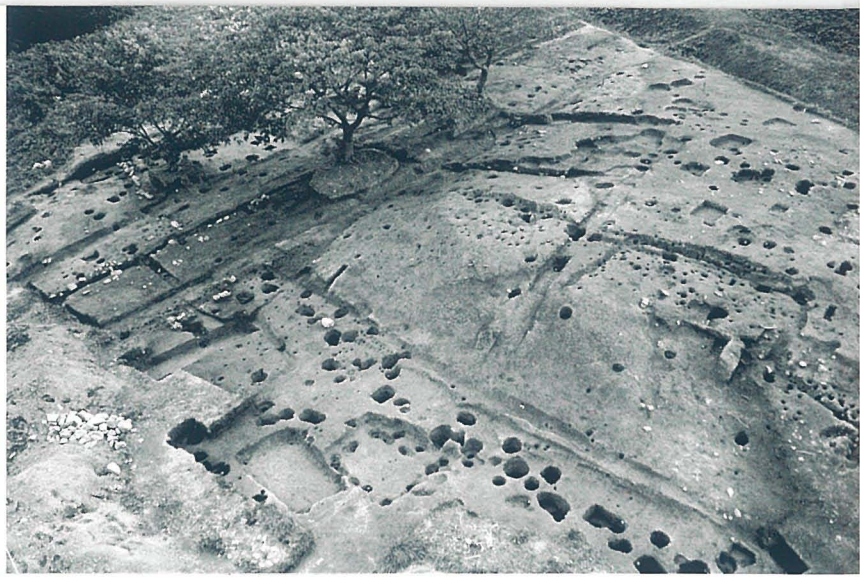
1　調査区全景（北東から）

2　調査区全景（南西から）

1　中央通路検出状況（北東から）

2　中央通路南側溝検出状況（北東から）

PL. 6　遺構検出状況



1　中央通路検出状況（北から）

2　中央通路検出状況（西から）

3　中央通路南側溝堆積状況（北西から）

1　調査区北西部（北東から）

2　14L 5区周辺地割炭化材出土状況（北東から）

3　14L 5区周辺地割炭化材出土状況（北西から）

4　14L 5区周辺地割炭化材出土状況（北東から）

5　14L 5区周辺地割（南東から）

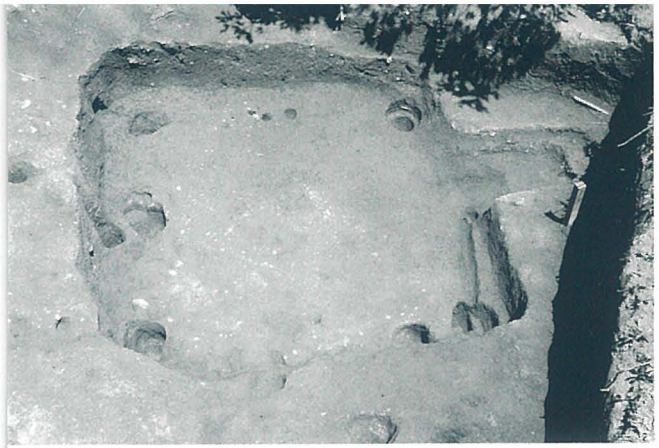
6　14K 1区珠洲擂鉢・灰釉皿出土状況

PL. 9 遺構検出状況

1 調査区中央部（北東から）

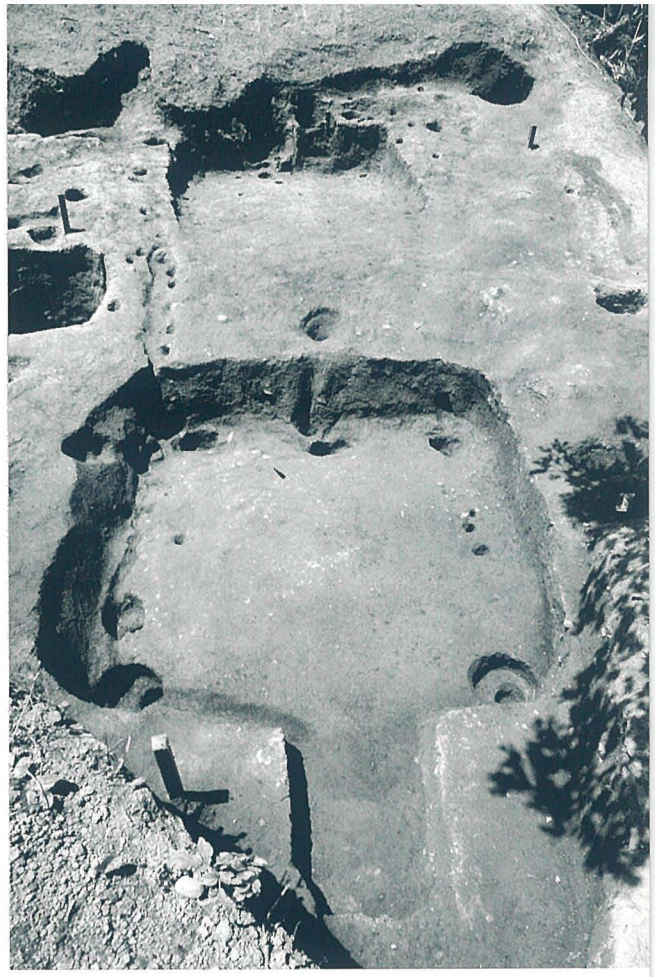
2 14K2区周辺地割（北東から）

3 調査区南東部（北東から）

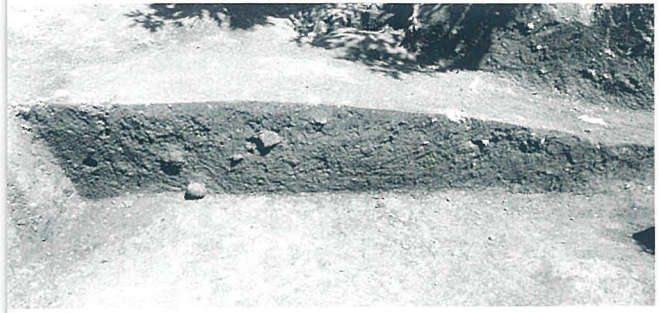


4　第75号竪穴建物跡（南東から）

2　第74号竪穴建物跡（南東から）



1　第74・75号竪穴建物跡（北東から）



5　第75号竪穴建物跡堆積状況（南東から）

3　第74号竪穴建物跡堆積状況（南東から）

1　第96号竪穴建物跡　炭化物層検出状況（南東から）

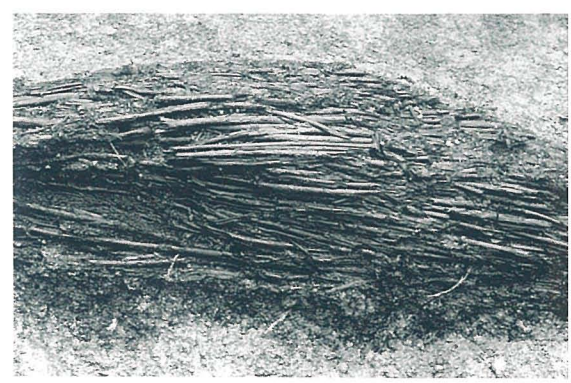
2　第96号竪穴建物跡　炭化材出土状況（北東から）

3　第96号竪穴建物跡（南東から）

4　第96号竪穴建物跡（北東から）

5　第96号竪穴建物跡　灰釉皿出土状況

7　第96号竪穴建物跡南側　炭化材出土状況（北西から）



8　第96号竪穴建物跡
炭化材出土状況
（部分）

6　第96号竪穴建物跡　灰釉碗出土状況

9　第96号竪穴建物跡
かわらけ出土状況

1　第97号竪穴建物跡　坩堝出土状況（北西から）

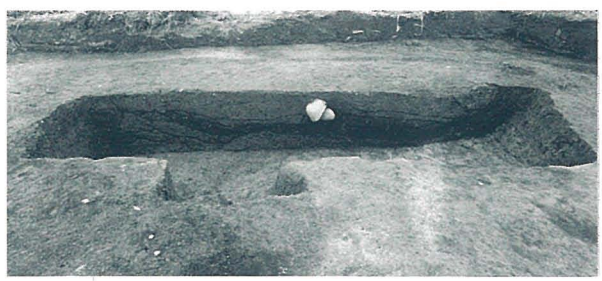
2　第97号竪穴建物跡　坩堝出土状況（北東から）

3　第97号竪穴建物跡（南東から）

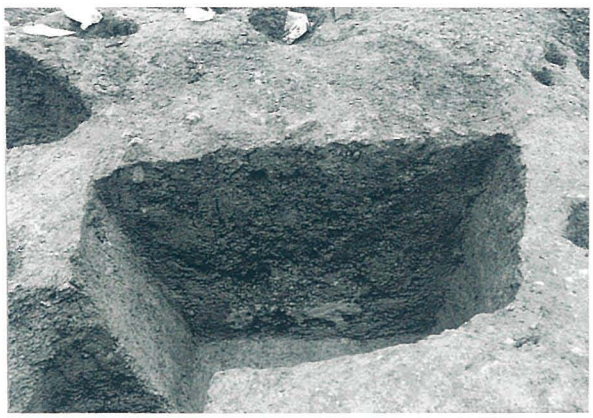
4　第97号竪穴建物跡（北東から）

5　第98号竪穴建物跡・土壙41（南東から）
6　第98号竪穴建物跡・土壙41（南西から）

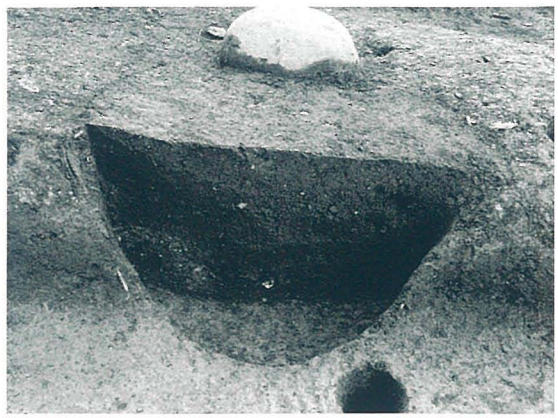
7　土壙41（南西から）



8　土壙41堆積状況（南西から）



1　土壙23堆積状況（北東から）



2　土壙（南東から）

3　土壙40堆積状況（北西から）

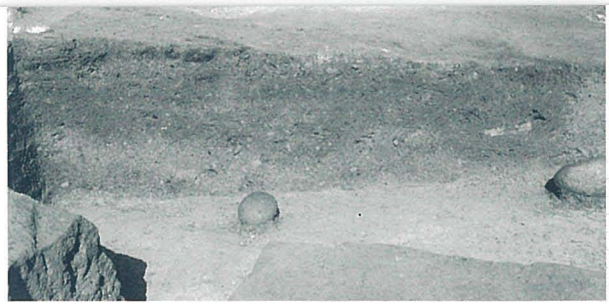
4　土壙40（北東から）

5　焼土２・３半裁状況（北東から）

6　焼土２・３（北東から）

7　土壙22堆積状況（南西から）

1 土壙46検出状況（南西から）



2 土壙46堆積状況

3 土壙46刀子出土状況

4 土壙46灰釉皿出土状況

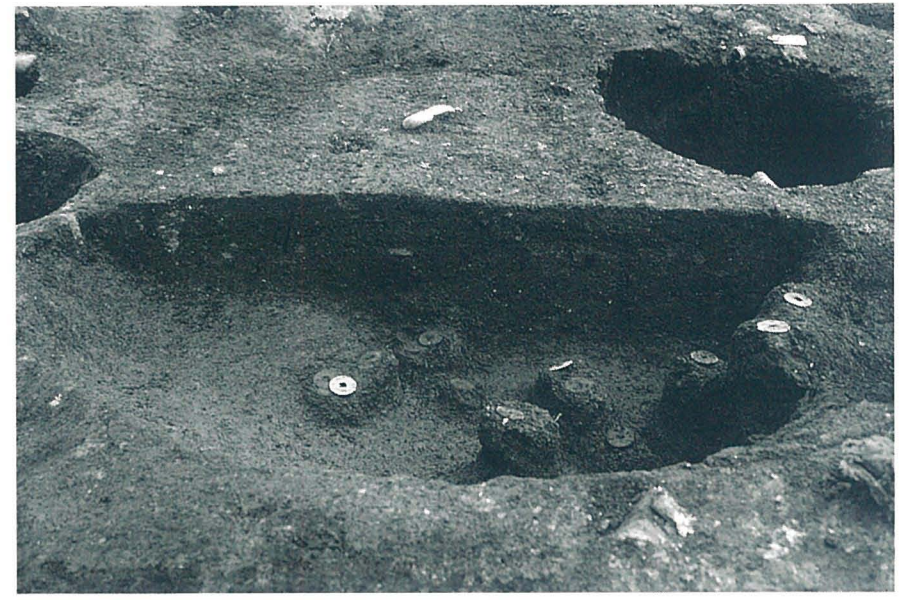
5 花瓶出土状況

6 刀子出土状況

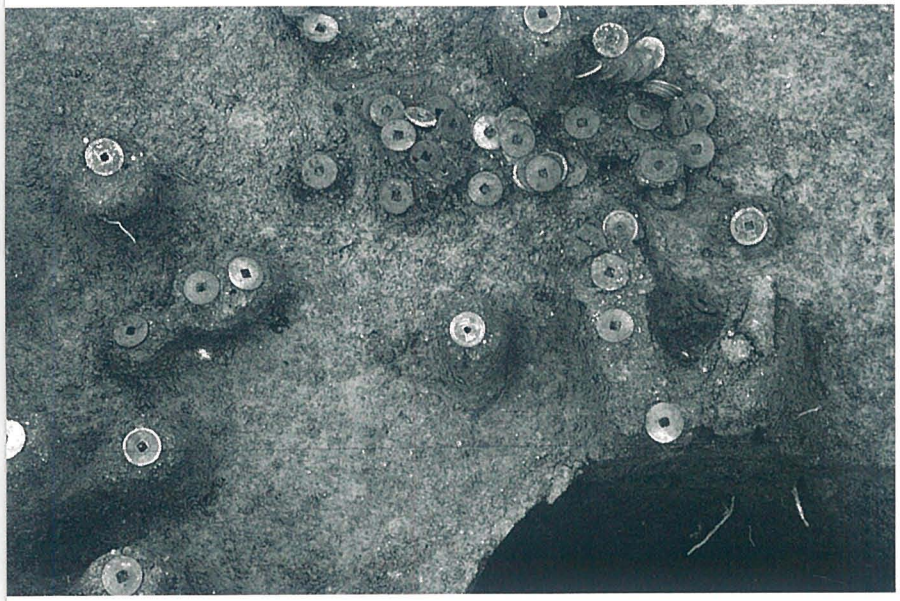
7 銅製品出土状況

8 溝23 鞴羽口出土状況

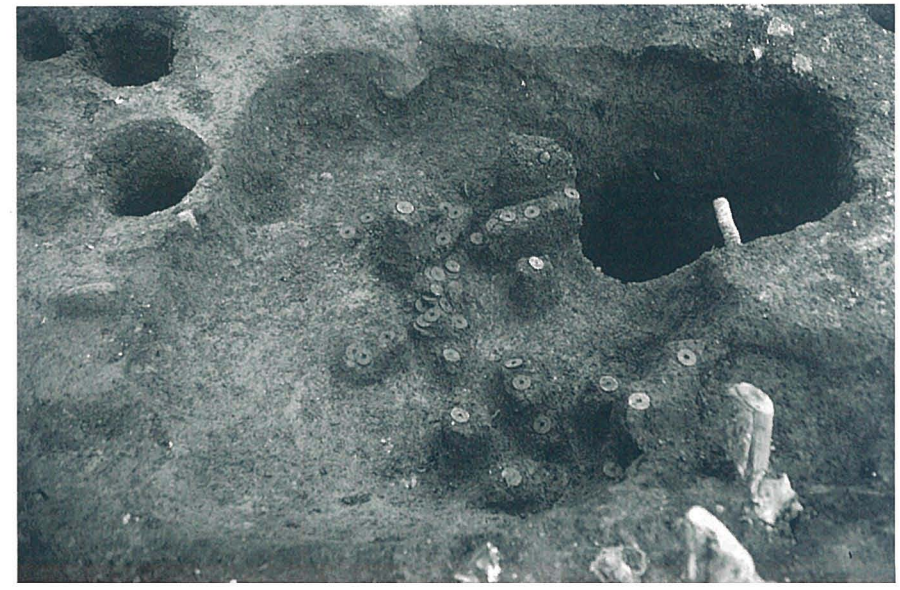
9 溝18 とりべ出土状況



1 土壙48土層堆積状況（北東から）



3 土壙48銅銭出土状況（北西から）



2 土壙48銅銭出土状況（北東から）

4 土壙48（北東から）

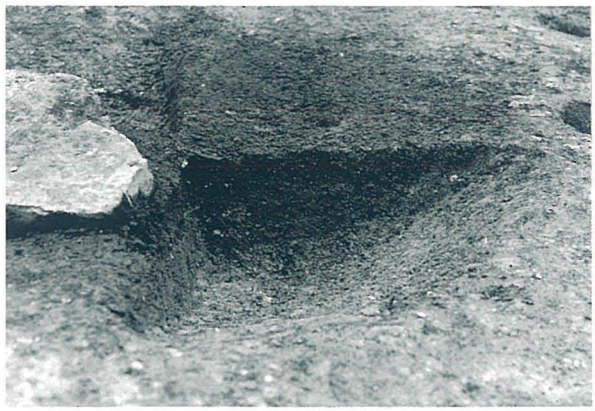
1 14K15区周辺地割（北東から）

2 14K20区土層堆積状況

3 鞴羽口出土状況

4 鞴羽口下ピット

5 鞴羽口下ピット堆積状況



6 鞴羽口下ピット堆積状況

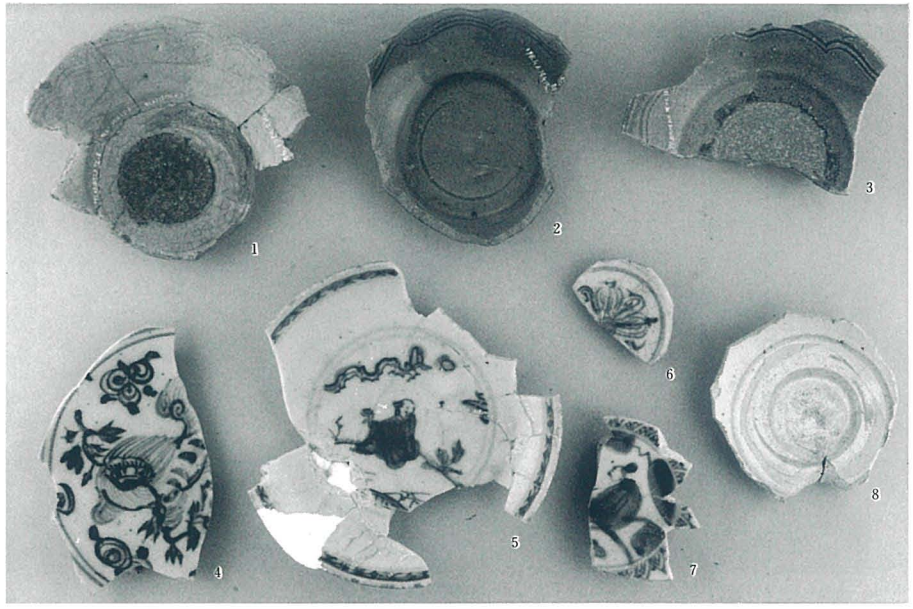
PL. 17 出土遺物

1

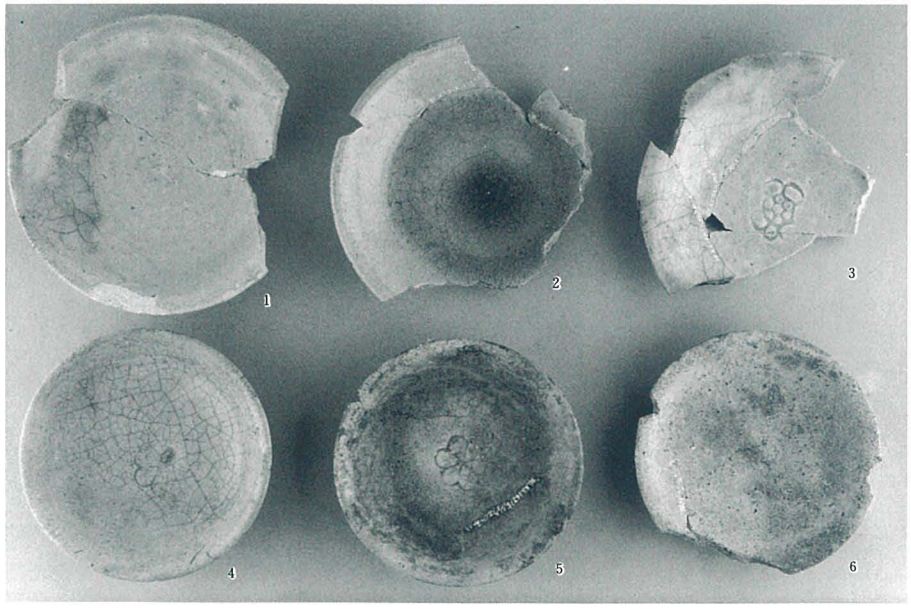
2

3

4

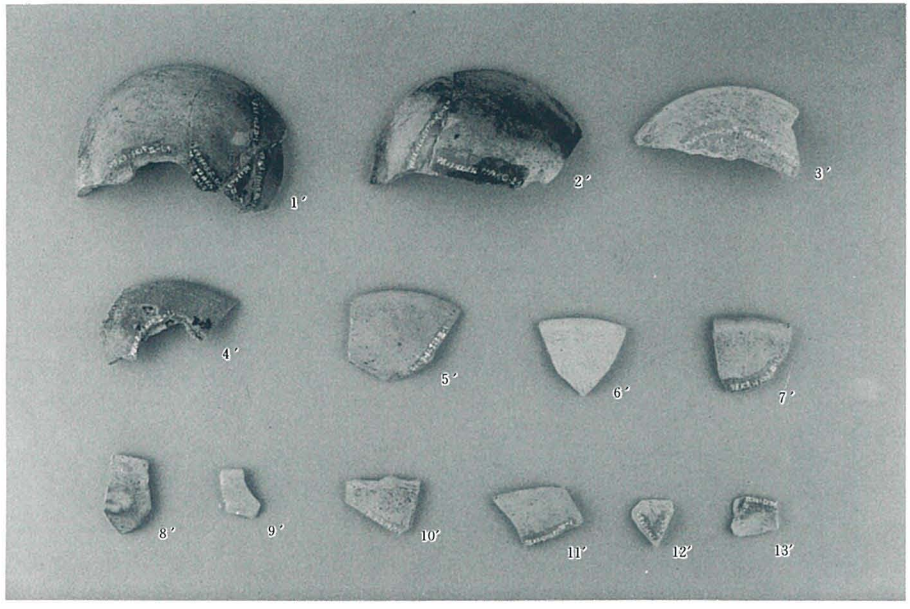


1　青磁・染付皿

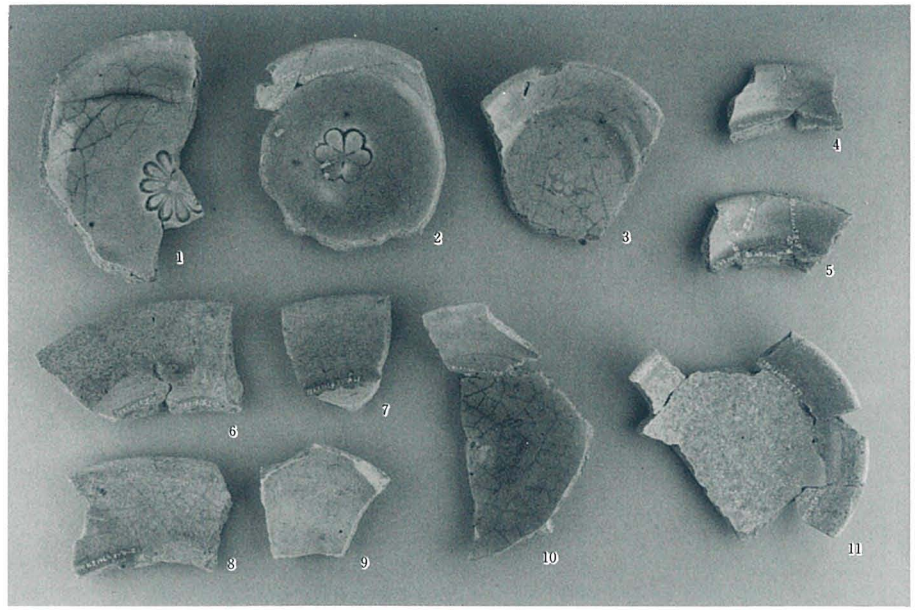


2　瀬戸美濃灰釉皿

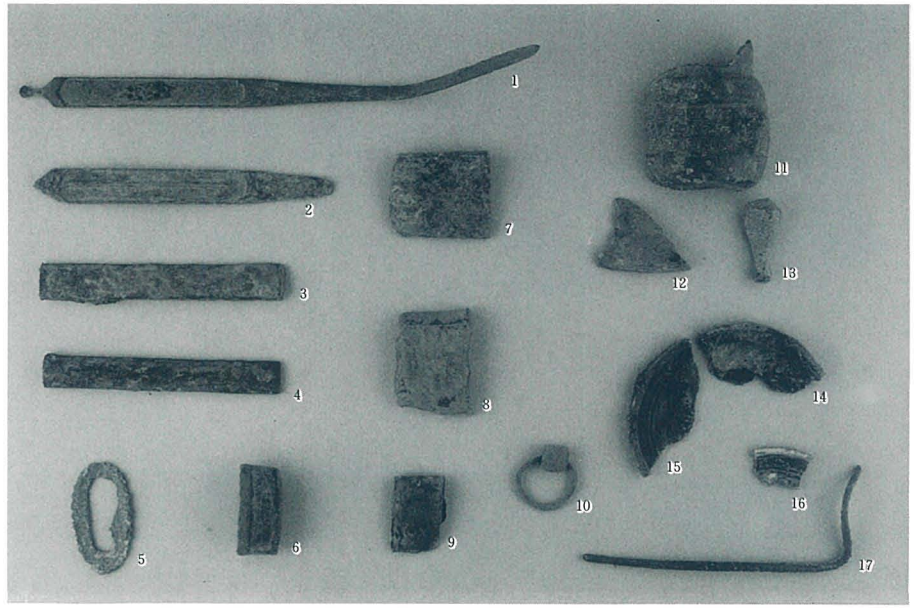
3　かわらけ



4　かわらけ

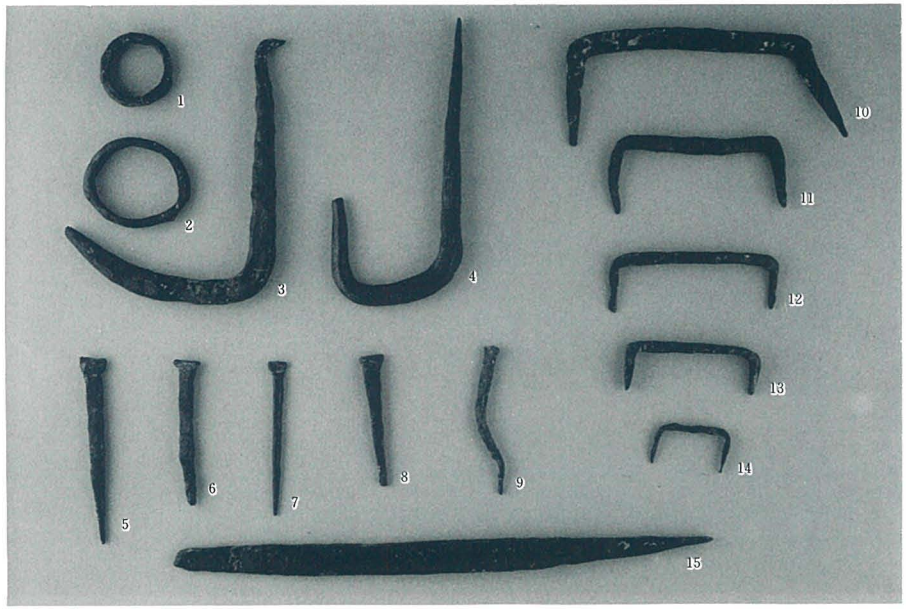


1 瀬戸美濃灰釉皿

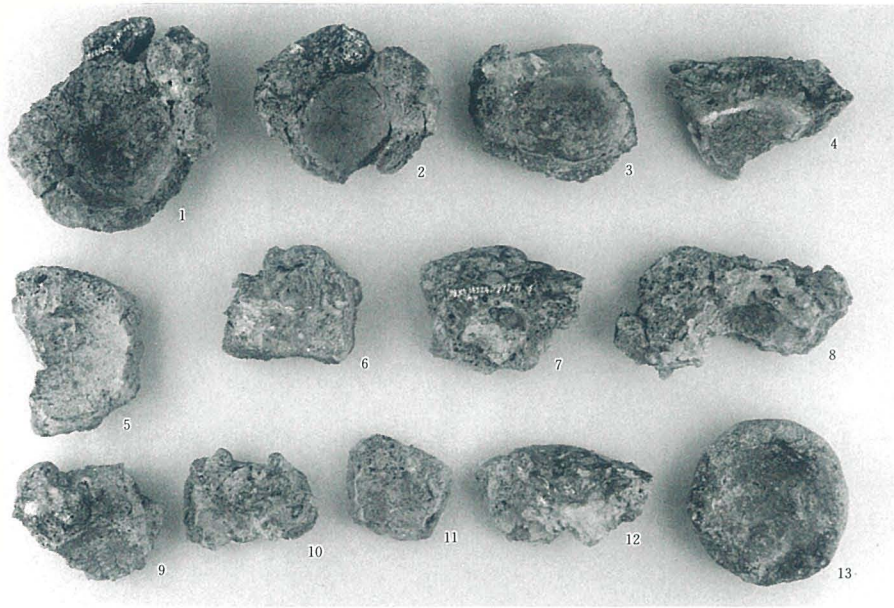


2 銅製品

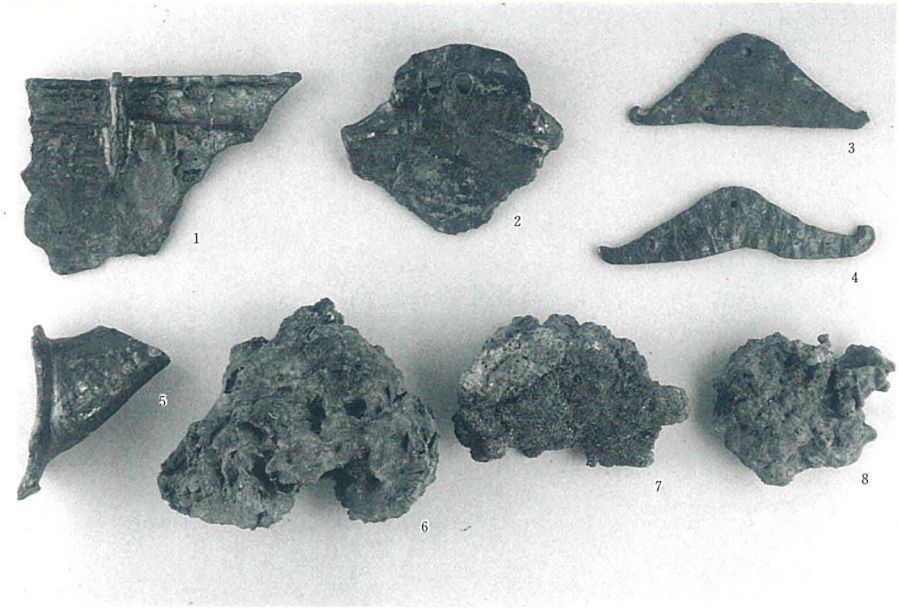
3 鉄製品



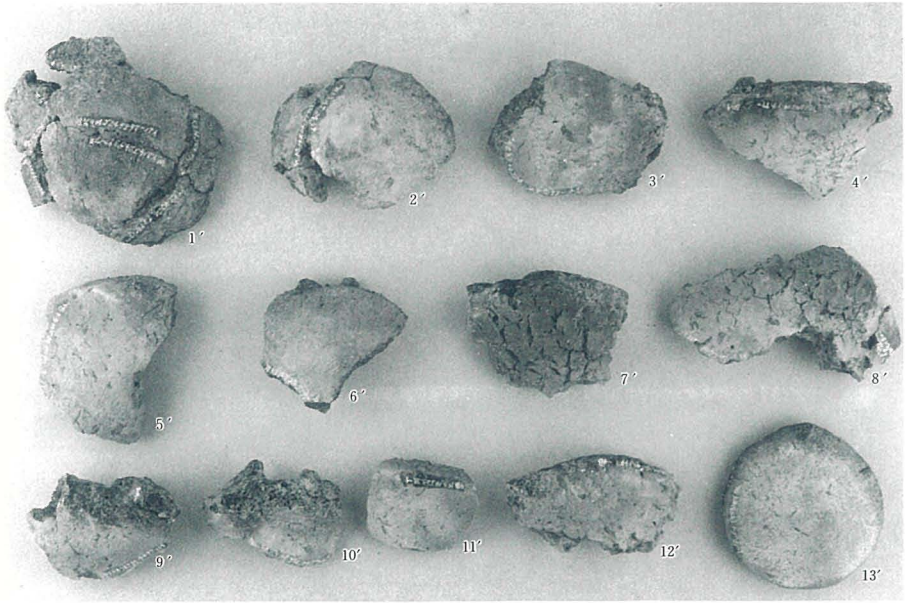
4 鉄製品



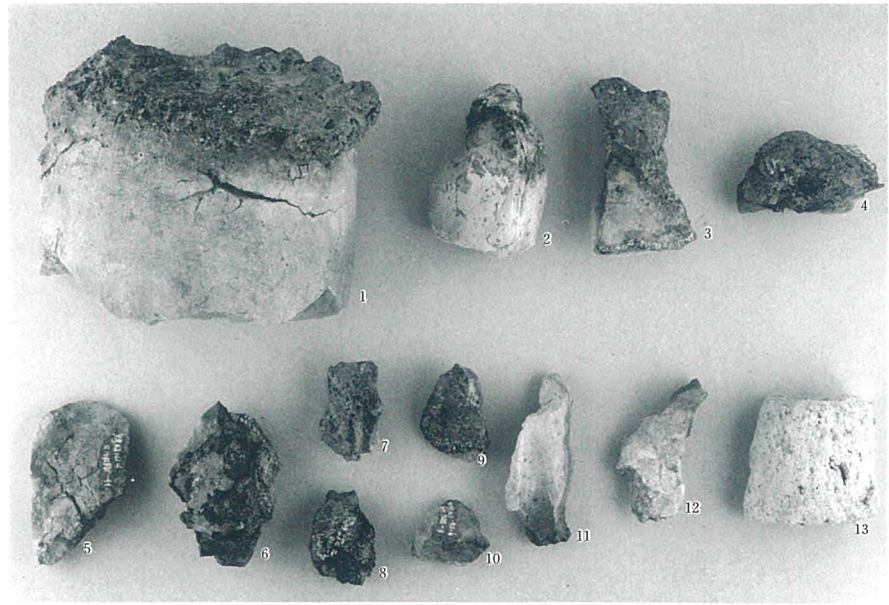
3 坩堝



1 鉄製品・スラッグ



4 坩堝



2 鞴羽口

史跡　上之国勝山館跡　XX

— 平成10年度発掘調査環境整備事業概報 —

発　行　　上ノ国町教育委員会

　　北海道桧山郡上ノ国町字大留100

印　刷　　平成11年３月27日

発　行　　平成11年３月31日

印刷所　　富士プリント㈱

史跡上之国館山城跡XX　附図　遺構全体図